

第2章 F区の調査

F区はE区と同じ浪ノ上支丘にあるが、E区とは東西に開析された「かにあらゐの沢」と呼ばれる小浸食谷によって分断されている。分断された浪ノ上支丘の西側で北側の台地縁端部には稲荷山1号墳と稲荷山2号墳が所在する。この両古墳の南側で、「かにあらゐの沢」に面した台地縁端部一帯がF区である。F区は台形状を呈し、上底は南側の端にあたり約10m、下底は北側の端にあたり約30m、高さは南北約60mで面積は約1200㎡であるが、実際の調査面積は約700㎡、全体の58%にあたる。このF区から竪穴住居址が8軒、土坑が5基検出された。

第1節 竪穴住居址

F区から検出された竪穴住居址は8軒である。竪穴住居址F-SB1とF-SB2、F-SB3、F-SB4の4軒は稲荷山2号墳の南東周溝から2m～18m南東に位置している。竪穴住居址F-SB5とF-SB6、F-SB7、F-SB8の4軒は稲荷山2号墳の南東周溝から32m～52mの範囲に位置している。

1、竪穴住居址F-SB1

(1) 遺構 (挿図第56・第57・第58、図版第39の1)

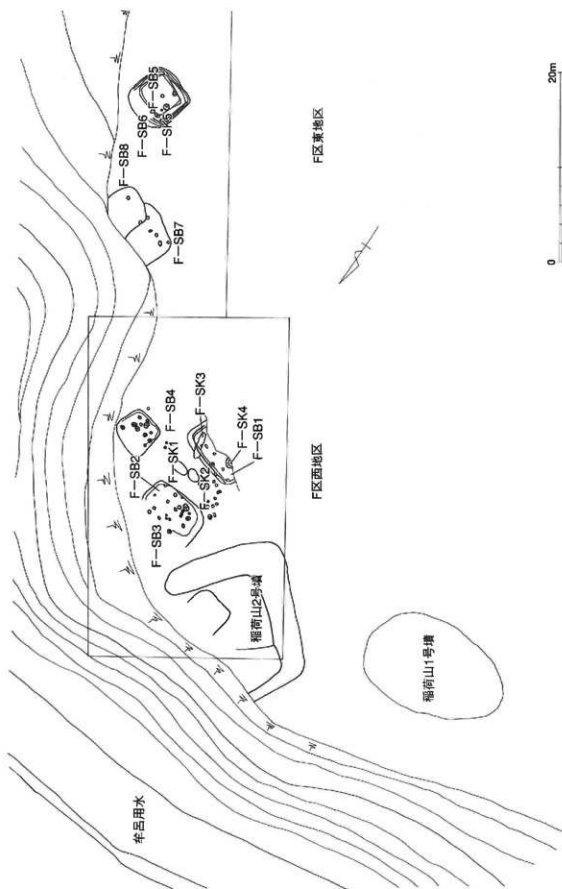
竪穴住居址F-SB1は稲荷山2号墳の南東周溝から6m～14m南東に所在する。竪穴住居址の南西側2/3は竹藪にあたり調査できなかった。北壁は土坑F-SK3を掘り込んでいる。逆に、土坑F-SK4は床面を掘り込んでいる。削平面から床面までの深さは6cm～16cmである。壁溝は西壁と北壁それに東壁の約1mの範囲に認められる。壁溝の幅は20cm～36cm、深さは6cm～10cmである。床面の長さは北壁から1m内側の床面上端で東西が6.50m、南北は西壁では北壁から1m、東壁では北壁から2mほど残存しているが、それ以外は不明である。平面形は北東壁と北西隅はともにわずかに円みを帯びている。北壁はほぼ直線であることから隅円長方形であろう。東壁と西壁の中軸線の方位はN-14°-Eである。

竪穴住居址内外で9個のピットが検出されたが、柱穴にあたるのはP3(20×18×12)、P5(24×20×21)、P7(26×25×10)、P8(22×21×27)であろう。南西部と南東部は未調査のため不明である。P1(14×14×6)、P2(20×16×16)、P4(20×14×17)、P6(13×12×27)、P9(21×16×14)は壁近くにあり、壁押さえ等のピットと考えられる。

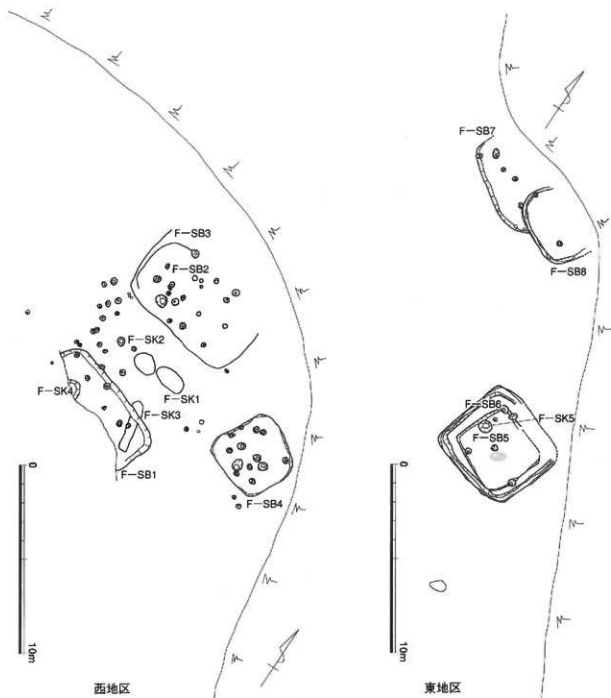
貯蔵穴と炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第64の1～3)

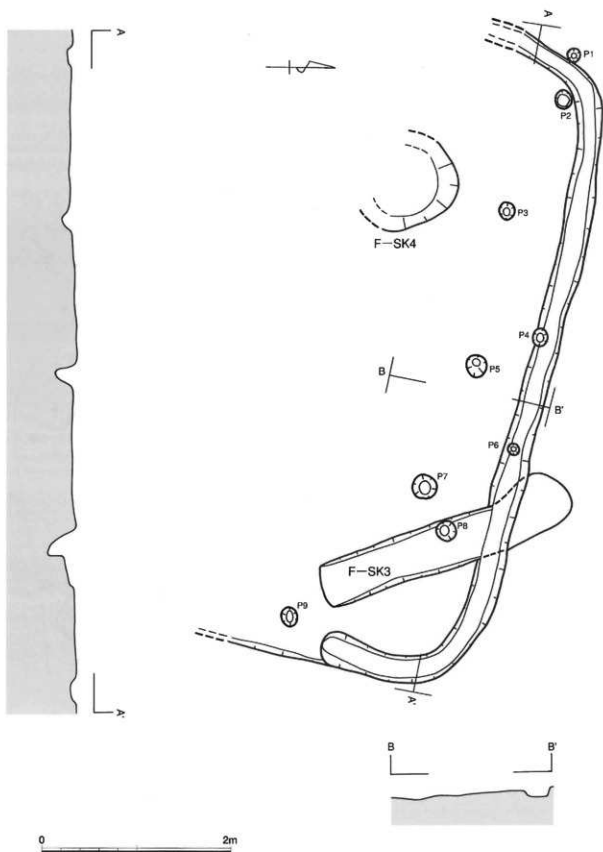
1～3はF-SB1の床面から検出した遺物である。1は甕の口縁部破片である。大きく外反する口縁部に角張った口端部をもつ。口端にはヘラ状器具により刺突したキザミが認められる。内外面はナデ調整を施している。2・3は壺の破片である。2は胴部で、ヘラ状器具による沈線の上に同器具



挿図第56 F区全体における遺構の分布と稲荷山2号墳



挿図第57 F区の東地区と西地区における遺構の分布



挿図第58 竪穴住居址F-SB1、土坑F-SK3・F-SK4実測図

による斜格文が施されている。3は頸部で、ヘラ状器具による横線の上に斜格文が施されている。

土器は弥生時代中期後葉の長床式土器で、本竪穴住居址もこの時期に営まれたものである。

2、竪穴住居址F-SB2

(1) 遺構 (挿図第56・第57・第59、図版第39の2・第40)

竪穴住居址F-SB2は稲荷山2号墳の南東周溝から2m~10m南東に位置しており、現状は竪穴住居址F-SB3の内側に所在する。削平面から床面までの深さは約20cmで、F-SB2の床面がF-SB3より低くなっていた。西壁の3mと北壁のおよそ1mが検出された。西壁が膨らみをもった曲線で北西隅は隅円になっている。

柱穴は位置や大きさ、深さからP2(24×24×7)が関係するように思われるが不明である。貯蔵穴や炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第64の8)

8はF-SB2の床面から検出された甕の胴部破片である。脚台をもつものと考えられ、内外面はミガキに近いナデ調整を行っている。

弥生時代中期後葉の長床式土器で、本竪穴住居址もこの時期に営まれたものである。

3、竪穴住居址F-SB3

(1) 遺構 (挿図第56・第57・第59、図版第1の2・第40)

竪穴住居址F-SB3は、出土遺物の時期や遺構の切り合い状態から、竪穴住居址F-SB2が放棄された後構築されたものであろう。北壁は挿図第59の断面図A-A'で想定されるように緩やかに北に傾斜しており、北東側は壁が削平され滅失している。削平面から床面までの深さは14cm~20cmである。壁溝は認められない。平面形は西壁が膨らみをもった曲線で、南西隅と北西隅は隅円になっている。南東隅はやや円みが少なく、東壁は少し膨らみをもった曲線である。北壁は不明だが南壁はほぼ直線状である。床面の長さは東西6.30m、東壁が南西隅から2m、西壁が南東隅から2.70m残存しているが南北の長さは不明である。平面形は隅円方形または隅円長方形であろう。東壁と西壁の中軸線の方位はN-5°-Eである。

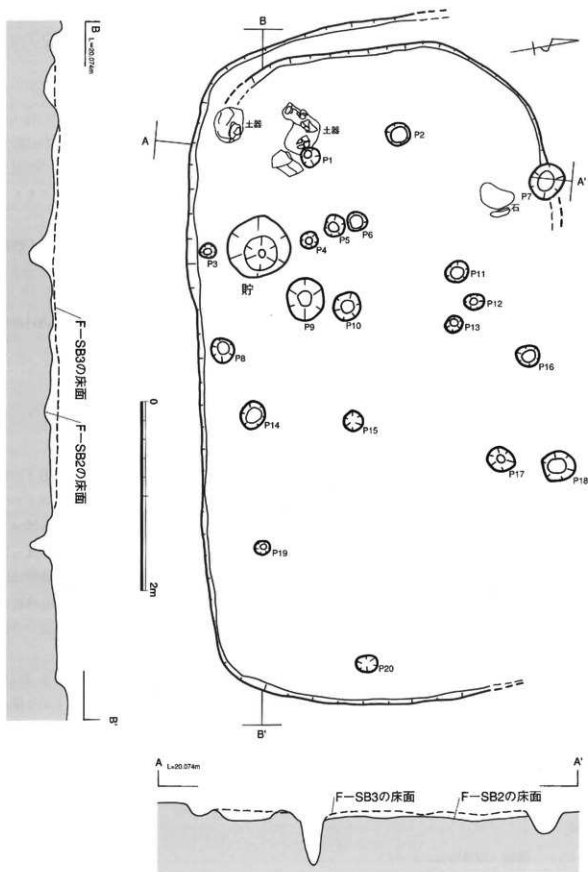
柱穴及びピットは竪穴住居址内から20個検出されている。柱穴はP1(20×20×47)、P5(24×22×29)、P7(38×32×22)、P9(40×38×34)、P18(33×30×32)、P19(15×12×21)の6個が関係しているであろう。穴の径が小さく、浅い小柱穴またはピットは、P3、P4、P6、P8、P10~P17の12個が認められるが、用途は不明である。

貯蔵穴は南西壁寄りにあり、平面形はほぼ円形で断面形は鍋底形である。その規模は上端で68cm、下端は34cmである。深さは22cmであるが、中心部は深くっており32cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第64の4~7)

4~6はF-SB3の床面、7はSB-3の埋土中から見出された遺物である。

4・5は甕の口縁部から上胴部にかけてのものである。いずれもくの字状に開く口縁部をもち、口



挿図第59 竪穴住居址F-SB2・F-SB3実測図

端部は丸く仕上げられている。内外面の調整は、4がナデ調整、5がハケメ調整で仕上げている。6は厚手の器壁をもつ大型の壺の口縁部である。口頸部は斜めに開き口縁近くで折れ曲がる。口端の下方は一部欠損しているが、この面にクシ状器具による横線文が施されている。口縁部の内面にはクシ状器具による羽状文を施している。外面に薄いハケメ調整痕が認められ、内面にはナデ調整痕が見られる。7は製塩土器の角形をした脚部である。磨滅が著しいが、縦位の指痕が残る。脚の横断面形は円形である。

F-SB3の床面から検出された遺物は王江式土器の時期と考えられる。また埋土中から見出された製塩土器は奈良時代から平安時代の製品であろう。本竪穴は古墳時代前期に営まれたものであろう。

4、竪穴住居址F-SB4

(1) 遺構 (挿図第56・第57・第60、図版第41の2)

竪穴住居址F-SB4は稲荷山2号墳の南東周溝から13m～17m南東に位置する。削平面から床面までの深さは10cm～27cmである。壁溝は認められない。床面の長さは東西が南壁で3.50m、南北が東壁で2.80m、中央で3.50m、西壁で3.60mである。面積は約12㎡である。平面形は現状では隅円台形である。東壁と西壁の中軸線の方位はN-18°-Eである。

柱穴は17個あるが、そのうち主柱穴はP2(20×19×9)、P3(24×22×30)、P4(34×30×12)、P5(23×21×12)である。それぞれの柱穴間の長さは、P2～P3が2.00m、P3～P4が2.10m、P4～P5が2.00m、P5～P2が2.00mで、柱穴を結ぶとほぼ正方形に近いものになる。この点から平面形を考えると隅円台形になる可能性がある。南西壁沿いのP16(10×10×-)、P17(10×8×20)は入口用ピットで、両ピット間の長さは87cmである。

貯蔵穴や炉址は検出されなかった。

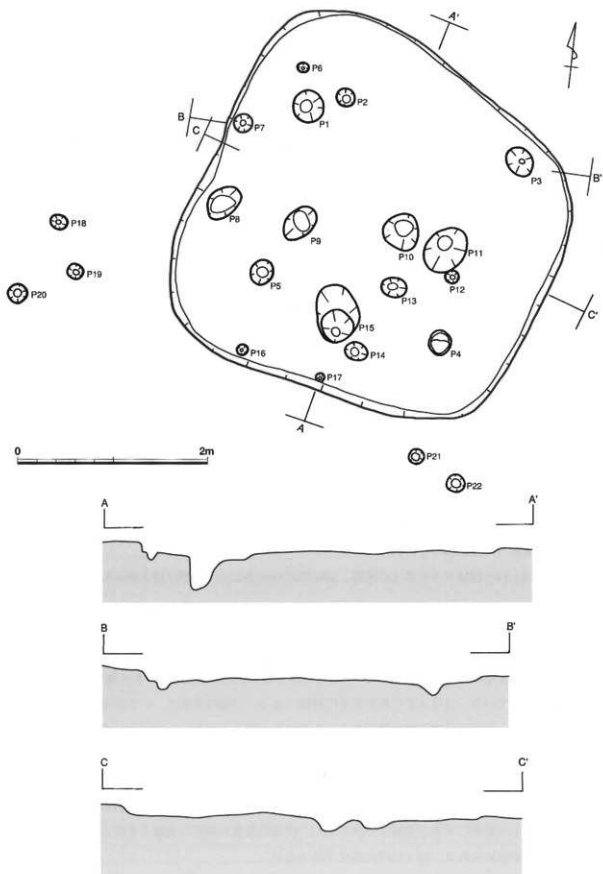
(2) 遺物 (挿図第64の9～16)

9・11・12・14～16はF-SB4の床面、10は竪穴内の小ピット、13は埋土中から見出した遺物である。

9～12は甕の各部位である。9は口縁部から胴部である。緩やかに外反する短い口縁部をもち、口端は丸く仕上げている。外面はナデ調整を行っている。また上胴部から頸部まで煤の付着を見る。10は緩やかに外反する口縁部をもつもので、口端は丸みをもつ。外面には薄いハケメ調整を施した後に、ナデ調整を行っている。11は大きく外反する口縁部である。口端は角張り、ヘラ状器具によるキザミを巡らしている。12は台付甕の脚台部である。上方はやや厚みがあり、ハの字状に開き、脚台端は丸みをもつ。

13～16は壺の各部位である。13は口縁部である。口端面に一条の沈線が認められ、内面にはクシ状器具の刺突による羽状文が施されている。14は上胴部で、外面には半裁竹管状の器具により横線を施し、同器具により直角に下垂する線で区画を成し、内部に乱れた縦位の波線文を配している。内面にはナデ調整痕が認められる。15・16の底部は平底である。

F-SB4の床面と小ピット内から検出した土器は、弥生時代中期後葉の長床式土器である。13は古墳時代前期の古式土師器であり、F-SB3と同時期のものと考えられる。本竪穴は弥生時代中期



挿図第60 竪穴住居址F-SB4実測図

後葉に営まれたものであろう。

5、竪穴住居址F-SB5

(1) 遺構(挿図第56・第57・第61、図版第41の1・第42の2)

竪穴住居址F-SB5は稲荷山2号墳の南東周溝から48m～53m南東に位置し、竪穴住居址F-SB6の中に取り囲まれた状態で所在している。挿図第61の断面図から認められるように床面はF-SB6の床面より10cm～21cm低い。南壁はF-SB6の壁溝で1.50mほど掘り込まれている。土壌F-SK5に床面は攪乱されている。削平面から床面までの深さは29cm～34cmである。壁溝は認められない。床面の長さは、東西が北壁で3.40m、東壁と西壁の中軸線と北壁・南壁との交点で3.70m、南北が西壁で2.80m、南壁と北壁の中軸線と東壁・西壁との交点で3.06m、面積は約11m²である。平面形は長方形で、東壁と西壁の中軸線の方位はN-18°-Wである。

柱穴は長方形をした竪穴住居址の対角線の交点近くにあるP4(25×18×14)の1個が検出されている。F-SB6とF-SB5の床面の高さから、貯蔵穴1と炉址はF-SB5の遺構と考えられる。

貯蔵穴1は平面形が楕円形で、断面形は浅いU字形である。その規模は長径51cm、短径35cm、深さ10cmである。炉址は中央東側で認められ、長径102cm、短径56cmである。貯蔵穴からも炉址からも土器片が検出されている。

(2) 遺物(挿図第65の17～28)

21～28はF-SB5の床面、17～20・29は竪穴の埋土層から見出された遺物である。

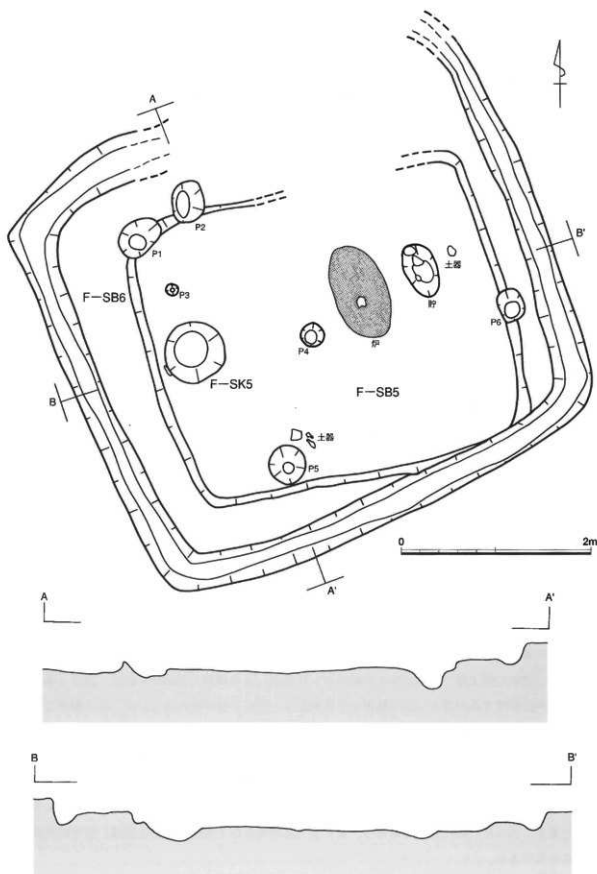
17は深鉢の口縁部の破片で、緩やかに外反し、口端は角張り平坦面をつくる。この面に2条の凹線を巡らしている。外面には横位の粗い条痕が残る。内面の調整痕は磨滅して定かでない。

18～20・25～27は壺である。18は上胴部の破片である。外面に目の細かいクシ状器具により横線文を施し、ヘラ描き単線による縦位の切断線が認められる。19も上胴部の破片で、4条一組のクシ状器具による横線文が配されている。20も4条一組のクシ状器具により横線文を施し、上下に同器具による波線文を配している。25は小形の胴部から下胴部の破片である。胴形は算盤玉状を示している。26・27は平底の底面をもつ底部破片である。27は底面に凹みをもつ。21～24は高坏の各部位である。21は坏部である。外面に稜をもち口縁部が外反する皿状の坏部である。口端に丸みをもつ。22～24は脚高の高い筒状の脚上部である。全て外面にクシ状器具による横線文が認められる。22は4条の横線文間に3列の刺突文列が巡る。23は横線文を3条配し、円孔3個が穿たれている。24は横線文が3段配されている。

28は黒曜石製の石鏃である。基部は剥離しており先端部が残る。

29は銅製の穴銭である。「寛永通寶」と判読できる。新寛永である。

SB5の埋土中から見出された17は、条痕系の水神平式土器、18～20は弥生時代中期後葉の長床式土器である。29は江戸時代後期であろう。また竪穴の時期を示す床面出土の土器は、弥生時代後期の寄道式土器である。



挿図第61 竪穴住居址F-SB5・F-SB6、土壇F-SK5実測図

6、竪穴住居址F-SB6

(1) 遺構(挿図第56・第57・第61、図版第41の1・第42の1・第43の1)

竪穴住居址F-SB6は稲荷山2号墳の南東周溝から46m～53m南東に位置し、竪穴住居址F-SB5を取り込むように所在している。重機により竪穴住居址の東壁の北側約1mと北壁の東側約3.50mの範囲が削平されたが、北壁は北西コーナーから1.50mほど残存している。東壁は南東コーナーから3.70mほど残存している。削平面から床面までの深さは13～24cmである。壁溝は現存している壁沿いで認められる。壁溝は幅28cm～40cm、深さ10cm～20cmである。床面の長さは、東西が南壁で4.10m、南北が西壁で3.70m、面積は約18㎡である。平面形は北東隅が削平され不明であるが、北西隅・南西隅・南東隅は角張りがあることから長方形と考えられる。東壁と西壁の中軸線の方位はN-24°-Wである。

柱穴は、P1(50×32×16)、P2(40×30×19)、P5(40×40×20)、P6(32×28×-)の4個が検出されたが、主柱穴がどれかは不明である。F-SB5の10cm上層にあったF-SB6の床面は発掘調査の過程で削平されており、貯蔵穴と炉址は不明である。

(2) 遺物(挿図第65の30-33)

30-33はF-SB6の床面から検出された壺と甕の各部位である。30は口縁部で、大きく外反する口縁部をもつ。口端を下方に拡張している。この面にはハケメを施している。口縁部の内外面にハケメ調整痕が残る。31は頸部である。沈線文間にへう状器具による鋲文を配している。32は全形を知ることができる小形の壺である。口端は丸みをもち、口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、胴部は算盤玉状を呈し、中央に外方から穿孔された長さ2cm、幅0.8cmの孔が認められる。底部は平底である。内外面ともに指痕が残る、ナデ調整で仕上げている。33は甕の頸部から下部の破片である。胴形は球形を成し、内外面ともにナデ調整で仕上げている。

F-SB6の床面から検出された31は長床式土器、30・32・33は寄道式土器である。

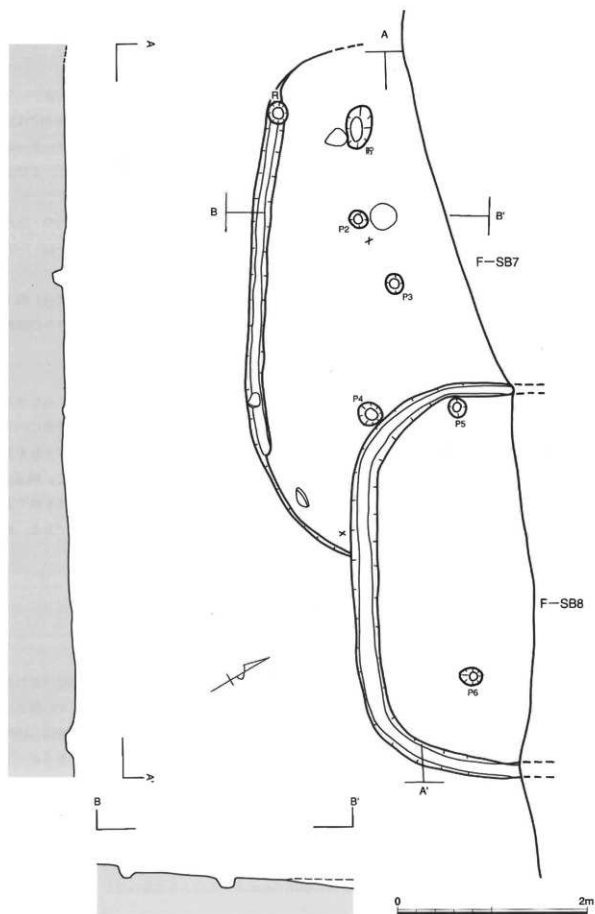
7、竪穴住居址F-SB7

(1) 遺構(挿図第56・第57・第62、図版第41の1)

竪穴住居址F-SB7は稲荷山2号墳の南東周溝から33m～39m南東に位置する。竪穴住居址の北東は1/2以上滅失している。南東壁はF-SB8に掘り込まれている。削平面から床面までの深さは4cm～8cmである。壁溝は南隅と西隅の間にあたる南西壁の3.70mの範囲に認められる。壁溝は幅20cm、深さ6cmである。床面の長さは東西が5.20m、南北は南西壁から1.50mまでは確認できるが、それ以外は不明である。南西壁は直線で、それに続く北西隅と南東隅は隅円である。南東壁は南隅から0.5mほど残存している。壁のカーブから南東壁は膨らみをもつ曲線とも考えられる。そのことから平面形は隅円方形、または隅円長方形であろう。南西壁の中軸と北西壁・南東壁の中軸を結んだ線の方位はN-34°-Eである。

柱穴はP1、P2、P3、P4、P5の5個が検出されたが、そのうち主柱穴はP2(20×20×13)とP4(25×24×10)が関係している。

貯蔵穴は北西壁寄りにあり、平面形は楕円形で、断面形は浅い逆台形である。その規模は長径46cm、



挿図第62 竪穴住居址F-SB7・F-SB8実測図

短径24cm、深さ7cmである。貯蔵穴内には上器片が認められた。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第65の34~41)

34~41はF-SB7の床面から検出された遺物である。

34・35は甕である。34は口縁部から下胴部にかけての破片である。口縁部はくの字状に開き、丸みのある口端に至る。外面には薄いハケメ調整痕が残るが、内面は磨滅して調整方法は定かでない。35は白付甕の脚台部である。円柱状の脚台上部から膨らみをもって広がり脚端に至る。脚端はナデ調整で丸くしあげられている。外面には薄いハケメ調整痕が、脚台端部にはヨコナデ痕が認められる。内面は剥落している。

36~41は壺である。36は口頸部から上胴部の破片である。肩部に5条一組のクシ状器具による横線文を2段施し、その間にヘラ状器具による斜格子文を配している。37は広口壺の口縁部から上胴部にかけての破片である。口縁部は大きく外反する。口端は丸みをもつ。肩部には5条一組のクシ状器具による横線文が巡らされている。外面には縦位の薄いハケメ調整痕が残る。内面は磨滅している。38・39は同一個体の上胴部の破片である。クシ状器具による波線文が2段施されている。40は上胴部の破片と考えられる。横線文の上方にクシ状器具による斜格子文が見られる。41は下胴部から底部にかけての破片である。底部は平底で、下胴部の外面にはハケメ調整痕とナデ調整痕が残る。

F-SB7の床面から検出された遺物は、弥生時代中期後葉の長床式土器である。よって本竪穴住居址もこの時期に営まれたたものであろう。

8、竪穴住居址F-SB8

(1) 遺構 (挿図第56・第57・第62、図版第41の1)

竪穴住居址F-SB8はF-SB7の南東壁を掘り込んで構築されている。竪穴住居址の北東は1/2ほど滅失している。削平面から床面までの深さは4cm~12cmである。壁溝は残存する北西壁、南西壁、南東壁では巡っている。南西壁はほぼ直線であるが、西隅と東隅は隅円である。北西壁と南東壁は緩やかな曲線を描いていることから平面形は隅円方形または隅円長方形であろう。南西壁の中軸と北西壁・南東壁の中軸を結んだ線の方位はN-29°-Eである。

柱穴は床面にP5(20×20×15)とP6(25×25×-)の2個が認められる。柱穴は南西壁から1.00m~1.10m離れている。隅円方形または隅円長方形の竪穴住居址であるならばP5とP6に対応する柱穴が想定されるが、床面が滅失しているため不明である。

貯蔵穴や炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第65の42~48)

42~48はF-SB8の床面から検出された遺物である。42・43は甕の破片である。42は口縁部は外反し、口端は丸みをおびている。器面調整は内外面ともに磨滅しており不明である。43は口縁部から上胴部までの破片である。膨らみをもつ上胴部から大きく外反する口縁部をもつ。口端は丸く仕上げられている。内外面ともに磨滅しており器面調整は不明である。

44~48は壺の各部位である。44は口縁部から上胴部である。強く外反する口縁部をもち、口端は丸みをもつ。頸部下方にはクシ状器具による横線文が認められる。上胴部には、クシ状器具による波線

文を施し、その下方に同器具による大きく波打つ波線文が認められる。また頸部内面には直径2.5mmの管状器具による刺突文列が配されている。内外面の調整はナデ調整が成されている。45—1～45—8は上胴部の同一個体である。この上胴部には全面に文様が施されている。残存する文様は、4条一組のクシ状器具によって区画された7段の文様帯から成る。1段目は上方に向かいクシ状器具で描かれた三角形で内部に3条および4条一組の斜行線を配した複合鋸歯文が、途中から交差して斜格文に変化した文様をもつ。2・3段目は幅2cmの横線文間にクシ状器具による上方を向く整った鋸歯文が2段目は4条1組、3段目は5条1組配されている。4段目には長さ約6cmの単位で方向を異にする羽状文が施されている。左右に向かう羽状文が接する側ではX字状の交点と菱形状の交点が生じている。5・6段目は2・3段目と同様の鋸歯文が施されている。7段目はクシ状器具による斜格子文が認められる。45—2～45—5は横線文帯間に複合鋸歯文が配された破片である。45—6は横線文帯間に羽状文が交わる菱形状の交点である。45—7・45—8は45—1の7段目の区画部と考えられる部分である。斜格子文下に横線文が認められ、その下方は無文である。これらの土器片は内外面ともに、丁寧なナデ調整で仕上げられている。46は頸部から肩部である。半裁竹管状の器具で上下2条の横線文間に縦位の線文で区切り、その内部に斜格文を配している。外面にはナデ調整痕が認められ、内面は磨滅している。47は上胴部である。残存する上方の2条の横線と下方の4条一組の横線文の間にヘラ状器具による斜格文を配している。内面にはナデ調整痕が認められる。48は上胴部である。クシ状器具による波状文が認められる。

F—SB8の床面から検出された遺物は、弥生時代中期後葉の長床式土器である。本竪穴はこの時期に営まれたものであろう。F—SB8は同時期のF—SB7を掘り込んでおり、時間的にはSB7より新しい竪穴である。また床面から出土した壺の45—1～45—8は、銅鐸と共通する文様として特筆すべきものであろう。

第2節 土壌

F区から検出された土壌はF—SK1からF—SK5の5基である。それぞれの土壌は稲荷山2号墳の南東周溝からF—SK1は8m南東に、F—SK2は9m南東に、F—SK3は10m南東に、F—SK4は9m南東に、F—SK5は4m南東に位置する。

1、土壌F—SK1

(1) 遺構 (挿図第56・第57・第63)

土壌F—SK1は竪穴住居址F—SB1の北壁より2m北に、竪穴住居址F—SB3の南壁より1.5m南に位置している。平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径184cm、短径96cm、深さ26cmである。長軸の方位はN—74°—Wである。土壌の底面から3個体分の甕の破片が検出された。

(2) 遺物 (挿図第67の50～53)

49～53はSK1の埋土中から検出された遺物である。

49～52は甕の口縁部から下胴部にかけての遺物である。49と51は同一個体で接合することができた。くの字に屈折する口縁部をもち、丸みをもつ口端である。胴形は球形に近く、台付甕と考えられる。内外面に細かなハケメ調整痕とナデ調整痕が残る。50は口縁部が強くくの字に屈折するもので、口端はナデ調整で面取りされ角張っている。この面にヘラ状器具により刺突したキザミメが認められる。52は口縁部の小片である。口縁部は短くくの字に屈折し、口端には棒状器具による圧痕を配している。53は壺の上胴部破片である。クシ状器具による波状文が施されている。

F-SK1から出土した遺物は、弥生時代中期後葉の長床式土器である。

2、土壌F-SK2

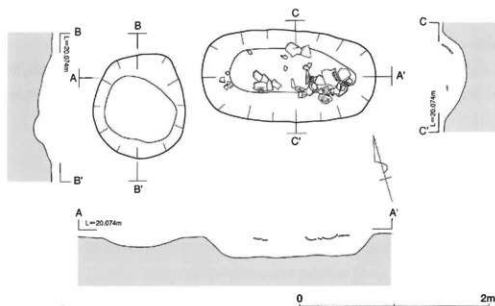
(1) 遺構 (挿図第56・第57・第63)

土壌F-SK2は竪穴住居址F-SB1の北壁より1.50m北に、竪穴住居址F-SB3の南壁より1.50m南に位置している。土壌F-SK2の東20mに土壌F-SK1が所在する。平面形はほぼ円形で、断面形は平底形である。その規模は長径110cm、短径98cm、深さ17cmである。長軸の方はN-53°-Wである。

(2) 遺物 (挿図第67の54～56)

54～55はSK2の埋土中から検出された壺の破片である。54は大きくハの字に開いた口縁部破片である。口端部を下方に拡張して平坦面を作る。その上にクシ状器具による4条の横線文を配している。内面の口端下方には、クシ状器具による斜位の刺突文が認められる。口縁部外面にはハケメ調整痕が残る。55は上胴部で、幅の広いクシ状器具による横線文の下に同器具による波線文が認められる。内面に指によるヨコナデ痕を残す。56は大形の壺の頸部である。厚手の器壁をもち、上胴部と頸部の接合部に断面三角形の突帯をもつ。外面には縦位のハケメが明確に残り、内面はヨコナデ調整痕が残る。

F-SK2から検出されたすべての土器は弥生時代後期の寄道式土器である。よって本遺構はF-



挿図第63 土壌F-SK1・F-SK2実測図

SB6と同時期に存在したものと考えられる。

3、土壌F-SK3

(1) 遺構(挿図第56・第57・第58)

土壌F-SK3は竪穴住居址F-SB1の東壁寄りに位置している。F-SB1の北壁に掘り込まれている。平面形は長方形で、断面形はU字形である。その規模は長径280cm、短径50cm、深さ10cmである。長軸の方位はN-20°-Wである。

(2) 遺物(挿図第67の57)

57はF-SK3の埋土中から検出した壺の上胴部破片である。外面には4条一組のクシ状器具で文様を施している。文様は上方から波線文、横線文、波線文、横線文と交互に配されている。外面には薄っすらとしたナデ痕が認められ、内面は剥落して調整痕は確認できない。

時期は、弥生時代中期後葉の長床式土器と考えられる。

4、土壌F-SK4

(1) 遺構(挿図第56・第57・第58)

土壌F-SK4は竪穴住居址F-SB1の床面の西側に位置する。土壌の南側は竹林で調査ができなかった。そのため平面形も断面形も不明である。

(2) 遺物(挿図第67の58)

58はF-SK4の埋土中から検出した高坏の脚部である。筒状の脚部をもち、脚の約3/4下方で外に屈折して開脚する。脚端は丸く仕上っている。外面にはナデ調整を行い、内面にはヘラ状器具によるケズリ痕が施されている。

時期は、青山式土器である

5 土壌F-SK5

(1) 遺構(挿図第56・第57・第61)

土壌F-SK5は竪穴住居址F-SB5の床面の西壁寄りで、F-SB6の床面西側に位置している。平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径64cm、短径60cm、深さ15cmである。長軸の方位はN-15°-Wである。

第3節 遺物包含層

遺物包含層は表土層(耕作土層)と遺構をとまなわない黒色有機土層に分ける。表土層は重機により削平された埋土から採取したもので、すべて表採遺物とした。図示した土器は6点である。黒色有機土層から検出したもののうち図示した遺物は14点である。

(1) F-黒色有機土層(挿図第68の59~72)

59~72はF区の遺物包含層である黒色有機土層から見出された遺物である。

63・66・67は深鉢の破片である。63は胴部破片であり、外面に粗い斜位の条痕をみる。66・67は口縁部の破片である。ともに口端は丸みをもち、外面に粗い横位の条痕が認められる。

59・60・68・69は甕の破片である。59・60・69は口縁部から上胴部にかけてである。外反する口縁部に角張った口端をもつもので、口端にヘラ状器具による左下がりのキザミメを巡らしている。内外面ともにナデ調整で仕上っている。68は口縁部の小片である。角張った口端に左下がりのキザミメが配され、内面はナデ調整痕が認められる。

61・62・70～72は壺の上胴部破片である。62はクシ状器具による2条の横線文間に波線文を配した文様をもつ。70は4条一組のクシ状器具により横線を施し、下方に波線文を配している。71はクシ状器具による波線文が認められる。72はクシ状器具による横線文の下に2条の波線文が認められる。61はクシ状器具による横線文下端に直径8mmの円形浮文が付いている。浮文の中心部には管状器具の刺突による直径3mmの円文を施す。

65は須恵器の坏身の底部である。断面形が角状をした高台がつき、坏部の屈曲部まで回転削り痕が認められる。64は甕の下胴部破片である。外面に粗いハケメが施されている。

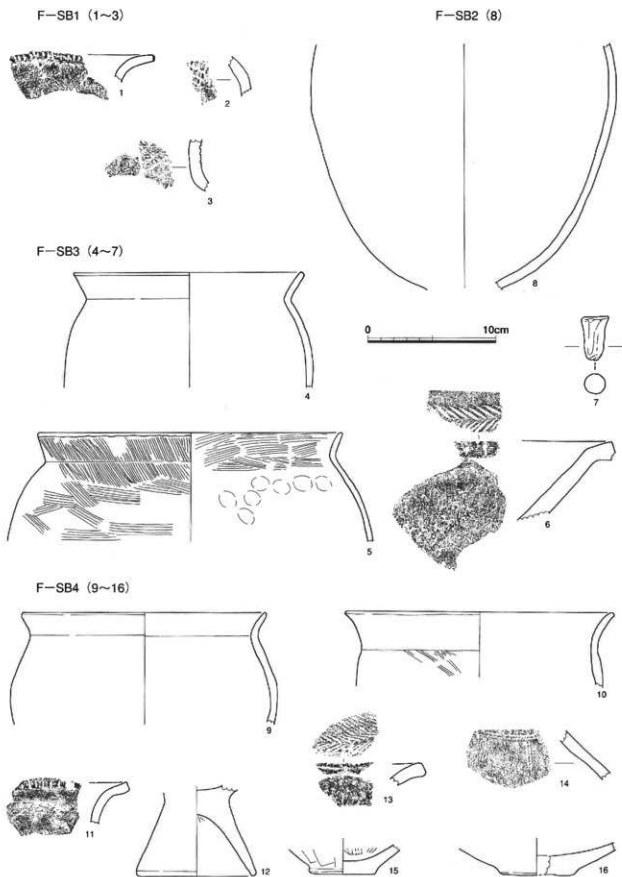
63・66・67は条痕系の水神平式土器である。59・60・62・68～72は弥生時代中期後葉の長床式土器である。61は弥生時代後期の寄道式土器または欠山式土器と考えられるものである。65・66は奈良朝須恵器である。

(2) F—表土層(挿図第68の73～78)

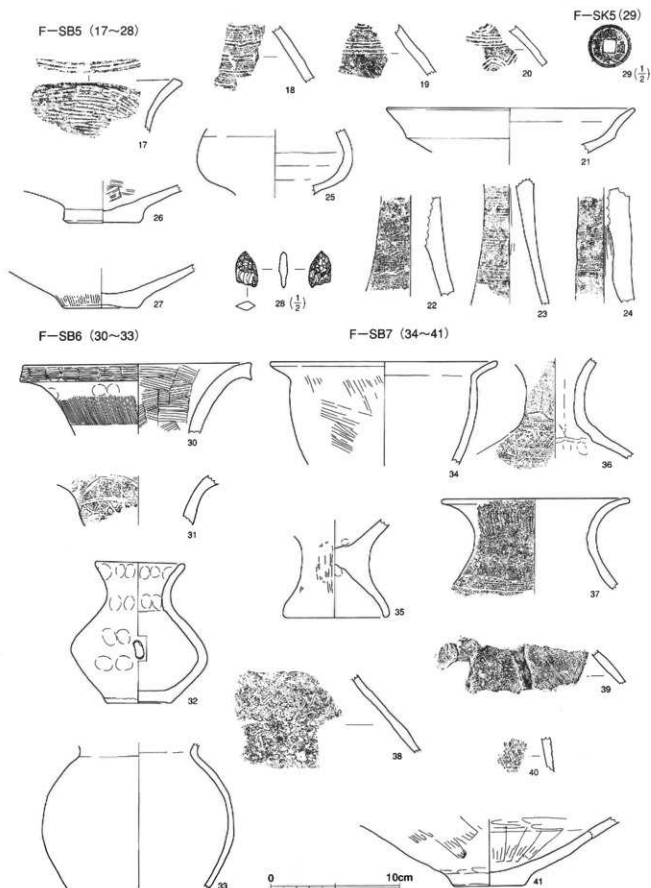
73は深鉢の口縁部破片である。口端は角張り、外面に擦痕が認められる。74・75は壺の上胴部破片である。74はクシ状器具による幅の長い横線文が認められ、文様の下方に鋸歯文を配している。75は細かな横線文が施され、この部分には赤彩が認められる。

76は高坏の坏部である。皿状の坏で、直線的に広がる口縁部をもつ。口端は丸く仕上っている。77は土塊状に近い製品である。土製支脚の残欠と考えられる。78は塩基性岩製の敲石である。棒状の自然礫の両端面に敲痕が認められる。

73は縄文時代晩期から条痕系土器の時期の深鉢であろう。74は弥生時代中期後葉の長床式土器である。75は古墳時代前期の王江式土器と考えられる。76は古墳時代中期の青山式土器である。78の石器は条痕系土器の時期から弥生時代にかけての石器と考えられる。



挿図第64 F区出土遺物実測図1 (F-SB1~F-SB4)

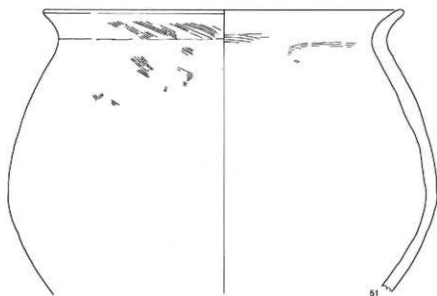
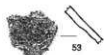
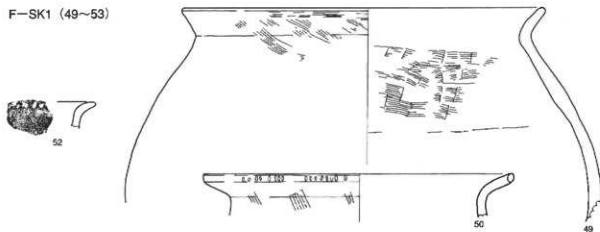


挿図第65 F区出土遺物実測図2 (F-SB5~F-SB7・F-SK5)



挿図第66 F区出土遺物実測図3 (F-SB8)

F-SK1 (49~53)



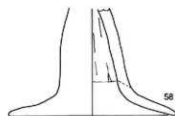
F-SK2 (54~56)



F-SK3 (57)

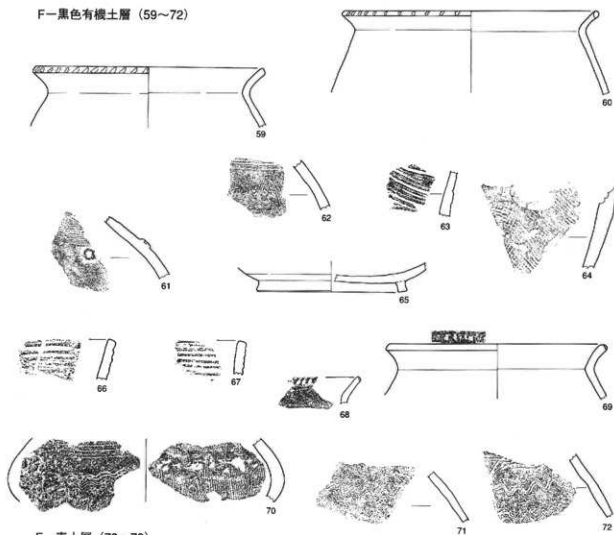


F-SK4 (58)

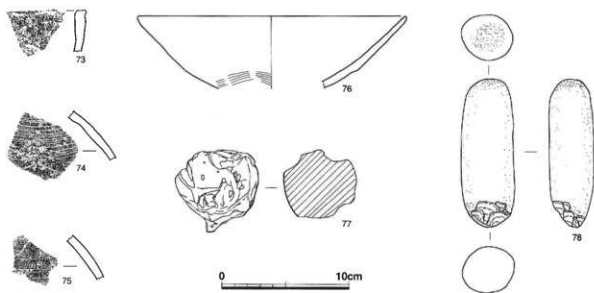


挿図第67 F区出土遺物実測図4 (F-SK1~F-SK4)

F-黒色有機土層 (59~72)



F-表土層 (73~78)



挿図第68 F区出土遺物実測図5 (黒色有機土層・表土層)

第3章 浪ノ上1号墳

浪ノ上1号墳は、牛川段丘の崖辺を縁どるように播く標高20mの等高線上にあり、東をおもどろの沢、西をかにあらの沢で画された舌状台地の先端部に位置する。北方の段丘下には、豊川・神田川の沖積地が臨まれ、はるかに本宮山が紫の裾を長くひき、東方には石巻山が遠望される。

浪ノ上遺跡の調査区でいえば、E区の北隣にあたり、またD区の西に接する。発掘当時（1982年）の地籍は、愛知県豊橋市牛川町字西郷106番地-2であったが、現在は、愛知県豊橋市浪ノ上町3番地の3に属し、墳丘の南縁が浪ノ上公園の北辺のあたりになるであろう。

第1節 さざなみ会による発掘調査

浪ノ上1号墳は、昭和25（1950）年2月14日から3月13日まで、地元の牛川青年団さざなみ会（註1、挿図第69）により発掘調査された既掘の古墳である。この調査の経過と内容は、同年12月、牛川青年団により発行された『いづみ』に「浪ノ上遺蹟発掘日誌」（挿図第70）として、さざなみ会によって発表されている。その日誌によると、調査の目的は「郷土文化研究の為、古くから村人達に言い伝えられている浪ノ上十二塚（註2）を発掘する事に決定した。」としている。

豊橋市大村町五貫森遺跡を調査中の豊橋瓜郷遺跡調査会（挿図第69）の指導をうけて「第一遺蹟」として、浪ノ上1号墳が調査された。まず、墳丘の南北を貫く中央トレンチを設定し、その北西部に至って、地山の黄土層を掘りこんでつくられた「第1住居跡」を発見した。そこから東へ「第1トレンチ」を掘ると、「上部から五十センチ位で、これより高坏の下部三点と上部一点、その他土器



発掘記念写真（上）牛川校区市民館蔵
発掘指導にあたる瓜郷遺跡調査会の丸地古城
後藤守一、久永春男の各氏（右）



挿図第69 さざなみ会による発掘調査



昭和二十五年十二月、牛川青年団発行「いづみ」より引用
(傍線は本冊子保管者による)

浪之遺蹟全日誌

十二、三の年を以てして、その間に於いては、
肉と骨の色澤の様に思われる所見をして
悉くしては、何れにても、生で死ぬるや、

[illegible][illegible][illegible][illegible]

-25-

[illegible][illegible][illegible][illegible]

挿図第70 さざなみ会の「浪の上遺蹟発掘日誌」

破片多数が現れたが、これ等を合せると恐らく高環の完形と成るであろう。尚高環の出た所は一米平方位、深さ三十センチ位の腐蝕土であり、高環が重なって出土した」と記録されている。その後、「長軸五米、短軸四米の隅丸の長方形」の第1住居址を発掘し、更に「住居趾の外側に登呂遺蹟の如き溝の有無を調査する為に東側を黄土層に沿って掘り進むと、黄土層より高さ二十センチ位の位置(図J点)に錆びた両刃の剣(挿図第71の上)、全長二尺一寸五分、刃渡り一尺七寸」を掘出した。更に掘り込み、鉄剣の北東に瓢形の完形壺が見出された。

これら出土品は、昭和57(1982)年の本調査時には、牛川稲荷社に保管の錆びて崩壊した鉄剣1口(挿図第71の下)と第1住居趾出土と伝えられる高環の破片1個体分のみ確認されたが、他の出土遺物や実測図、写真等の調査記録は一切行方不明であった。浪ノ上地区在住の発掘当時の関係者にも問い合わせたが、その所在はついに明らかにすることができなかった。

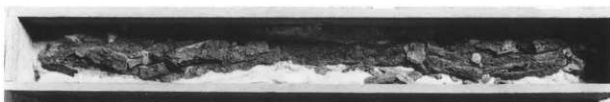
しかし、当時さざなみ会の発掘調査を指導された日本考古学協会会員の久永春男氏は昭和59年、「浪ノ上第1号墳」(註3)を発表された。そこには、「素環頭鉄剣概形図」や鉄剣及び瓢形壺の出土位置を示す「竪穴住居跡平面および断面図」等が明示されており、本調査の報告書を執筆するに際して、すでに失われた遺構や遺物の復原のための貴重な資料となった。

本調査の調査報告は、昭和58(1983)年3月、豊橋市教育委員会から「浪ノ上第1号墳調査概報」が発行されたが、整理時間の不足と紙幅の制限のため十分な報告ができなかった。



上、昭和25年発掘当時の素環頭鉄剣

下、昭和57年調査時の素環頭鉄剣



挿図第71 素環頭鉄剣

第2節 墳丘

1、墳丘の規模（挿図第72、図版第48・第55）

墳丘は南東部と北東部の等高線に乱れが少ないが、昭和25年のさざなみ会による発掘調査にあたり、墳丘の南北コーナーを結ぶ中央トレンチの設定、さらに墳丘下の第1住居址（N-SB1）の発掘のため墳丘中央部と西部は大きく損壊されていた。

浪ノ上1号墳の最高部は標高21.61mであるが、東西1.3m、南北2.2mほどの僅かな高まりであるので、昭和25年発掘時の排出土によるマウンドであろう。このような盛土は5ヶ所ほど残っていた。標高21.41mあたりが、東西2.6m、南北8.0mの平坦面をなす。西側半分以上は、さざなみ会の発掘のため掘削されているので、かつて墳丘上面は一辺が8mほどの方形をなしていたであろう。

墳丘北西側は、第1住居址発掘時の排土を積み上げたため、等高線の間隔が非常に狭く、傾斜が急峻である。墳丘の南西側も排出土が流れて周溝の半ば以上を覆っていた。

墳頂部から1.5m降った20.11mの等高線は南西側において、南西方向へ大きく張り出しているが、南東・北東・北西では、ほぼ直線状をなしており、墳丘の平面形が円形ではなくて方形であることを示している。

墳丘の四隅（方形の頂点）は、それぞれ東西南北を指している。頂点南と頂点東を結ぶ辺を南東、頂点南と頂点西を結ぶ辺を南西とよぶ。同様に頂点北と頂点東を結んだ辺を北東、頂点北と頂点西を結んだ線を北西とよぶ。

また、墳頂から1.6m（標高20.01m）のラインは、墳丘南東裾部において、幅1.83mから2.59m、長さ10.35mにおよぶ溝状の窪みを呈し、南西裾部においても幅4.5m、長さ10.5mの溝状をなし周溝の残存することが予想された。墳丘の南東辺と南西辺の接するところは隆橋状を呈することが推察された。

墳頂ラインを21.41mとし、墳丘裾部を20.01mとすると、墳丘の高さは1.4mである。墳丘の径は、20.11mのラインにおいて、北東（辺）と南西（辺）のそれぞれの中間点を結んだ長さは18.65mである。また南東（辺）と北西（辺）とのそれぞれの中間点を結んだ長さは17.38mである。墳丘測量からみて、本墳は、高さは1.4m、墳丘の一辺は、ほぼ18mの方墳である。また南東部と南西部には周溝の存在することが予想されたが、発掘調査の結果、方墳の四辺に周溝が検出された。南西周溝外縁から北東周溝外縁までの長さは24.02m、南東周溝外縁から北西周溝外縁までの長さは24.17mである。

2、墳丘封土の層序

（1）昭和25年調査の第1竪穴住居址発掘区の層序（挿図第73、図版第60）

昭和25（1950）年、さざなみ会が第1住居址（N-SB1）を掘った際、墳丘西部は大きく掘削された。これを第1竪穴住居址発掘区とよぶ。昭和57（1982）年までの32年間、雨風に晒され崩れ落ちた壁面を整理して断面図を作成した。墳丘の構築法や埋葬位置を知る手がかりを得るためである。

壁面は、その位置により、東壁、西壁、南壁、北壁に分けた。その壁面は必ずしも四角形をなさず、

不整八角形として八面に分けて実測することにした。即ち東壁1、東壁2、西壁1、西壁2のごとく壁面を区別した。

8壁面のセクションで共通する点は、濃淡の多少の違いはあっても、地山はすべて黄褐色粘土層であり、この面をベースとしている。そして、この地山面をほぼ標高20.10mを前後するラインで均している。この地山上の封土の積み方を検討すると、南壁2図と西壁1図の層序では、地山(18層)上に堆積するのは黒褐色有機土層(17層)で10cm前後の厚みで広く覆っている。その上にあるのが暗茶褐色土層(16層)で5~15cmの厚みをなす。その上部の淡灰褐色土層(15層)は20cmほどの厚みである。その上に灰黄褐色土層(14層)・暗黄褐色土層(13層)・暗灰褐色土層(12層)を積み上げていく様子が、西壁1図から読みとれる。墳丘西部から墳丘の土盛りは始まり、第1段階は終わる。次に墳丘南部から東部での盛土が続く。灰茶褐色土層(11層)、灰黄褐色土層(10層)、淡茶褐色土層(9層)、黄褐色土層(8層)までが第2段階であろう。特に10層・8層には5~30mm程度の礫を入れた土で締めている。墳丘南から東へかけて厚く盛り上げられたのが暗茶褐色土層(7層)であり、黄茶褐色土層(6層)、暗黄褐色土層(5層)、10mm前後の礫を含む茶褐色土層(4層)へと堆積されたのが第3段階である。墳丘は、南部、東部から北部へと築成は進み、淡茶褐色土層(3層)の上には60cmもの厚みをなし、20~60mmの礫を含む黄褐色土層(2層)を土盛りしていくのである。この層は、西壁2図から北壁1図まで盛土のほとんどを占めるが、北壁1図において、厚みが少なくなる。この鍋底状の部分が埋葬空間で、その上面の6層から2層は埋葬空間の埋土と思われる。中央トレンチにより北壁1図と北壁2図は切断されているので不明であるが、中央トレンチのあたりで消滅することは確実である。

以上のように墳丘築造の順序は、まず墳丘の西部から始まり、南部から東部、北部へと形成されていったことが判明した。そして、墳丘築成と同時に被葬者を埋納するための空間が設定された。その一断面が、北壁1図に残されたのである。

北壁2図、東壁1図は、さざなみ会が調査時、鉄剣と瓢形壺を掘り出し、久永春男氏が前述の文献で、「墳丘中央部の基底面から素環頭鉄剣1口と、完形の瓢形壺1個が発見されていた。墳丘の断面を精査すると鉄剣と壺が包含されていた地点は、長さ約2m、高さ40cm~50cmほどが、やわらかな黒色土で、それをかこむ封土の堅い締まり方と明瞭に識別され、そこに木棺が埋置されていたらしいことが推定された。」と記されたコーナーである。

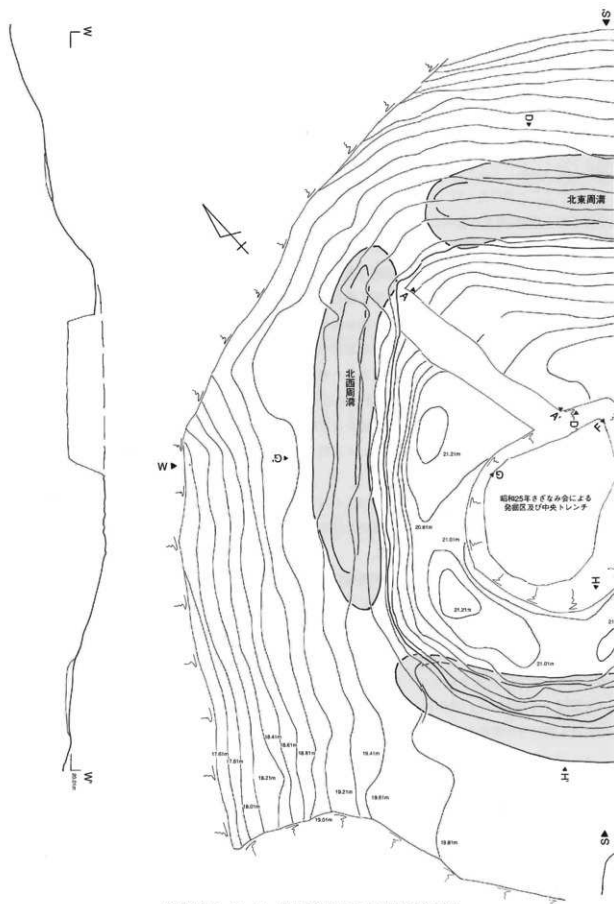
北壁図2で地山面上の黒褐色有機土層(16層)が1.7mほど存在しない部分がある。ここは木棺を据え置く掘り方の基底面の幅であろうと推察された。この部分に、久永氏が検出した長さ2m、高さ40cm~50cmほどの黒色土があったのであろう。

また東壁1の上から3層・4層を掘りこんだ土壌N-SK1の断面が確認された。さらに、東壁2からは表土から3層目を掘りこんだ土壌N-SK2の断面が確認された(第4節土壌に詳説)。

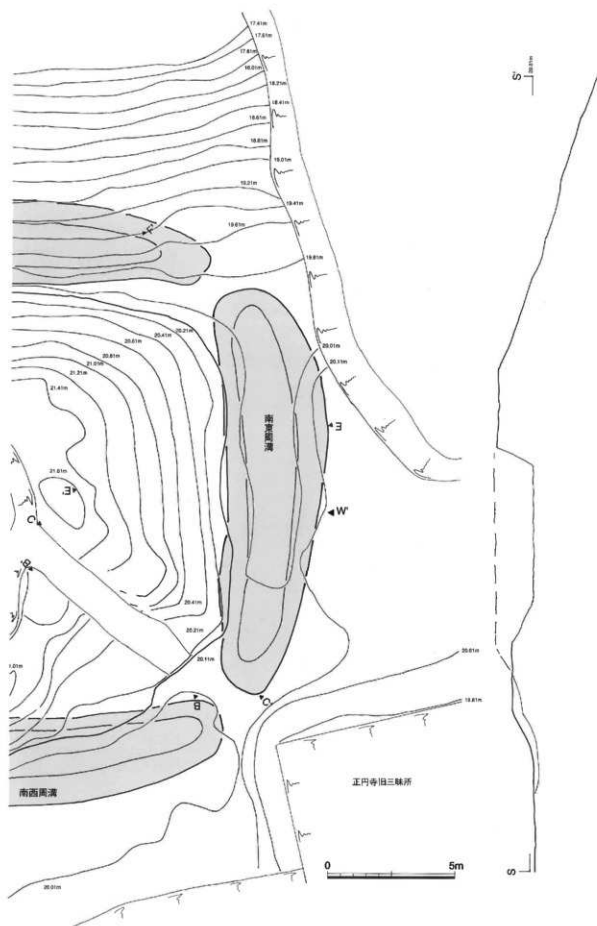
(2) 昭和25年調査の中央トレンチ南側西壁の層序(挿図第74)

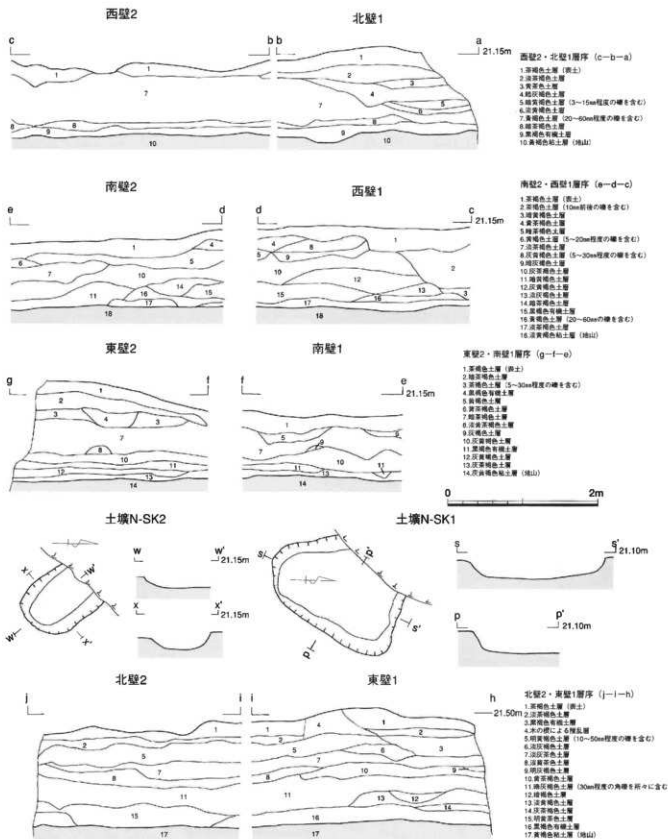
中央トレンチの南側とは、第1竪穴住居址(N-SB1)の発掘(昭和25年、さざなみ会)により削除された西壁の中央部南縁から墳丘の南端までをいう。

最下層は黄褐色粘土層(14層)であり、その上面は標高20.1mを保つが、その大部分は、墳丘下の



挿図第72 浪ノ上1号墳の墳丘および周溝実測図





挿図第73 昭和25年調査の第1 壁穴住居址発掘区の層序および土壌N-SK1・N-SK2実測図 (測図地点は挿図第82参照)

竪穴住居址N-SB2によって削平されている。この住居址の埋土である黒灰色土層（13層）は有機土に似た厚さ20cm前後の土層である。木炭や焼土を大量に含んでいる。淡黄茶褐色土層（12層）は14層を20cmほど掘りこんでいる。淡灰褐色土層（11層）は約10cmの厚さで12層・14層を被う。黒褐色土層（10層）は同じく10cm前後の厚さで11層上に堆積する。淡黄灰褐色土層（9層）は本トレンチの北端から南へ7.5mまで厚く積み上げられる。特にトレンチ北端から南へ3mのあたりは、最高87cmの厚さの盛土がなされており、それより墳丘中心部に向けて撚鉢状になり、北端では10cmほどの堆積となる。そして、この9層の特徴として、ブロック状の土層をその層中に包含することがあげられよう。このように墳丘の端から4.5mほどの辺りを最も高く積み上げ、まず墳丘の四周を固める工法は、他のトレンチでも見ることができる。墳丘中央部の撚鉢状の空間を埋めるのが5層から3層である。5層は厚さ20cm前後の淡黄茶褐色土層である。4層は5層中にブロック状に存する淡灰茶色土層である。厚さ30cm前後の黄褐色土層（3層）は5mmから40mmの礫を多く含む。

3層・9層の上面を覆うのが暗茶褐色土層（2層）と茶褐色土層（1層）である。いずれも10cmから20cmの厚みで墳丘上面を覆うが、1層は昭和25年発掘時の排出土と推定される。周溝の埋土は、重機によって削平され層序は不明である。

なお中央トレンチ北側（西壁）の部分は崩落が激しく実測できなかった。

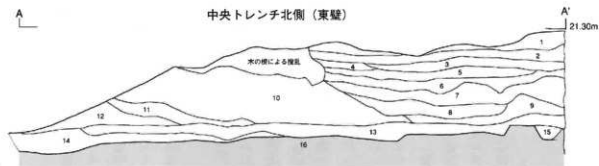
（3） 昭和25年調査の中央トレンチ南側東壁の層序（挿図第74、図版第61）

本トレンチの層序は地山を含めて17層からなる。墳丘の構築順にこれを見ると、黄褐色粘土層（17層）が地山であり、墳丘基盤をなす。この層は、南部において第2竪穴住居址（N-SB2）によって30cmから40cm掘り下げられているので、その一部分を淡黄褐色粘土層（16層）で埋め立てている。中央部では淡茶褐色土層（15層）がブロック状に堆積する。その上部は黒褐色有機土層（14層）で覆われている。竪穴住居址の部分で55cmと厚く、草木類の炭化物と焼土が多く、火災家屋の建築材が含まれているようである。竪穴部分以外は、10cmから28cmの層をなす火による修葺の跡と思われる。13層の黄灰褐色土層は15層と同様なブロック状の土層である。12層の黄灰褐色土層は周溝縁端部から墳丘中央部にかけて5cmから60cmの厚みで黒褐色有機土層を覆っている。中央部では淡黒褐色有機土層（11層）が10cm程の厚みでみられる。10層の淡黄茶褐色土層は5mmから30mmの礫を含む層で、11層と共に封土の主要な層序をなし、厚く堆積する。10層の北部は20°ほどの斜傾をなし、その撚鉢状の内面には平位の層序をもって黄茶褐色土層（9層）、明灰茶色土層（8層）、淡灰茶色土層（7層）、黒褐色有機土層（6層）が10cmから25cmほどの厚みで堆積されている。

5層と4層は周溝の埋土で5層を下層、4層を上層とする。5層は暗灰褐色有機土層、4層は濃黒褐色有機土層である。共に遺物をかなり含んでおり、20cmから30cmの厚みがある。この周溝埋土の上面には淡黄褐色土層（3層）がのる。その上層は淡黄褐色土層（2層）と茶褐色土層（1層）が認められるが、共に封土の流失土ないし、昭和25年発掘時の排出土とみなしてよいであろう。

（4） 昭和25年調査の中央トレンチ北側東壁の層序（挿図第74、図版第61）

本トレンチは、中央トレンチ南側に連続するものであるが、中央トレンチは昭和25年のさざなみ会による発掘により中央部分において竪穴住居址N-SB1と埋葬主体部が掘り上げられており、中心部分が失われている。しかし、中央トレンチの南側（東壁）の北端で確認できた埋葬土壌の構造がさ

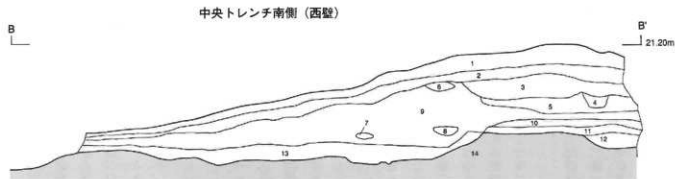


中央トレンチ北側（東壁）

1. 赤褐色土層（赤土）
2. 赤褐色土層
3. 赤褐色土層
4. 赤褐色土層
5. 赤褐色土層
6. 赤褐色土層
7. 赤褐色土層
8. 赤褐色土層
9. 赤褐色土層
10. 赤褐色土層（10～50mm程度の礫を含む）
11. 赤褐色土層
12. 赤褐色土層
13. 赤褐色土層
14. 赤褐色土層
15. 赤褐色土層（地山）

中央トレンチ南側（西壁）

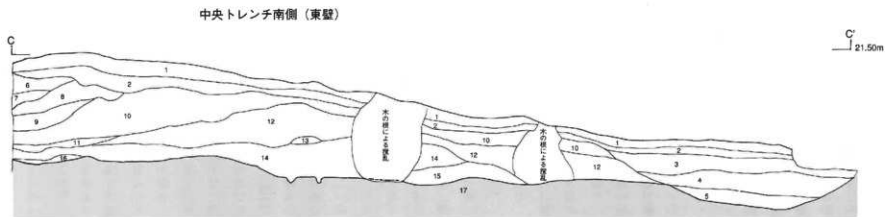
1. 赤褐色土層（赤土）
2. 赤褐色土層
3. 赤褐色土層（5～40mm程度の礫を含む）
4. 赤褐色土層
5. 赤褐色土層
6. 赤褐色土層
7. 赤褐色土層
8. 赤褐色土層
9. 赤褐色土層
10. 赤褐色土層
11. 赤褐色土層
12. 赤褐色土層
13. 赤褐色土層（少し赤褐色土に包む）
14. 赤褐色土層（地山）



中央トレンチ南側（東壁）

1. 赤褐色土層（赤土）
2. 赤褐色土層
3. 赤褐色土層
4. 赤褐色土層
5. 赤褐色土層
6. 赤褐色土層
7. 赤褐色土層
8. 赤褐色土層（4に比べて暗い）
9. 赤褐色土層
10. 赤褐色土層（10～30mm程度の礫を含む）
11. 赤褐色土層
12. 赤褐色土層
13. 赤褐色土層（12と13との間にブロック状にある）
14. 赤褐色土層
15. 赤褐色土層
16. 赤褐色土層
17. 赤褐色土層（地山）

0 2m



C' 21.50m

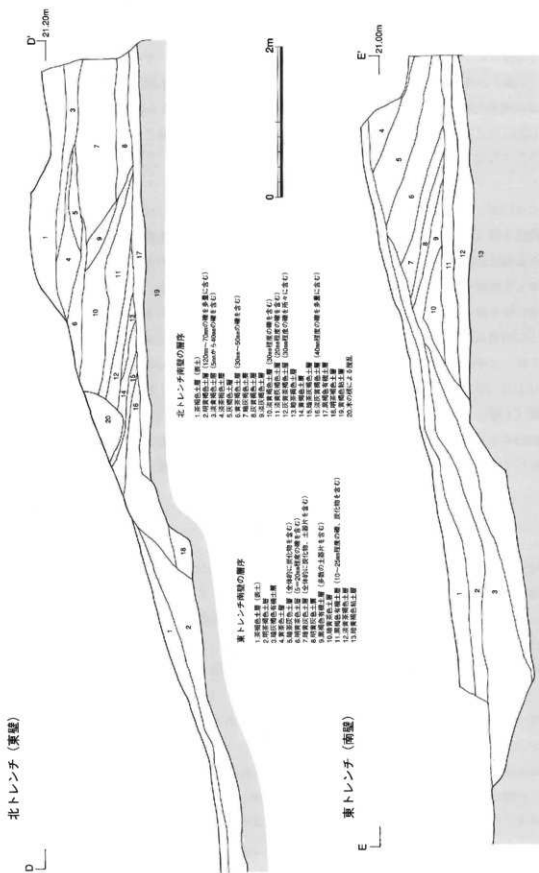
らに明確になった。

本トレンチで確認できた層序は16層からなる。最下層(地山)の暗黄褐色粘土層(16層)は標高20m前後で均整されているが、全体として南から北へ緩く下がっている。その上に中央部分では暗茶褐色土層(15層)が堆積する。これは墳丘内面の東壁図(挿図第73)でも確認できた。墳丘縁端に近い北部では灰褐色土層(14層)が幅3.5m、厚さ10cmから30cmの堆積がみられる。その上面には、厚さ10cmから20cmほどの黒褐色有機土層(13層)があり、火による修祓の跡と考えられる。この上には墳丘北端で暗黄茶褐色土層(12層)・暗黄灰色土層(11層)が累積され、先ず墳丘裾から封土を築成していったことを示している。しかもその積み方は、内側へ10°から15°の勾配で傾斜し、墳丘表面には、その小口面しか出さず、崩れ難い工法をとっている。さらに10層の10mmから50mm程度の礫を含む明黄茶褐色土層(10層)は10cmから70cmの厚い層をなして、墳丘北部を形成する。しかも、上面は木の根による攪乱があるので、やや変形しているが、その南端は、墳丘中央部に向けて35°の勾配で揺鉢状をなして埋葬主体部の設置される空間を構成する。そして恐らくは、墳丘下部の中心に据えられた被葬者の棺を被うように堆積されたのが9層から2層までの層序である。すなわち13層の黒褐色有機土層上に明黄茶色土層(9層)、その上に淡灰褐色土層(8層)が10cmから20cmほどの厚みで、ほぼ水平を保って堆積し、その上面には、やや厚く、15cmから35cmの暗灰褐色土層(7層)がおかれる。それより上方へ厚さ15cm前後の均整の取れた層序が、淡黄茶色土層(6層)、暗褐色土層(5層)、淡褐色土層(4層)、淡灰茶色土層(3層)、淡茶褐色土層(2層)と続く。最上層の茶褐色土層(1層)は、昭和25年さざなみ会調査時の排出土であろう。また10層上面の南側は木の根による攪乱でやや層脈が蛇行しているが、本来は斜行して揺鉢状をなし、埋葬主体部の設置される空間を構成したものである。

(5) 北トレンチ東壁の層序(挿図第75)

北トレンチは墳丘北部に設けられた幅90cm、長さ11.15mのトレンチである。基盤となる層は19層の黄褐色土粘層で、その上面は南部で標高約20.0m、北部で19.9mと若干低くなる。北端は黄褐色粘土層が途絶するため約50cmほど明黄褐色土層(18層)を補貼している。17層の黒褐色有機土層は10cmから20cmの厚みで19層の黄褐色粘土層を覆っている。この黒褐色有機土層は、他のトレンチにおいても黄褐色粘土層上にしばしば見受けられる層である。

北側墳丘の末端の17・18・19の各層を包含するように40mmほどの礫を多量に含んだ淡灰黄褐色土層(16層)が、墳丘の縁端部に積上げられる。その断面形状は、墳丘の裾から1.1mほどで地山から45cmと最も高く、内部へかけて緩く8°ほどの傾斜で下がり断面が低い三角状のマウンドをなす。次の15層の暗茶灰褐色土層は、この16層の頂点から、墳丘の内部へ向けて12°ほどの傾きで、厚さ5cmから15cmの厚みをもって堆積する。14層は黄褐色土層で5cmから10cmほどの厚さで内部へ12°の勾配で堆積する。13層は暗茶褐色土層で内部へ8°の傾きで堆積し、10cm前後の厚さである。12層は30mm程度の礫を所々に含む灰黄茶褐色土層で5cmから10cmの厚みで9°の傾きで堆積する。11層は20mm程度の礫を含む淡黄灰褐色土層で、墳丘端から中心に向けて2.4mまでは、土層上面が水平を保つが、それより3.2mまでは、15°の傾斜である。土層の厚みは10cmから30cmである。10層は30mm程度の礫を含む淡黄褐色土層である。厚さは10cmから35cmと厚く、土層の上面は墳丘の北から1.4mほど水平で厚



挿図第75 北トレンチ・東トレンチの層序

さは30cm前後を保ち、それより25°の傾斜となる。9層は淡灰褐色土層である。厚さは5cmから10cm、長さも90cm程の小さな土層で、10層に付着した形状であるが、この土層により、10層上面北端からの水平面は1.84mとなり、墳丘内部への傾斜は30°となる。この角度は墳丘裾部から10層上面の北端までの傾斜が30°を保つとの関係があるのであろう。

この墳丘内部に向けて8°から30°の傾斜をもつ土層は、墳丘の外縁から、版築状に土砂を積上げていき、中心部に揺鉢状をなす埋葬主体部の設置面を造成していったと思われる。

揺鉢状の空間には8層から2層までの7層が、いずれもほぼ水平に堆積して空間を封じている。下層からこれを述べていくと、8層は灰黄褐色土層で20cm前後の厚みである。7層は40cmから55cmにおよぶ厚い淡灰褐色土層である。6層は30mmから50mmの礫を含む黄茶褐色土層で薄く10cmから20cmの厚さで、9層・10層の上ののっている。5層は灰褐色土層で6層と7層上に最大の厚み20cmのレンズ状に堆積し、30mm程度の礫を含む。4層は淡茶褐色土層で5cmから30cmの土層をなし、5層、6層、7層を覆う。3層は淡黄褐色土層で5mmから40mmの礫を含み、4層と7層を覆う、厚さ5cmから23cmの土層である。

2層は明黄褐色土層で20cmから70cmの礫を多量に含む層で、上部から周溝や墳丘裾部に流入した移動層であらう。1層は茶褐色土層である。墳丘上に残丘状にブロックをなして20cmから30cmの厚みで堆積する。恐らく昭和25年に、さざなみ会が本墳主体部及び第1堅穴住居址(N-SB1)を発掘した当時の排出土であらう。

(6) 北東トレンチ北壁の層序(挿図第76)

北東トレンチは幅90cm、長さ10.1mで墳丘北東部に設定したトレンチである。墳丘の基盤をなすのは13層の黄色粘土層である。その上面を12層の黒褐色有機土層が10cmから20cmの厚みでほぼ水平に覆っている。そしてこの層の北東端部に土師器の甕(208~210)が検出されている。祭祀に関するものであろう。

11層から3層までは、墳丘の内部へ向けて傾斜して封土を積み上げていく状態がよくわかる層序である。先ず墳丘端に断面が三角形をなす盛土を土手状に積み上げる。これが11層の黄褐色砂礫層である。33cmの高さに2mの底辺という低三角形である。このような例は東トレンチの10層でも観察することができた。この11層の傾斜する下面の角度は13°である。この上に堆積する10層は黄色砂礫層で厚みは20cmから30cmで傾斜角は12°である。9層は黄褐色礫層で厚みは5cmから25cm、傾斜角は20°である。8層は暗褐色砂礫層で、3cmから12cmの礫が混入している。8層の厚みは15cmから25cmで傾斜角は21°である。7層は10cmほどの層厚の黄褐色礫層で6cm大の礫の中に僅かな黄褐色土を含む。傾斜角は20°である。6層は8層、4層と同じ暗褐色砂礫層である。層厚はほぼ20cmで、傾斜角は17°である。5層は淡黄褐色砂礫層で3層と同じ層である。20cmから25cmの層厚で14°の傾斜角である。4層は6層、8層と同じ暗褐色砂礫層である。層厚は20cm前後、傾斜角は20°である。3層は淡黄褐色砂礫層で大は4cm、中は2cm、小は5mmの礫を含む。2層は周溝の一部を埋める黒色有機土層である。1層は黒褐色土層で周溝埋土である。

(7) 東トレンチ南壁の層序(挿図第75、図版第59)

東トレンチは、墳丘東部に設けられた幅70cm、長さ10.5mのトレンチで13層からなる。最下層の13

層は暗黄褐色粘土層（地山）で、上面は標高20.00mから20.05mで削平されている。12層は淡黄褐色土層で15cmの厚みをもって13層を覆っている。11層の黒褐色有機土層は10mmから25mm程度の礫や炭化物を含み、15cm程度の厚みで12層の上に堆積する。

10層の暗黄褐色土層は、墳丘の端部に断面が高さ約30cm、底辺1.6mの三角形をなして積上げられる。9層の黒褐色有機土層は多数の土器片を含むが、10層を包みこむように墳丘の内部に15°ほど傾斜し、15cmから20cmの厚みで叩き締められている。墳丘端部は10cmから40cmの厚い層をなす。この黒褐色有機土層は土器片の多いことから、付近の土壌や堅穴住居址を壊して盛土としたものと考えられる。8層の明黄灰色土層は14°の傾斜をなし、15cmから20cmの厚みで9層と並行する。7層の暗黄灰色土層は、全体的に炭化物や土器片を含み、15°の傾斜で15cmから20cmの厚みを保って8層と並行する。6層の明黄褐色土層は5mmから20mm程度の礫を含み、14°の傾斜をもって7層と並行するが、厚みが35cmから40cmと増加してくる。5層の暗茶灰色土層は全体的に炭化物を含み、ほぼ30cmの厚さをなし、内部への傾斜は21°とやや急勾配となる。4層は黄褐色土層であるが厚みと勾配は、昭和25年のさざなみ会の発掘に際して掘削され不明である。

これまで述べたように、13層（暗）、12層（淡）、11層（黒）、10層（暗）、9層（黒）、8層（明）、7層（暗）、6層（明）、5層（暗）、4層（黄）と、層序毎に違う土色に注目したい。そして土色の違いは土の成分の違いであり、粒子の差となり、異なる土の互層により、墳丘は唐剣や鶴嘴を弾き返す堅固な封土となっている。

3層は暗灰褐色有機土層であり、墳丘上部からの流出土が周溝を埋めている。2層の明茶褐色土層や1層の茶褐色土層は、前記の昭和25年発掘時の排出土や周辺からの流れ込みの土砂の堆積土と思われる。

（8） 南西トレンチ東壁の層序（挿図第76）

南西トレンチは南西部の墳丘から周溝にかけての幅1m、長さ7.2mのトレンチである。標高20m前後の灰黄褐色粘土層（9層）を削平して、墳丘の南西端を整え、その上に40cmから50mの灰黄褐色土層（8層）を盛り、さらにその上部に小規模のブロック状の黒色土層（7層）と黒褐色土層（6層）が積み上げられるが、ここで墳端部の長さ不足のためか、暗褐色土層（5層）を上端で68cm、下端で1.45mほど補貼している。この上に暗茶褐色土層（4層）と5mmから30mmの礫を含む茶褐色土層（3層）が、緩い角度で墳丘の中央部へ流れこむように堆積し、墳丘の外縁部がつくられる。表土の茶褐色土層（2層）は、昭和25年、さざなみ会調査時の排出土の堆積と思われる。1層は黒褐色有機土層で南周溝の埋土であるが、このあたりでは下層、上層いずれも、殆んど遺物の出土はみられなかった。

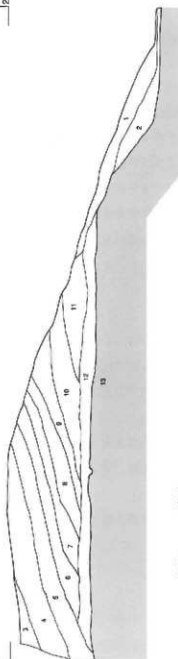
（9） 北西トレンチ南壁の層序（挿図第76、図版第59）

南西トレンチは、幅1m、長さ8.22mのトレンチで、墳丘北西部に設けられた。基盤をなすのは黄褐色粘土層（16層）である。この上に粘性のある淡茶色土層（13層）、淡灰茶色土層（12層）、淡黄褐色砂礫層（11層）、黄褐色土層（10層）が10cmから15cmの厚みで積み上げられる。この上には、50cmから60cmの厚い淡茶色砂礫層（9層）と黄褐色砂礫層（8層）が築成され墳丘ができる。この13層から9層までは墳丘の外帯をつくる土層であり、8層はこの土層の内に描鉢状につくられた埋葬空間を覆う埋土である。

北東トレンチ北壁

F

21.20m



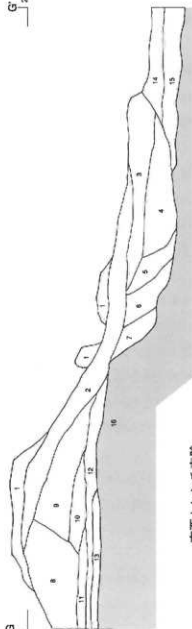
北東トレンチ北壁の層序

- 1 黒色粘土層
- 2 黒色粘土層
- 3 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)
- 4 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)
- 5 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)
- 6 4と同一
- 7 4、6と同じ (黒大層20cm)
- 8 黒色粘土層 (厚約50cmが多い)
- 9 黒色粘土層 (厚約50cmが多い)
- 10 黒色粘土層 (厚約50cmが多い)
- 11 黒色粘土層 (厚約50cmが多い)
- 12 黒色粘土層 (厚約50cmが多い)
- 13 黒色粘土層 (厚約50cmが多い)
- 14 黒色粘土層 (厚約50cmが多い)
- 15 黒色粘土層 (厚約50cmが多い)

北西トレンチ南壁

G

21.00m



北西トレンチ南壁の層序

- 1 黒土 (100~200mm厚さあり)
- 2 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 3 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 4 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 5 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 6 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 7 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 8 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 9 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 10 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 11 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 12 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 13 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 14 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)
- 15 黒色粘土層 (100~200mm厚さあり、やや黒色土、灰イ)

南西トレンチ東壁

H

21.40m



南西トレンチ東壁の層序

- 1 黒色粘土層
- 2 黒色粘土層
- 3 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)
- 4 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)
- 5 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)
- 6 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)
- 7 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)
- 8 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)
- 9 黒色粘土層 (厚約4.50m、900mm、小3m、中層が多い)

0 2m

挿図第76 北東トレンチ・北西トレンチ・南西トレンチの層序

西周溝の内縁帯は他のトレンチの断面で多く認められるように黄褐色粘土層（16層）を削り出してあり、周溝の外縁帯は淡茶灰色土層（15層）と茶灰色土層（14層）を掘削してつくられる。周溝内には、周溝を埋める埋土層が5層ある。初期の埋土として淡茶色砂礫層（7層）があり、次に淡黄茶色砂礫層（6層）と暗茶灰色土層（5層）が封土を削って流入した。さらに時が過ぎ、周溝に黒褐色有機土層（4層）が堆積し、さらにその上層に黄茶褐色砂礫層（3層）が認められる。その上層の淡黒茶色土層（2層）と黒茶色土層（1層）は5mmから20mmの礫を含み、昭和25年さざなみ会による発掘時の排出土である可能性が高い。

3、墳丘築成の工程（挿図第77）

墳丘トレンチ断面にみられる層序のありかたからみて、墳丘の築成に当っては、次のような工程の下に段階的に工事が進められたと考えられる。

（1） 第1工程

- ア、古墳の基底面は、黄褐色粘土層であり、上面は標高20.0m～20.1mほどで均される。
- イ、基底面の四周を一辺が約18mで、頂点が四方位を向く方形となるように削る。径24mの円内に周溝を掘り封土として利用する。南西トレンチにみられるように墳端部の長さが不足する場合は、他の土砂をもって補填する。このような例は北トレンチでも検出されている。
- ウ、この基底面上面には、黒褐色有機土層が10cm～20cmの厚みで認められる部分が多い。この層は、基底面上にかなりの量の可燃物（草木材等）を置き、火による修祓を行なった形跡ではないかと考えられる。特に竪穴住居跡の廃材なども同時に処分されたことであろう。
- エ、修祓を行った跡を覆うように2～3層の土を敷き、地盤を固める。

（2） 第2工程

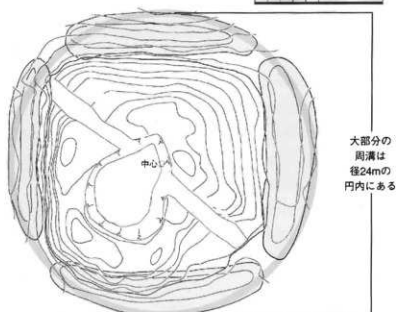
- ア、墳丘の外縁沿いに土砂が土手状に積み上げられる。北東トレンチや東トレンチでは、底辺の幅2m、高さ33cmの断面三角形の土手状に墳丘外周を囲み、四周を築き固める。
- イ、墳丘外周の上手は20°前後で墳丘内外面に傾斜しているため、その傾斜面に合わせて、墳丘の外縁から斜行する版築状に土砂を積み固めていく。
- ウ、東トレンチ断面の観察によれば、15cmから40cmの厚みの土砂が硬軟違えて、平均16°の傾斜で5層積まれている。しかもその土層は、明暗を交互に変えて、土色によって版築作業が一目瞭然、視覚的にも判然とするように盛土されている。
- エ、墳丘の四周からの斜行する盛土がなされると中心部には錐鉢状の埋葬空間がうまれる。これまでの作業は、第1竪穴住居跡発掘区（昭和25年）の層序からみて、墳丘の西部から始まり、南部に移り、東部から北部へ移動していったことが明らかである。

（3） 第3工程

- ア、錐鉢状の埋葬空間に柩を置く土壌部分が整えられ、副葬品が供えられる。
- イ、柩上を浅層もの土砂で丁寧に覆う。中央トレンチでの所見では、錐鉢状部分に水平に堆積する土砂は8層認められた。
- ウ、墳丘全体を整える。



0 10m



挿図第77 墳丘構築の工程図

エ、周溝を整える。

4、墳丘トレンチ出土遺物および表採遺物

(1) 北東トレンチ出土遺物(挿図第96・97)

壺 208は墳丘の東端である基底面上にあり、祭祀的な副葬品である可能性が高い。208は僅かに外反し、短いくの字状口縁である。外面は器面剥落で不明であるが、内面は口縁上部に横位のハケメ、下部に斜め左にハケメがみられる。

壺 209は上下2条の沈線間に刺突文を配し、下位の沈線の下方に横位のハケメを付し、刺突文とハケメの一部には赤彩が施される。上胴部の内面には指痕がめぐっている。210は上胴部外面に細密なハケメが横位に付され、内面はヘラ先で押えた痕が弧状にのこる。

布目瓦 222は布目瓦の小片で、縄目は粗く、右上から左下へ編み目が通る。封土上部出土。

(2) 東トレンチ出土遺物(挿図第97)

壺 219は口縁部と上胴部との境(頸部)がはっきりしない無頸甕で、口径よりも胴径の方が大きいタイプである。外面には縦・斜め左・斜め右に粗いハケメが全面に付され、内面は口縁に横位のハケメ調整がなされている。口縁部は短く、口唇部はまるい。220の口縁部はやや受口状をなしている。口縁内面には横位のハケメ、口縁外面には斜め右のハケメが強くのこる。封土内出土。

壺 221は口縁部を斜め上方へまっすぐにのばす。器壁は厚く口唇部は面取りされる。203と類似する。封土内出土。

(3) 東トレンチと北東トレンチの間(墳丘封土)出土遺物(挿図第97)

高坏 223は外面全体が美しくヘラミガキされている脚部片である。円孔は脚上方に穿たれている。円錐形の脚は下方で開く。内面はハケメ調整である。

磨石 224は表裏と側面に磨いた痕が残る。黄色風化していて岩石名不明。

(4) 中央トレンチ出土遺物(挿図第98)

高坏 237は碗型高坏の坏部で、内外面をヘラミガキし、口唇部内外面は、ていねいにナデ調整する。238・239は高坏の脚部でともに透し穴をもち、238は横線が加えられている。

(5) 墳丘南東部封土出土遺物(挿図第97)

高坏 232は脚部片で、下方に大きくひろく。外面はナデ、内面は横ハケメの調整。円孔は脚上方に穿たれている。233は円錐形の脚で5条一組の横線が3段めぐらされている。

壺 234はやや突出した平底の底部である。235は5条一組の櫛描き横線文が上胴部に3段施されている。

碗 236は碗の底部で上げ底である。内面の指頭による調整痕が目立つ。

(6) 墳丘裾における表採遺物(挿図第97)

・墳丘東裾表採遺物

壺 225は口縁部片で、口唇外面に刻み目を付け、内面には1条の沈線が加えられている。内外面ナデ調整である。

高坏 229は脚部片で円筒形の中実部分が長い。外面は縦にヘラミガキされ、5条一組の櫛描き横

線文が2段、間隔をおいて配される。下位の横線文の下方に円孔が穿たれている。

・墳丘南裾表採遺物

甕 226は台付甕の脚台部で、内罫してひらき、脚端はまるい。内外面とも横位のハケメが下部ほど鮮明に残っている。

高坏 227は脚部で5条一組の横線文が4段配されている。内面は縦・横にハケメが残る。円孔はない。

・墳丘北裾表採遺物

高坏 228は高坏の脚部で、脚端に向けて内罫しながらひらき、脚端はまるい。外面にはヘラミガキが縦位に施され、中央部分にはヘラ先でハネ上げ文が加えられている。

石器 230はヘラ状石器で柄部に比較して先端が薄く末広がりととなる。石材はチャートである。231は刃器状石器で、剥片の側縁部に2次調整を行い、刃部をつくっている。表面風化した石材は不明である。

第3節 周溝

1、周溝の規模（挿図第72、図版第56～第58）

浪ノ上1号墳の墳丘の平面形は方形であり、その各頂点はほぼ東西南北の四方位をさしている。方形の四つの辺にあたる墳裾の外縁に沿って、4周溝がつくられている。周溝の平面形は、コッペパンを側面からみた形状に近く、墳裾側は直線状であるが、外縁側は円弧をなしている。

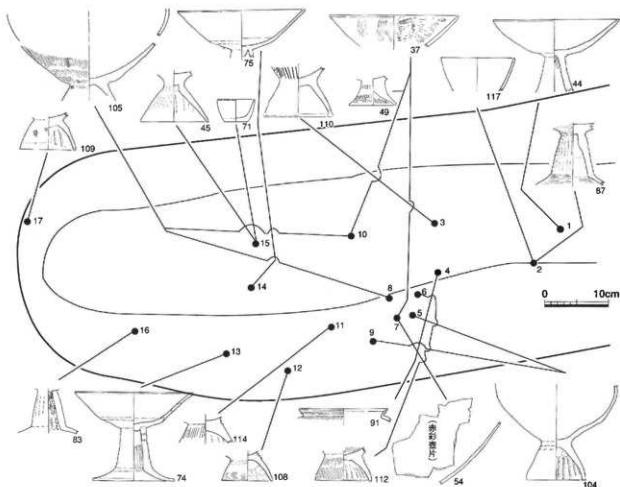
周溝は墳丘の南東・南西・北東・北西の4箇所にあり、方墳の外側を囲むように所在する。周溝と周溝の間は陸橋となっている。南東周溝の長さは17.19mで、幅は東部で3.34m、中央部で3.10m、南部で2.63mをはかる。周溝の深さは、東トレンチの部分で75cmである。南西周溝の長さは17.99mで4周溝の中で最も長い。幅は南部で2.95m、中央部で3.11m、西部で2.23m、周溝の深さは南西トレンチの部分で74cmである。南東周溝と南西周溝の間の陸橋の幅は1.19mと4陸橋の中で最も幅が狭い。

北西周溝の長さは、4周溝の中で最短の15.28mである。幅は西部で2.20mと4周溝中最も幅が狭い。中央部で2.23m、北部で2.31mをはかる。周溝の深さは南西トレンチで50cmである。北西周溝と南西周溝の間の陸橋は2.47mと最大で南西・南東周溝の陸橋の幅の2倍強である。北東周溝の長さは、16.24mで、幅は北部で3.26m、中央部で3.58m、これは4周溝中の最大幅である。東部の幅は2.23mである。周溝の深さは、北東トレンチで55cmである。北東周溝と北西周溝との間の陸橋の幅は2.07mである。また、北東周溝と南東周溝との間の陸橋は1.27mをはかる。

なお、南東周溝の外縁中央部から北西周溝の外縁中央部までの長さは24.17mを測り、南西周溝の外縁中央部から北東周溝外縁中央部までの長さは24.02mと測定された。いずれも墳丘の中心軸を延長した数値と同じである。

2、南東周溝2区下層の遺物出土状況（挿図第78、図版第62・第63・第64）

南東周溝2区下層とは、南東周溝2区の周溝底面上をいい、17地点から検出された22片はすべて土



挿図第78 南東周溝2区下層遺物の出土状況

土師器で19個体分ある。器種別にみると、台付甕8個体(42%)、壺2個体(11%)、高坏6個体(31%)、器台2個体(11%)、碗1個体(5%)となる。このうち全器形の明確なものは2例(71・74)のみで、それは全体の11%にあたる。

これらの土師器のうち、高坏の脚は、戴頭円錐形をなさず、全て下脚部で外折し裾を開くものばかりである。台付甕のうち1個体はS字甕で、口縁部が外反し、端部の面取りや肥厚もなくC類(註4)と考えられる。台付甕は脚部のみが遺存し、口縁部は失われたものが多い。

出土位置は、挿図第78に示したごとくであるが、全体として南東周溝全体からみて、その南部であるが、南西周溝との間の陸橋から測って約7.2mの範囲である。そして、周溝を中央部分(周溝の下端ライン内)、周溝内縁付近(周溝の下端ラインと墳丘裾の間)、周溝外縁付近(周溝の下端ラインと周溝外縁の間)、南東周溝と南西周溝の間の陸橋に近い部分の4ヶ所に分けて、遺物の出土位置を検証すると、遺物の35%は周溝中央部分から出土している。53%は周溝外縁近くからの出土であり、12%が陸橋近くからの出土である。しかし、周溝内縁付近からは1片も出土していない。このことは、古墳の祭祀に当って飲食物の容器である土師器は、墳丘の裾側に置かれたのではなく、周溝の外側に配置された可能性が高いことを物語っているのではなかろうか。

3、南西周溝1区下層の遺物出土状況（挿図第79、図版第62・第64・第65）

南西周溝1区とは、南東周溝と南西周溝との間の陸橋部分から5.2mまでの間をいい、この間の周溝の底面からは33地点から73片、48個体の土師器が検出された。これは南東周溝2区下層の遺物の2倍以上であり、この辺りが古墳祭祀の中心であったことを示している。出土位置は挿図第79に示したが、周溝中央からの出土が58%、外縁側が33%、陸橋付近9%であるのに比して、周溝内縁、すなわち墳丘裾の部分から1片の遺物も出土が確認されなかったことは、南東周溝と同様の出土傾向をもっている。

南東周溝と同じく遺物の残存率は低く、器形が復原できたものは146の赤彩広口壺、150の広口壺、161の加飾器台、162の高坏、135の台付甕、126の直口甕の6個体であった。これは全体の13%である。出土遺物を器種別にみると、甕は19個体（40%）で南東周溝同様最多である。壺は13個体（27%）であり、高坏は13個（27%）である。器台は1個（2%）、甕は2個（4%）と少ない。壺の出土例が南東周溝2区下層に比べて6倍以上多く、その構成比は甕が4割、高坏と壺が3割弱と相違していることに注目したい。

南西周溝1区下層出土としたもので、一部小片が南東周溝2区下層からも出土しているものに、120、121、122、124、125の4個体があるが、古墳の祭祀（墓前祭）後、遺棄ないし廃棄された遺物がかなり移動していることを証している。南西周溝出土の赤彩広口壺（146）は、大部分が南西周溝1区下層遺物出土状況図の5から出土しているが、小片は、16・20・22・30の各地点にまで飛散している。加飾器台（161）も11・19・25の各地点に散乱している。このような例は甕（127）、台付甕の脚部（139）、広口壺（150）などに多く見られる。

4、周溝出土遺物

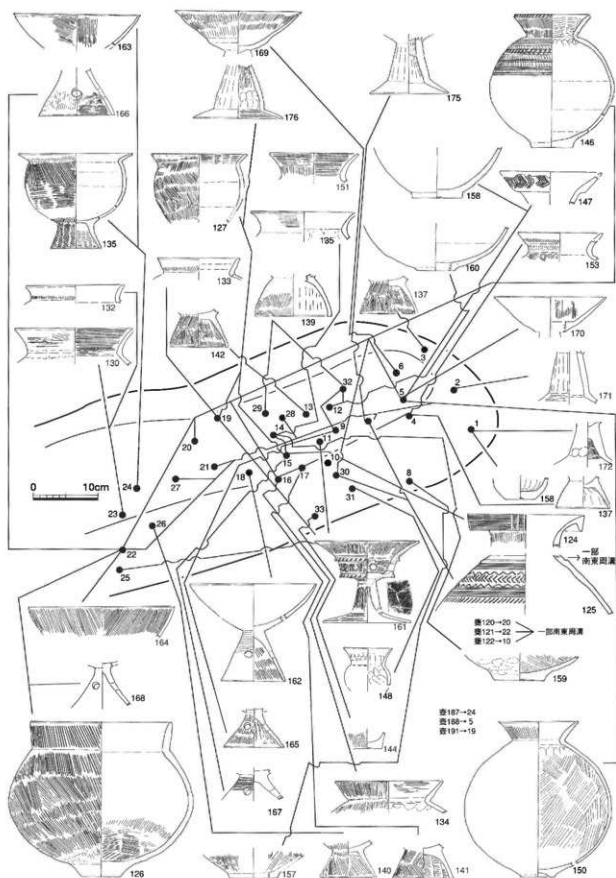
周溝は、南東・南西・北西・北東の4周溝からなるので、周溝別、区別、層別別に遺物の説明をする。南東周溝は北部を1区、南部を2区、南西周溝は東部を1区、西部を2区とする。

（1）南東周溝1区出土遺物

本区からの出土遺物は35点あるが、下層からの出土遺物はなく、すべて上層からの出土である。

ア、上層出土遺物（挿図第86・第87、図版第66・第67）

甕 1～6は口縁部から胴部へかけてのもの、7～19は台付甕の脚部である。1は頸高が高く、80°の角度で直上する口縁部をもち、内外ナデ調整をする。2はやや受口の口縁部で外は縦に、内は横にハケメが残る。3は口縁が水平に近いくらい外に開き、外は縦にハケメ、内面はナデている。4は口縁部が短く、胴部の最大径が上胴部にあり、外は斜位のハケメ、内面はナデにより調整している。5は口縁端から1/3ほどの部分を押さえて、外縁帯をつくる。外面は粗い縦位のハケメ、内面は粗い横位のハケメが残る。6は短い口縁をもつ小さな甕で、外面は器面剥落で不明、内面は粗いケズリが認められる。ハケメがない脚部の端が平らで内彎するものに14・17・19がある。8は羽状のハケメで脚端が丸く直状に開く。斜めの左右ハケメの9・10は直状をなし脚端が丸い。斜め左ハケメの15は直状で脚端を欠く。斜め右ハケメの6例のうち11・12・16は直状に開き、13は内彎し共に脚端が丸い。7・18は脚端を欠く。斜め左ハケメの15は直状に開き脚端を欠く。



挿図第79 南西周溝1区下層遺物の出土状況

高環 30は碗形高環の環部で外面ヘラミガキ、口唇部に一条の沈線、口唇部内面は面取りされ、ナデ調整される。31・32は裁頭円錐形の脚部で、31には6条一組の櫛描き横線文が2段、32には20条ほどの櫛描き横線帯が施される。33は環部に稜があり脚部は筒状で下方ほど太さを増し、外方へ屈折する。外面はヘラ削り後ナデ、内面はナデ調整する。34は33と同様のつくりの脚部である。

器台 35は環部に貫通口をもち、脚部に3孔の透かし。外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ調整する。

碗 20は内彎し、内外に指痕が残る、外底部中央に小穴がある。21は内側に指痕、外側には縦に強いハケメがある。22は内面に指頭痕、外面はナデのみである。

壺 23は口縁外面を拡張し、その外縁帯に櫛状器具を刺突して鋸歯間隔の長い鋸歯状文が加えられている。24は口縁が直線的に開き、口縁内外は横位のハケメ、肩部外面は左から右へ斜位のハケメが認められる。27は口縁が外反し、口縁内外、横のハケメである。28の口縁はやや内彎気味で、胎土、焼成からみて、29の平底の底部と同一個体となろう。25は、上げ底の底部で、外面は右ハケメと左ハケメを施す。26は内面ナデ、外面ヘラミガキの光沢のある壺で、底部が突出する。

(2) 南東周溝2区出土遺物

ア、上層出土遺物(挿図第87～第91、図版第67～第70)

甕 92～103は甕の口縁部である。92は受口状の口縁部をもつ甕で、口縁外面と上胴部の内面に強いハケメを施す。93も受口状の口縁部で外部はヘラミガキされている。94・95・99～103はくの字に強く外反した口縁で、器壁が厚い。96～98は、口縁部が直線状に開き、薄い器壁にハケメを強く残す。106・107は口縁部が短く、くびれ部がはっきりしない。外面は縦、内面は横にハケメが施される。95の口縁の内外には赤彩が残る注目させられる。

111・113・115・116は台付甕の脚部である。111は左ハケメ、113は右ハケメ、下部を横ミガキ、115は縦のヘラ削り、116はナデと多様である。111は脚端欠失のため不明であるが他の3個体は、いずれも脚端が丸く、113は外反、115・116は直状に開く。

壺 50は口縁部外面を上方にひろげ、口端は上方を向く。口縁内面にはヘラ先による右下りの押引文がめぐらされる。深くくびれた頸部に稜をもち、下部は粗い縦ハケメを施している。51は、口縁外面を上方にひろげ、頸部が長い。内外面に横にハケメが施される。52・53は二重口縁であるが、52は口径が小さく屈折部の断面が三角状に突出している。53は口径が大きく屈折部に僅かな高まりが残る。55・56・57は、赤彩された壺の下胴部片である。器厚・胎土・色調からみて55・56は同一個体、57は別個体であろう。58・59はパレス壺の胴部破片で、58には上から鋸歯文・櫛描き横線文・鋸歯文・横線文・刺突文が施され、下の鋸歯文には、赤彩が加えられる。59は横線文・刺突文の下方の横ハケメ上に赤彩が施されている。60～63は櫛描き横線文を幾つも描き横線文帯をつくる。この横線文帯は、3～4cmおきにわずかに屈折しながら肩部をめくっている。64は胴部が丸い上げ底の壺である。外面剥落しているが、底面と肩部内面の指痕ははっきりしている。65～70は底部破片である。65は、密度の高い胎土に砂目の多い粘土を被せた厚底の底部で、下底面に木葉痕がある。66は薄い底で、下底面に葉脈痕が印される。67は下胴部に縦のハケメ、底部側縁に横のハケメがみられる。いずれも平底である。68～70はいずれも上げ底の底部で、69・70の外面には縦ハケメが認められる。

高環 36は5条の櫛描き横線文が3段施され、その下に3個1組の円孔が穿たれている。38は外反

して、ゆるやかに開く脚部で3円孔が穿たれている。外面は右下ハケメの上を丁寧にヘラミガキしている。内面は横ナデである。39・40は碗形高杯の坏部である。39は坏部の下底部に僅かな段があり、その位置が高く古相を示す。内外面ともナデ調整である。40は坏部に稜はなく頸部に僅かな段がある。内面はヘラ削り外面はナデ調整である。41は6条一組の篩描き横線文を3段重ね、その下部に円孔を3個穿っている。42・43は脚の開きが外反し、円孔が3個あることは共通しているが、42は内外面ナデ調整であり、43は外面ヘラミガキ、内面ナデ調整である。46は大きく開く脚で3孔がある。器面剥落で調整不明。47は坏底面が平らで、脚部が内彎してひろく。円孔が3個穿たれている。内外面ともにハケメ・ナデが施される。

76は、坏部の口縁が反りぎみに開くタイプで、下層出土の74と同類であるが、外面横ナデ、内面上部は右下ヘナデ、下部は横ナデでミガキは加えない。77は、坏底部で稜をなし、外方へ反りぎみに開く。脚は柄部接合で脚下方へ除々に開き、下方3/4のあたりで外方へ屈折する。外面はナデ、内面は棒状器具で削り指頭で押える。下部は横ナデが施される。81は脚部の屈折部から脚端にかけての部分である。細長い円錐形の下端部を包み込んで接合する工程がよくわかる資料である。内外面共にナデ調整である。78は脚下部であるが脚端を欠く。内面に指痕とナデ、外面はナデ調整である。79は下部ほど太くなる脚部が鋭く開く。内面は指痕・ナデ、外面はヘラケズリのあとナデを施す。80は脚部がわずかに下方ほど太くなり、下部で外折し脚端がひろく。内面は指痕、ナデ、外面はヘラケズリのあとナデ調整である。

82は円柱状の脚をやや開く。内外面ナデ調整、坏部とは柄で接合する。84は坏下部に稜があり、脚は先太の円柱状で、坏部とは柄接合。外面はヘラ削り後ナデ、内面は指痕が縦に残る。85は円柱状の脚部の下部がふくらみ、屈折して外へひろく。外面はヘラケズリ後ナデ、内面は上方を先のわたたヘラ先で押え、下は指頭でナデ調整をする。86は下部のひろがる円柱状の脚である。外面ヘラケズリ後ナデ、内面は、指痕がありナデ調整をする。88・89は、下方で除々に広がる円柱状の脚が屈折部でくびれ、脚端は外へひろく。外面はヘラ削り後ナデ、内面は指痕やナデが残る。90は直線状にひろく円柱状の脚で外面は上方を縦ハケメ、下方を横にハケメ調整。内面と外面は上部は縦ハケメ、下部は横ハケメ調整である。

器台 48は中空の脚をもつ。内面はナデ、外面はハケメ調整である。

鉢 118は、口縁部から体部に移る位置に段がつく内面ナデ、外面ハケメ調整である。

碗 72・73は上げ底の底部から内彎しつつ口縁部に至るタイプで、72は内面ハケメ、外面ナデ、73は内面指痕とナデ、外面にナデが認められる。

石器 東Ⅱ区の南西ピットの埋土中から出土したものに119がある。白色に風化しているが、鋭い刃器状の剥片である。

イ、下層出土遺物 (挿図第89～第93、図版第67～第69)

甕 91はS字口縁甕の口縁部で、口唇部がゆるく斜めにひらき、胴上部は縦のハケメのみ存する。104・105・108～110・112・114は台付甕の脚部で、一部下胴部が付く。104・109・110は外面にはハケメはなく、内彎している点は共通している。104と109は内面に短いハケメがある。脚端は104・110は平らで、109は丸い。114は左ハケメが認められるが、脚端を欠き他は不明である。108は外面下方

に横ハケメ、内部に指痕、下部は内髷し脚端は丸い。105も縦ハケメであるが、脚端を欠き他は不明である。中胴部にナデ、下胴部に右ハケメが認められる。

壺 54は赤彩壺の下胴部である。器厚や赤彩の色が異なり、55・56・57のグループとは別の壺であろう。117は、口縁の開きが少ない瓢形壺の口縁部で、口唇は丸くおさまっている。

高坏 37は坏部が直線状に大きく開く。外面剥落のため不明。内面ナデ調整である。44は内髷して大きく開く坏部とわずかに外反する脚部をもつ。内外面は剥落で調整不明である。

74は坏底部下方に段状の屈折部をもち口縁部でやや外反して大きく開く坏部と、筒状の脚部下方において屈折し反りぎみに脚端をひらく。坏部は4段積み、横ナデ後、ミガキを加える。脚部は内面を棒状器具で縦に整形、外面はナデ後ミガキを施す。75はやや大形であるが、74と同一の形状である。坏部と脚部を接合するに坏部の柄を脚部に挿入する技法も同様である。83は脚上部から4/5位のところで鋭く外に開く。内面上部はへら状器具で押え下方は横ナデ、外面はへら削り後、ナデ調整をする。87は上から4/5位のところで斜めに屈折する脚部で外面は2段に分けてへら削りをし、その後ナデを加えている。内面も丁寧にナデ調整している。柄穴接合である。

器台 45は円錐形の脚部内面板ナデ、外面と坏部内底面はへらミガキ。脚端は平らである。49は脚が短いが重厚な感じ。内面はハケメ、ナデ、外面はへらミガキの上に脚裾部に赤彩が施される。

壺 71は平底の底部からほぼ直上し、口唇はまるくつくられる。内外面ともハケメ後、ナデ調整を施している。ぐい呑み形である。

(3) 南東周溝2区と南西周溝1区の両区から併出した遺物

ア、上層出土遺物(挿図第91、図版第70)

須恵器 甕 123は胴部の中ほどに最大径をもち、その上方に幅5mmほどの部分が帯状に面取りされる。その平面上に細かい波長の短い波状文を細密な櫛描きで施す。口縁部は欠くが、残存する口頸部痕からみて口縁部は細く胴部が角ばるのが特徴で、須恵器第1型式(注5)に属するものである。この甕の小片は、墳丘南東部の封土上からも採集され接合している。

イ、下層出土遺物(挿図第91、図版第70)

甕 120はくの字状口縁の口唇部が細まる。口縁内外面は横にハケメ、頸部が縦にハケメ、上胴部外面は右下にハケメ、内面には指痕が残る。121はくの字状口縁であるが、器壁が薄い。口縁外面は横にハケメで上に煤が付着している。122は台付甕の脚部である。脚端は外面を強くナデ先端は丸い。外面には縦にハケメが施される。

壺 124の口唇は強く下方に折り返され広い口縁帯をつくる。そこに横線を加え縦に3本一組の棒状浮文(剥落)が付される。口縁内面に残らない。頸部外面には縦ハケメが施され、肩部との境には段がつくられる。125の肩部から胴部にかけて上から横線文、鋸歯文、羽状文・鋸歯文・横線文・斜線文と文様構成が複雑である。通常のパレス壺の場合、鋸歯文と横線文を交互に配するのであるが、本パレス壺は羽状文や斜線文を強く意識している点、146の広口赤彩壺と共通している。外面の赤彩は口縁帯、頸部、段の部分、下位の鋸歯文の4ヶ所で、内面は口縁部に赤彩痕がみられる。

(4) 南西周溝1区出土遺物

ア、上層出土遺物(挿図第92～第95、図版第71～第74)

甕 128は頸部がはっきりしないタイプで、胴径が口径より大きい。外面は縦位のハケメ、口縁内面は、右下斜位のハケメ、胴部内面はナデ調整される。129は薄手の小形の甕である。口縁部は受口状で、頸部外面に縦位の連弧文が施されている。内面は横ハケ、外面は研磨されている。130はくの字状口縁で強く外反する。内面は横ハケメ、外面は横ハケメと斜右下ハケメ、頸部にヘラ先で押した痕がある。136はS字甕の脚部である。薄手均一、脚端が内面へ折返されている。外面に右下斜めにハケメが残る。138は台付甕の脚部で、内彎ぎみにひらき脚端は平坦である。ハケメは斜め右下に向く。179はくの字状口縁で外反ぎみにひらく。口縁内外に横ハケメ、斜のハケメが残る。180から182はくの字状口縁で直線状にひらく。181の内面の横ハケメの他は、器面の剥落のため不明。183は底部である。189は台付甕の胴部と脚部の接合部分の剥がれた状態を示す。接合面は凹凸をなす。

壺 152・155は外反しながらくの字状にひらく口縁部で、内面は両者ともナデ調整、外面は155はハケメがわずかに残るが152は不明である。156は、上げ底の底部破片で、内外面ナデ調整があり、胎土・焼成・色調・数値からみて155と同一個体をなすものであろう。

184・185は横線文がのこる上胴部片、186は波状文がのこる上胴部片である。192は上胴部片であるが、二条の刻線がある。193は刺突文をもつ上胴部片であり、胎土が白色粘土である点興味深い。

高坏 194は脚部小片である。縦のヘラミガキがみられ、上下に2段の円孔が穿たれている。3ヶ所の円孔が2段設けられたものであろう。

甌 149は底部の小片で、熱気を通す4個の孔があげられている。内面は左・右下へのハケメ、外面は縦ハケ調整がみられる。

須恵器 蓋 198～201は蓋坏の蓋部口縁から頂部へ移る庇のあたりと、頂部の小片である。稜線や頂部の削りがていねいで、器厚は薄い。

イ、下層出土遺物(挿図第92～第95、図版第71～第74)

甕 126は口縁部がほぼ直上にのび、胴部が球状をなし、底部が小さく突出する。外面には斜め右下へのハケメが強く残る。器壁は厚く胴部最大径は中央にある。127は口縁部の高さが低く、外面には斜めにハケメ、口縁内面には横にハケメがあり、胴部内面には板状のケズリ痕がある。131はくの字状口縁であるが、強く外反し、口頸部と胴部との境がはっきりしないタイプである。口縁部内外には赤彩が施され、外は口唇から頸部まで内は口端近くのみ塗布されている。132は短い口縁部が外反し、頸部に縦のハケメを残す。133は斜めに直上する口縁をもち、頸部に斜めのハケメをもつ。134は斜めに直状するくの字状口縁をもち、外面は縦位、内面は横位のハケメが施される。135は外方へ短く大きくひらく口縁に球形の胴部と脚端が外反してひらく脚部をもつ。外面は、口頸部から上胴部にかけて斜右下方向のハケメ、中胴部から横位のハケメ、脚部は再び斜め右下へハケメが強く残る。内面は横位のハケメとナデ、脚部は櫛状ケズリが残る。胴部内面には炭化物が付着している。

137・139～142は台付甕の脚部の残欠である。137は脚端へむけて内彎ぎみに開き、脚部はまるい。外面はヘラ削り後ナデ、内面は板状工具のケズリが残る。139は大きく内彎し、脚端が平らである。斜め右下へのハケメが残る。140は直状にひらく脚端がまるく、内外面に斜右下ハケメが残る。141は脚が直状に開くが、脚端は平らで、外面に羽状のハケメ、内面に板状器具によるハケメが施される。142は直状にひらいた脚部が脚端で内彎し、先端は平らになる。外面は羽状、内面は斜右下ハケメが

のこる。

壺 146は口頸部をくの字状にひらき、口唇外面を面取りして刺突文を施す。口縁外面は斜め右下へのハケメを上半部に、縦のハケメを下半部に加え、下半部のみに赤彩を施す。口縁内面は板状器具で条痕状の削り痕を残し、頸部には指痕が顕著である。胴部は球形をなし胴高の中心よりやや上が最大径となる。突出した底部は平底である。上胴部には頸部に接するところから5条の横線がヘラ先で描かれ、それより斜め右下へ斜線文、その下に3条のヘラ先による横線文、その間に太いヘラ先による斜め左下への斜線文が加えられる。それより下に、2条一組と3条一組と2条一組の横線文がめぐられる。上の2条一組の横線文を切るように斜め右下へ長い斜線文がかかる。また最下部の2条一組の横線文にも斜め右下への斜線文が施される。赤彩は上から3段目の斜め左下への太い斜線文にぬりこめた状態で見出された。また、最下の横線文から磨かれた底縁部までの間、すなわち壺の下胴部全体も赤彩されている。内面はハケメ・ナデ調整がなされている。斜線文の方向を左右に変えていることは、羽状文を強く意識しているようである。胎土が灰白色で極めて密なる点も注目され、伊勢湾沿岸地方からの搬入品であろう。

147はゆるく外反してひらく複合口縁をもつ。口縁外面には、5本一組の目の粗い櫛を押し引いて羽状文が施された柳ヶ坪型壺(註6)である。148は小形丸底の壺である。口縁部はやや外反ぎみにひらき口唇はまるい。胴部は球形で、胴部最大径は口径よりやや小さい。口縁外面中ほどと胴部内面には指痕が残る。口縁内面は板状器具で削った後にナデ調整を加える。口縁や胴部の外面にも入念にナデ調整が施されている。

150はくの字状口縁で、先端部を細め直状に外にひらく。胴部は球形で、最大径は中央にあり、底部の突出は少ないが、かなりの上げ底である。口縁下部の外面、胴部内面にはハケメが残るが、口縁部上部外面、胴部外面、口縁部内面はナデ調整がていねいである。

151は口縁部が長く外反する。口縁外面は上部を横ハケメ、下部を縦ハケメ、内面は横ハケメの調整である。153は強く外反する口縁部の外面に斜め右下へのハケメがあり、上胴部には斜め右下へのハケメと左下へのハケメを交互に加えている。庄内系の壺であろうか。154は口縁内面に斜め左下へのハケメが認められる。157は突出した底部で、外面に斜め右下ハケメ、内面に斜め左下ハケメと縦ハケメがある。158は突出する底部と下胴部で、下底面中央にわずかな窪みがある。また内面下部には赤彩痕が残る。内面底部は剥離しており、ここまで赤彩があったものかは不明である。外面はナデ調整されている。159は底縁から中央にかけてヘラケズリにより僅かに上げ底に仕上げられている。内外面とも斜め左、斜め右のハケメが加えられ外面には指痕が著しい。160は底面から下胴部へかけての破片で剥離のため器面調整は不明である。

187は粗い波状文、188は横線文と波状文を施した上胴部である。190は網代状の痕を残す底部破片である。191は葉脈の残る底部片である。195～197は外面に赤彩が施された壺の破片で、195は器壁が厚いが、他は薄い。

高坏 162は坏部がゆるやかに内彎し、口唇部はまるい。脚部は裁頭円錐形をなし、中央部に3円孔が穿たれ、その上方の坏部との接合部分まで12条の横線が粗く施される。坏部はていねいにナデ調整され、脚部は外面にナデ内面にハケメが残る。坏部に3ヶ所と脚中央から脚端にかけて赤彩痕が斑

点状に認められる。163は大きく内彎してひらく坏部である。外面には縦に、内面には斜め左のヘラミガキが加えられる。口唇外面は強い押圧により僅かに外反し、この部分の、ヘラミガキが消されナデが施される。

164は内彎しながらひらく碗形の坏部で、口唇内面を面取りしている。外面には斜め右下へのヘラミガキ内面には斜め左下へのヘラミガキが残る。165～168は円錐形の脚部で、いずれも3円孔の透かしが穿たれている。165・166は外面にヘラミガキ、内面には板状器具により165にはケズリ、166にはハケメが加えられる。167は上部外面に7条の横線が施され、168は内外面ナデ調整である。169・170は坏の底部に残る僅かな稜のあたりから外反ぎみにひらく口縁部である。169は外面の斜め左方にハケメ、内面には斜め左・右へのハケメがあり、170は外面剝離、内面にヘラケズリ痕が認められる。

171・172は脚下方で屈折して外方へひらくタイプである。171は外面をヘラケズリ後、ナデ調整が加えられ、172は屈折部に指痕、内面に縦のハケメが残る。173・174は大きく浅くひらく坏部で両者とも口唇下外面に1条の沈線がめぐっている。173は内外器面剝落のため調整痕は不明、174は内面斜め右ハケ、外面斜め左ハケメである。175・176は下方で屈折して外方へひらく脚部である。175は外面ケズリ後ナデ、内面ナデ調整である。176は外面ナデ、内面指痕が強く残る。

器台 161は加飾された有段器台である。坏部は口縁部が大きく外反し、口唇外面を狭く面取りする。坏の中央部と底部の2ヶ所に鐮状に断面三角形の突帯を付し、その上に刺突文をめぐらす。また上位と下位の突帯の間には4個の円孔を穿っている。内外面は縦のヘラミガキが細密に加えられている。脚部は細い円錐状の部分の下方で外へ大きく外反する。外面上部は縦のヘラミガキ、下部は横のヘラミガキで、その上に3条のヘラ描き刻線が脚裾部に加えられる。内面はナデ調整である。

碗 143は下底部中央に小さな窪みのある碗で、口縁にかけて内彎して開く。内面は板状の器具で削り、外面はナデ調整を行う。144は上げ底の底部から直上する体部をもつ。内面は斜右ナデ、外面は斜め左ハケメを施す。145は内彎して開く碗の口縁部で、内外調整は器面剝落のため不明である。

(5) 南西周溝2区出土遺物

ア、上層出土遺物(挿図第95)

壺 177は上胴部の破片で、横線文の下に刺突文が施されている。

鉢 178は有段の鉢である。口唇外面が面取りされ、そこに刺突文が付される。口頸部下の体部には斜め右ハケが強く残る。

(6) 北西周溝出土遺物

ア、上層出土遺物(挿図第96)

甕 211は台付甕の脚台部で、脚端に向けてやや内彎ぎみに開き、脚端はまるめる。内外面には横位のハケメが残り、脚端ほど著しい。

古銭 214は寛永通寶で、北西周溝の南西端で埋土中から出土した。

イ、下層出土遺物(挿図第96)

壺 212は刺突文が4個ほど残るパレス壺の胴部の小片である。213は、口縁部が大きく外反してひらき、口唇はまるい。胴部は球形、底部は平底でやや突出する。口縁部内面に横、斜め右ハケメ。上胴部に斜め左ハケメ、中胴部に斜め左・右ハケメ、下部に縦位のハケメが残る。

(7) 北東周溝出土遺物

ア、上層出土遺物 (挿図第96)

甕 215は口縁部外面に刺突文を配したS字甕である。S字甕のA類に属するものであろう。

高坏 216は坏部の破片である。217は、中空の柱状をなす脚部で、上位に6条、中位と下位に5条の横線文を施している。脚部下方に3円孔が穿たれている。218は、円錐状の脚で上位に4条、中位に5条、下位に3条の横線文が施され、中位の横線文を貫いて3円孔が穿たれている。

第4節 土 墳

1、土墳の構造

(1) 土墳N—SK1 (挿図第73、図版第53)

土墳N—SK1は墳丘中央やや東寄りで検出された。主軸がN—24°—Eをとり、長径は土墳上端で1.82m、基底面で1.5mを測り、短径は旧中央トレンチで切られているが、残存部分は基底面で95cmをはかる。平面形は北辺の長い隅円の台形状をなす。封土の3層目の暗黄褐色土層と4層目の淡灰褐色土層を深さ31~35cm切りこんでいる。土墳内には黒色有機土層が堆積し25片の古式土師器細片と木炭片が含まれていた。土墳上には淡茶褐色土層と表土(茶褐色土層)が堆積している。

(2) 土墳N—SK2 (挿図第73、図版第54)

土墳N—SK2は墳丘の南辺から約4.5mの位置にあり、主軸はN—40°—Wをとる。残存部の長径は上端85cm、下端76cmを残す。短径は上端77cm前後、下端50cm前後で、表土から3層目の黄褐色土層を掘りこんでおり、内部には黒褐色有機土層が堆積していたが、遺物は検出されなかった。この土墳は25cm前後の深さで、上面には暗褐色土層が覆っていた。

昭和25年当時の墳丘中央部基底面上の埋葬主体部は精査するも検出できなかった。

2、土墳N—SK1出土遺物

(1) 上層出土遺物 (挿図第96)

甕 203は口縁部が厚く、口唇外面を面取りし、端部はひらく。

壺 204はやや突出した底部で平底をなす。外面に斜め右ハケメ痕がのこる。207は肩部破片で粗い波状文が櫛描きされている。

高坏 206は坏部で口唇内面を斜めに押え、外唇に棒状器具で一線を入れる。内面は斜め左へハケメ、外面には縦位にヘラミガキを施す。

碗 205は口縁が内湾する。内外面には斜め左へのハケメ調整が加えられる。

(2) 下層出土遺物 (挿図第96)

甕 202は口縁部内面に横位の太く間隔をやや開けたハケメ、外面には同器具で斜め右へのハケメが強く残されている。

第5節 埋葬主体部と副葬品の復原

1、埋葬主体部の復原

今回の発掘調査では、埋葬主体部及び埋葬主体部への副葬品等は一切検出されなかった。ただ封土の築成や層序の観察から、僅かに埋葬位置の大凡を把握することができたのみである。

昭和25年さざなみ会が墳丘下の第1 竪穴住居址（N-SB1）と埋葬主体部を掘り上げた際、墳丘の南西部に開けた大穴は、32年間野晒し状態であったので、墳丘の盛土状態を明らかにするために壁面を削り、断面を明らかにして実測した。その北壁の断面図にみるように最下層は黄褐色粘土層で、その上に20cm前後の厚さで黒褐色有機土層が覆っているが、この層が一部切れている部分があった。その部分は上端で2.2m、下端で1.7m、厚さ30cm前後、層名は明黄茶色土層である。この部分は、さざなみ会が甕形壺を発見した位置に近く、墳丘全体の中心に当たる。この地山層上の黒褐色有機土層を切る土層は北東トレンチの南西部分にも見られる。

埋葬主体部について述べたものとして、さざなみ会の「浪ノ上遺蹟調査日誌（1950年）」と久永春男氏の「浪ノ上第1号墳（1984年）」がある。重要なので、該当部分を全文引用する。

さざなみ会 「浪ノ上遺蹟調査日誌」『いづみ』より 牛川青年団 1950

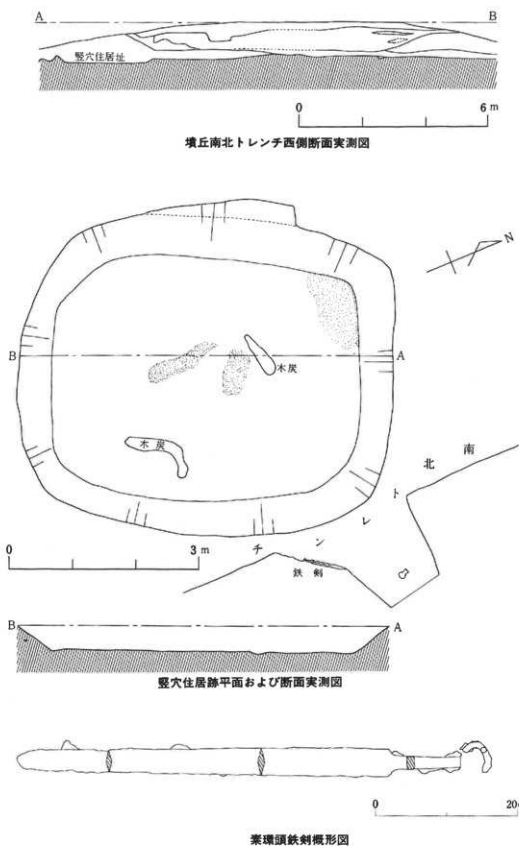
三月十二日 日曜日 晴

第一住居址を今日完全に出すべく掘ると共に住居址の外側に登呂遺蹟の如き住居址の外側に溝の有无を調査する為に東側の黄土層に沿って掘り進むと黄土層より高さ二十センチ位の位置（図J点）に錆びた両刃の剣、全長二尺一寸五分、刃渡り一尺七寸が出た。第一住居址には溝がない事が判明したが、吾々は剣に活気づき更に掘進んだ処、図K点の位置に当時酒などを入れたものではないかと思われるヒョウタン型の弥生式後期の完形壺が掘り出された。午後久永氏を始め東洋大学生の大和久氏、高校の芳賀君等三名来り第一住居址の清掃を吾々と共に行った。カマドらしきものの位置方向は住居址の北側の隅であり、方向はN-80° - Eである。これは当時何に使用したか判明しない。

久永春男 「浪ノ上第1号墳」『石巻文化財第6号』 石巻地区文化財保存会 1984

浪ノ上第1号墳が、牛川町の青年団「さざなみ会」の人たちによって発掘され鉄剣一口と土器とが出土したという報せをうけたのは1950年3月、私たちが五貫森遺跡の発掘調査をおこなっていた最中であつた。とりあえず私は浪ノ上の現場へかけつけて、遺物の出土状況を検討した。

浪ノ上1号墳は直径約20m、高さ約1.5mの円墳で、墳丘の中央に南北に幅1m、長さ18mのトレンチが掘通してあつた。墳頂部の中央の封土から、脚に3個の透かし孔をうがつた高環数個体が、割っておさめたとおぼしい状態で出土していた。そして墳丘中央部の基底面から、素環頭鉄剣一口と完形の甕形壺1個が発見されていた。墳丘の断面を精査すると、鉄剣と壺が含まれていた地点は、長さ約2m、高さ40cm～50cmほどがやわらかな黒色土で、それをかこむ封土の堅いしまり方と明瞭に識別され、そこに木棺が埋置されていたらしいことが推定された。私は応急処置としてトレンチの西側



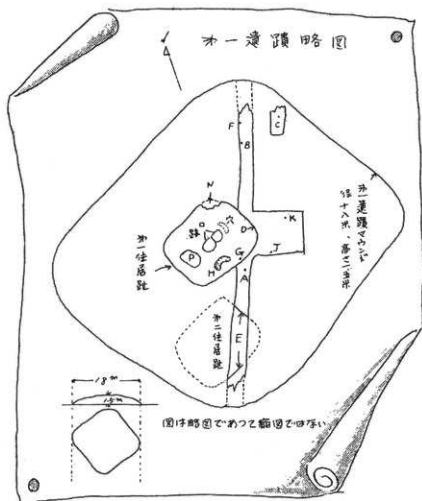
挿図第80 昭和25年発掘当時の実測図（久永春男『浪ノ上第1号墳』より引用）

の封土の断面図を作製した（挿図第2、本文挿図第80）。鉄剣が横たえられていた地点から60cm西へ隔たった地点に墳丘下に竪穴住居跡らしい落込みがあることがわかった。

前記の2文献に共通する点は、埋葬主体部から鉄剣と甕形壺が出土したことである。次に出土状態をみると、さざなみ会は「黄土層より高さ20cm位の位置（図J点）」とし、久永氏は「鉄剣と壺が包含されていた地点は、長さ約2m、高さ40cm～50cmほどがやわらかな黒色土で、それをかこむ封土の堅いしまり方と明瞭に識別され、そこに木棺が埋置されていたらしいことが推定された」と記されている。

さざなみ会は、前記日誌と共に「第一遺蹟略図」（挿図第81）を残している。それには、「第一遺蹟マウンド、径18m、高さ1.5m」として方形のマウンドが描かれ、その中央にトレンチが設定され、その中央部に第1住居跡が示され、その東に拡張区も設け、埋葬主体部を掘り上げ、J点に素環頭鉄剣、K点に甕形壺を発見し、図に明示している。しかし、「図は略図であって縮図ではない。」と付されているごとく、スケールがなく縮尺が不明であるので正確な出土位置は出せないが、竪穴住居跡

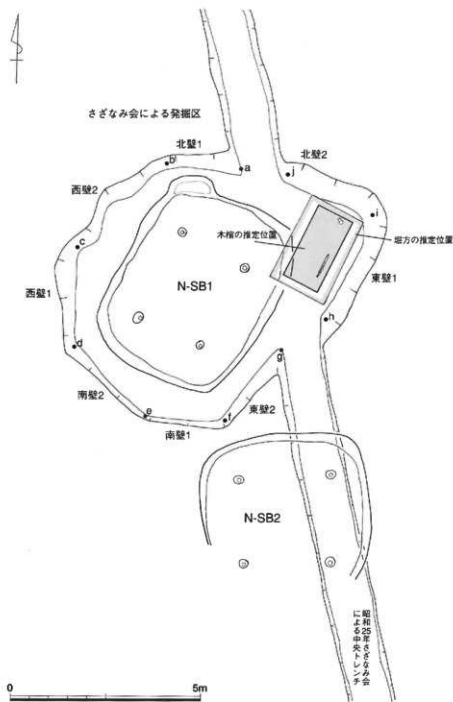
- 記号の説明
- A 有機土層より土器破片
木炭が多く出土
 - B 小貝層を発見
 - C 土器破片数点、柱跡と
思われる穴を発見
 - D 黄土層の底に25cmの壁
 - E 住居跡らしい壁発見
 - F 石鏃出土
 - G 直径10cm位の穴を発見
 - H 長さ1m、幅10cm、高さ
5cm位の半月形の所
 - J 鉄剣出土
 - K ヒョウタン型の甕形壺が
出土
 - N かまど跡と思われる炭と
焼土の折り重なった所
 - P 掘り残した所



挿図第81 第1遺蹟略図（さざなみ会の「浪ノ上遺蹟発掘日誌」より引用）

N-SB1の東コーナーの南東部から鉄剣、同コーナーの東方から瓢形壺が出土したことはわかる。

一方久永春男氏は、『竪穴住居趾平面および断面実測図』（挿図第82）の中央トレンチ東拡張区に鉄剣と瓢形壺を図示されている。挿図の鉄剣の長さは1.1cmである。縮尺は1/60であるので、1.1cmに60を乗ずると鉄剣の全長は66cmとなる。この長さは、さざなみ会の記録による全長2尺1寸5分（65.2cm）や久永春男氏の『素環頭鉄剣概形図』から算出した66.7cmに非常に近い数字であり、剣身部の錆や呑口部の記入など実に詳細である。この図の信憑性が高い証拠である。鉄剣の鋒の位置は、中央トレン



挿図第82 埋葬主体部の復原図（アミメ部分）

チ東壁ラインから東へ69cmであり、柄頭の位置は中央トレンチ東壁ラインから東へ30cmのところにあり、鋒はN-25°-Eを指している。瓢形壺は、その中心部が、中央トレンチ東壁ラインから東へ1.38mの位置にあり、瓢形壺の口部はN-35°-Wを向いて横転している。また瓢形壺と鉄剣（鋒）との間隔は84cmである。

以上の所見を基に今回発掘調査の竪穴住居址N-SB1と中央トレンチ拡張区平面図の鉄剣と瓢形壺の位置を記入したものが、挿図第82である。鉄剣は久永春男氏のいう「鉄剣が横たえられていた地点から60cm西へ隔たった地点に墳丘下に竪穴住居跡らしい落込みがある」と明記されている。まさにその地点を今回の実測図中に復原することができた。

浪ノ上1号墳の埋葬主体部は、墳丘中央部の黄土層（地山の黄褐色粘土層）より約20cm高くから鉄剣と瓢形壺が出土し、それが包含されていた地点は、長さ約2m、高さ40cm～50cmほどの軟らかな黒色土層で、そこに木棺が埋置されていたと推定されるのである。そして木棺の据えられた掘方部分は、東西1.7m（南北は不明）ほどであったことが、北壁図2から考えられる。

2、副葬品の復原

(1) 素環頭鉄剣の各部位数値

さざなみ会の調査日誌には、「黄土層より高さ20cm位の位置（図J点）に錆びた両刃の剣、全長2尺1寸5分、刃渡り1尺7寸が出た（3月12日）。」と記されている。

久永春男氏の「浪ノ上1号墳」には、鉄剣の寸法の記載はないが、「素環頭鉄剣概形図」（挿図第80）がある。鉄剣が錆化し、損壊し、小片が破棄されて復原が叶わない今となつては貴重な記録である。本図を拡大して、細部を計測し、算出できたことを述べよう。

全長は66.7cm、刃部は52.1cmである。さざなみ会の記録をメートル法に換算してこれと比較してみると、さざなみ会の記録では全長2尺1寸5分=65.2cm、刃部1尺7寸=51.5cmである。概形図との違いは、全長で1.5cm、刃部で0.6cmという僅差であった。両者の数値は信頼できるものとして評価されよう。

その他、素環頭鉄剣概形図によれば、刃部の幅は、鋒から12.7cmの部分で幅が3.1cm、鎗部分の厚さ0.8cmであり、鋒から39.4cmの部分で、剣の幅3.8cm、厚さ0.9cmである。

また、柄部についてみると、長さは10.3cm、幅は鐙元で1.9cm、柄尻で1.6cm、厚さは1.1cmである。さらに環頭部についてみると、素環頭の長さ4.3cm、幅は約5.9cm、その太さは0.8cmをはかることができた。刃部と柄部の比は約5:1となる。

(2) 素環頭鉄剣の特徴

久永春男氏は前述の文献の中で、鉄剣について、「後藤守一先生から、素環頭鉄剣の柄椿えが呑口式で、古墳時代前期の椿えと一致することを教示された。」と述べている。

さざなみ会の日誌によると、3月23日の條に、「後藤先生から剣は環頭の剣であり、構造からみて外地からのものでなく内地で製造されたものようである。」と説明されたまま記している。さらに、鉄剣について明治大学後藤守一氏、奈良国立博物館事務官榎本亀次郎氏に詳しい鑑定を依頼したところ「この剣は、断面の角度が菱形で、柄と刃の長さが1対5の割合であるところから、当時中国の上

士(将官)用のもので、これほど完全に掘出されたのは日本では珍しく、弥生式末期の正に国宝級のものだと太鼓判を押した通知を受け、会で桐の箱を作成し、これを収め、豊橋市収入役・瓜郷遺跡調査会長丸地古城氏宅へ保管を依頼した。」と記されている。

藤田等・川越哲志両氏の「弥生時代鉄器出土地名表」(註7)によると、国内における素環頭鉄刀の出土は9例あるが、素環頭鉄剣の出土は、わが浪ノ上1号墳のみであり、極めて貴重な例であることがわかる。

また日本考古学協会が主催した「東国地方における古墳出現期の様相(註8)」によれば、鉄剣は38例あるが、素環頭鉄剣の出土例は皆無である。また鉄刀は15例あり素環頭鉄刀は1例みられる。大塚初重氏の「大和政権の形成—武器武具の発達—(註9)」には「鉄製剣の茎のはしに素環をつくったものが、大阪府城山古墳から発見されているのは、めずらしい例である。」と述べられているが、詳細は不明である。鉄槍はしばしば鉄剣と誤認されることがあり、特に呑口式の場合鉄槍に多いが、本例のように素環頭が備っているものは鉄剣として申し分ない。

弥生時代の遺跡から出土する素環頭大刀は柄部(茎)の幅と刀身の幅とに差がないが、浪ノ上1号墳の鉄剣はその幅が柄頭で1.6cm、柄元で1.9cmであるのに対して剣身の幅は鞘口で4.0cm、中程で3.6cmであり、柄幅は刀身幅の1/2であることから古墳時代前期の遺物としてよいであろう。

本鉄剣は、両刃で、剣身に鋸があり、断面は扁平な菱形を呈する。剣身の長さは51.9cmに比して柄の長さは10.3cmであり、片手でやっとな握ることができる長さである。

(3) 瓢形壺の復原

久永春男氏の「浪ノ上第1号墳」の「竪穴住居趾平面および断面実測図」によれば、鉄剣の鋒の指す方向に瓢形壺が描かれている。鉄剣の形状とその数値がきわめて正確に図示されているので、この壺についてもその実像が示されているものと考えられる。

まず瓢形壺の形態であるが、口縁部は大きく開かず、口径は胴径よりも小さい。前記の図から瓢形壺の数値を求めると、口径7.2cm、胴径12.6cm、器高15.0cm、胴部高7.8cm、口頸部高7.2cmである。このように胴部径より口径が小さく、口頸部高が胴部高より小さい瓢形壺は、瓢形壺の中でも新しいタイプであり、欠山期よりも一時期遅れた古墳時代前期の所産であると推定される。

第6節 封土下の竪穴住居址

1、竪穴住居址N-SB1

(1) 遺構(挿図第83、図版第51)

竪穴住居址N-SB1は、昭和25(1950)年2月20日、さざなみ会による浪ノ上1号墳の中央トレンチ発掘中に見出されたもので、瓜郷遺跡調査会の指導を受けながら、3月8日調査を終えた。

「浪ノ上遺跡発掘日誌」と、それに添えられた「第一遺蹟略図」に基づいてまずその概要を記すことにする。

ア、第一住居趾の形状は長軸5m、短軸4mの隅円の長方形である。

イ、壁の上部に沿って12個の石が不規則に並んでいた。

ウ、壁の高さは25cm位である。(D点の位置)

エ、黄土層(地山)と黄土層の間に木炭層、焼土が現われ、火災跡と推察される。

オ、住居跡の土床より材木の炭化したと思われる炭が折重なって現われた。

カ、図Hの如く、幅20cm、長さ1m、高さ5cm位の半円形の埴形の高い所が現われた。

キ、中央の炉跡らしき焼けた茶褐色の所が出た。この北側に隣接し、図の如き三日月形の長さ40cm位、深さ10cm位のくぼんだ穴が発見された。中央の炉跡に南接し、又50cm平方位の炉跡らしき茶褐色の所を発見した。

ク、北側のN点の位置にカマド跡と思われる炭と焼上の折重なった所が出た。

ケ、図のG点から柱跡と思われる直径10cm位の穴が中央らしき方向に向かっている。

コ、出土遺物としては、7の三日月形の窪みから土器破片少数、N点から弥生式後期の土器破片数点が現われた。

久永春男氏は、『浪ノ上第1号墳(1984)』の中で、この住居址について、「中央に炉跡があり、北壁側には強く火熱を受けた跡があって、火災に遭ったことを示していた。」と記されている。

竪穴住居址N-SB1は、浪ノ上1号墳の西側の墳丘下に検出されたが、今回の調査以前、上記のごとく発掘調査されていた。その後の再調査に備え、発掘された床面は厚さ10cmほどの川砂で覆い保護されていたが、発掘後32年経過しているので土砂の流入や草木の繁茂のため発掘区は掘り鉢状をなし、竪穴住居址の平面形は体をなしていなかった。そこで十字に畦を残し、4グリッドに分けて壁面、床面の精査をした。

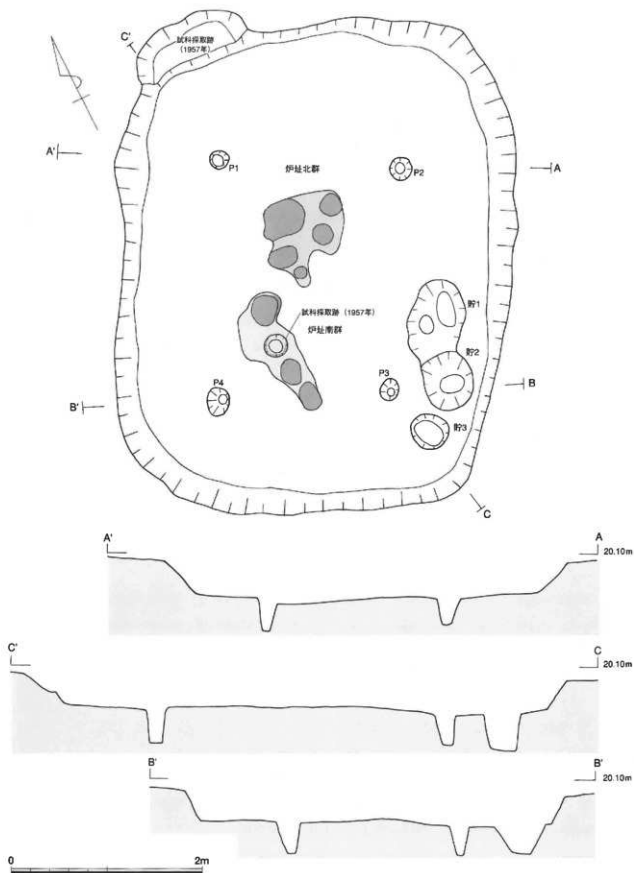
その結果、N-SB1は、長軸をN-27°-Eにもつ、平面形が隅隅で胴張りの長方形をなす壁高約40cmの竪穴住居址であり、四隅に柱穴を確認できた。北角の柱穴をP1とし、時計まわりに、東のものをP2、南をP3、西をP4とする。Pの数値は、(上端の長径×上端の短径・下端の長径×下端の短径・床面からの深さ)の順に記し、単位はcmとする。尚、壁溝は認められなかった。

P1(22×20・14×12・35)とP2(25×25・13×12・28)の間の長さは、柱穴の中心から中心までは1.90mであり、P3(24×21・10×7・32)とP4(30×24・10×10・35)の柱穴間の長さは、1.78mである。また、P2・P3間は2.40m、P1・P4間は2.52mである。

P1とP3、P2とP4を結ぶ線の交点を本竪穴住居址の中心とみなし、それより壁面に上下、左右に延長した垂線を求めると、南北径は上端5.16m、下端4.82mを測り、東西径は上端4.10m、下端3.70mを測る。面積は20.64㎡で、坪数にして6.37坪、6畳2間ほどの広さとなる。

昭和25年の発掘時の所見では、さざなみ会と久永氏は、焼土や木炭が折重なって現われたので本竪穴住居址が火災に遭遇したことを想定されている。今回の調査では、床面上のそうしたものは検出されなかったが、北コーナーの部分は赤褐色に焼け締っていた。

炉址は、四柱穴を結んだ、竪穴住居址の中央部分に北群と南群の2群があり、それぞれの焼土面の広がり、北群で東西84cm、南北で98cmの範囲に、円形の特に焼け固まった部分が5ヶ所あった。その中の最大のものは、46cm×40cm、最小のものが16cm×14cmであり、他は、25cm～30cmの径をもつ焼土面である。一方南群の方は、東西20cm～40cm、南北1.36mと、細長い焼土の広がりの中に、特に焼け固まった部分が、4ヶ所認められた。その形はほぼ円形をなし、北から、径30cm、径26cm、径24cm、



挿図第83 竪穴住居址N-S B1実測図

径30cmと大きさが相似している。北から2番目の焼土は、中心が13cm×15cm、深さ15cmほど掘り抜かれた痕があった。これは、「1957年11月1日、東京大学人類学教室の渡辺直経氏とともに私が竪穴住居跡のか跡から、熱残留磁気測定資料を採取した（久永氏前掲論文）」痕跡であった。

炉址群は、北群が大きな圓が裏を、南群が並びかまどを想定させるものであった。

貯蔵穴は、竪穴住居址の南東部に3ヶ所設けられていた。最も北の貯蔵穴1は東西66cm、南北76cmの楕円形をなし、深さ21cmを測る。底には、径14cmから径20cmの浅い窪みが2ヶ所ある。その南端に接して東西52cm、南北60cmの卵形の貯蔵穴2がある。その深さは32cmである。貯蔵穴3は東西38cm、南北40cmのほぼ円形で深さ43cmである。いずれも断面は鍋底形である。

北コーナーには、竪穴住居址の壁面から更に突出したテラス状の部分がある。南辺は96cm、北辺は76cm、南北の幅は28cmである。竪穴住居址の床面から14cmの高さである。壁の上端は、このテラス床面より18cm高い。焼けていることもあるが、固く締まり、出入口部分の階段ではないかと思われた。しかし、このテラス部分は、前記さざなみ会の『第1遺蹟略図』にも、久永春男氏の『竪穴住居址平面および断面実測図』のいずれにも存在しない。昭和25年の調査時なかったものが、今回の発掘調査で出現したということは、その間に誰かが掘ったことになる。

渡辺直経氏が浪ノ上1号墳の封土下に埋存した第1住居址（N-SB1）の熱残留磁気測定試料を採取した位置は、同氏の論文「浪ノ上竪穴住居の地磁気年代学的考察」（『瓜郷』所載 1963）の試料の項に「方形の発掘区の北側上層断面に近く、竪穴住居の壁面の一部と思われる場所で、床面より高い位置に煉瓦色の焼上層がある。赤色の焼上の厚さは3層内外で、層は傾斜している。これは果してか跡かどうか明らかなでないが、竪穴の時代のもと考えられるので、2個の試料を採取した。」と述べられている。これにより、北側テラス状部分は、試料採取とその後の土崩れの跡とわかった。

さざなみ会が記録した7の三日月形の窪みは今回確認できなかった。また6の半円形の埴形の高いところ（マウンド）も残存しなかった。さざなみ会の略図の示すところでは、竪穴住居址の東部に当るので、貯蔵穴や炉址との関連が考えられる。

本竪穴住居址では、柱穴を基準に、計画的な施設の設定がなされている点が明確である。すなわち炉址は、その殆んどを4柱穴の内側にまとめ、しかも、北部の炉址群と南部の炉址群の機能を分けている。貯蔵穴はP2・P3の柱穴の南東部分に集中している。他の空間は、寝所とか物置、仕事場などに使用されたものと考えられる。

（2）遺物

ア、貯蔵穴出土遺物（挿図第98、図版第75）

貯蔵穴1 埋土中 壺 255は口縁部に縄文をもつ遠江系の壺片である。

貯蔵穴2 埋土中 高坏 243は碗形高坏の口縁部で、外面はヘラミガキしている。

壺 245は、瓢形壺の口縁部で口端の内側を斜めに切り、内外面はナデ調整している。

256は、壺の胴部に施された篋描き画文で、上弦の弧文をなす。

貯蔵穴3 底面 いずれも底面に張り付いた状態で検出された。

壺 240は8条の櫛状器具で描いた横線文と波状文が上下交互に施されているが、その施文の前に器面を縦にヘラミガキしている。254は240と同類である。

高坏 258は口縁部で口唇外面に浅い凹線、内面は斜めに切られている。

イ、床面出土遺物（挿図第100）

石器 253は、N1-SB1の中央床面から出土した剥片石器である。白色に風化している。

ウ、埋土中出土遺物（挿図第100）

鉢 241は口縁部である。242は、口縁の外面が斜めに面取りされ、口頸部に段がある。

壺 244は、瓢形壺の口縁部である。257は壺の胴部片であるが2条の線刻文がみられる。

高坏 246は脚部で、脚上部に6条の櫛描き横線文がある。247は口縁部である。

甕 249は、台付甕の下胴部であり、250・251は台付甕の脚台である。

深鉢 259～261は、水神平式土器であり、262は純水神平式土器である。

石器 252は石器の剥片で、埋土中から出土した。

エ、浪ノ上1号墳墳丘下の第1竪穴住居址出土と伝承される高坏（挿図第98の248、図版第75）

昭和25年時発掘調査の出土品のうち、現在豊橋市牛川校区市民館に保管されている「素環頸鉄剣」は錆化し、崩壊しながらも柄の箱に残されている。他の土器類については、牛川校区市民館の所蔵品の中に3片の高坏の破片が、「浪ノ上住居址、昭和25年調査」と記録されハマグリ貝殻10点と共に残されている。1982年の調査時、浪ノ上稲荷社社司の鈴木敏二氏・鈴木敏夫氏から古い紙袋に入った土器の破片を寄贈された。その復原に当たり、紙片に「浪ノ上竪穴 昭和25年」を見出した。この土器は牛川校区市民館所蔵の昭和25年浪ノ上住居址出土の高坏の破片と接合したのである。両者に貼付された発掘年と発掘場所の一致と土器の接合から浪ノ上1号墳下の竪穴住居址N-SB1の出土品とみて、ほぼ間違いなからう。

高坏 248は、大きく深い坏部の口縁をわずかに内彎させ、口唇部内面を斜めに削っている。坏部外面は底部近くで稜をなし脚部に接合する。脚部は上部で外に開くが、中間から内彎し先端はまるめられている。脚の上端から1/3に3個の円孔が穿たれているが櫛描き横線文はない。器体表面は荒れてヘラミガキなどの調整痕が磨滅しているが脚内面に先の鋭い筥状器具で3条ないし4条の浅い上弦の弧文を記している。256の弧状をなす文様と共に、欠山期の特徴を示すものであろうか。

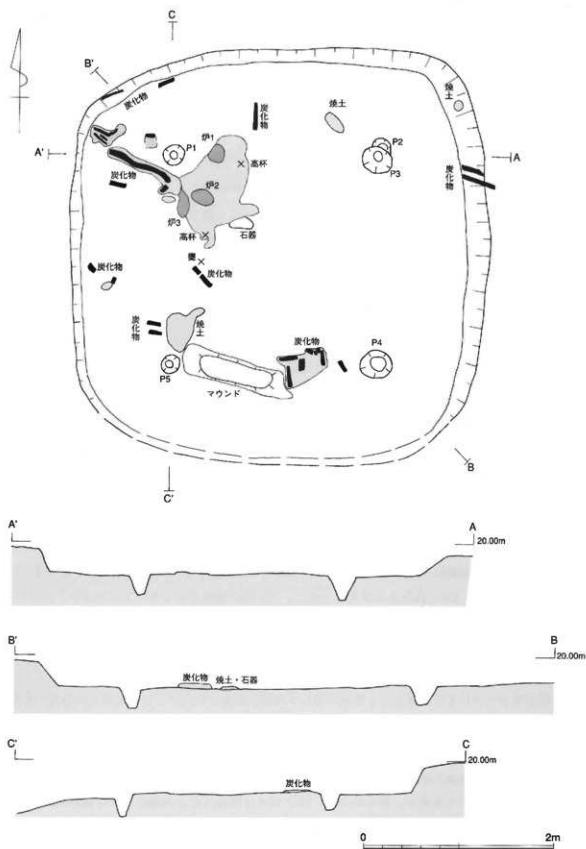
2、竪穴住居址N-SB2

（1）遺構（挿図第84、図版第52）

竪穴住居址N-SB2は、浪ノ上1号墳の墳丘下南部に検出されたが、N-SB1の南壁から僅かに1.5mの至近の位置にその北西コーナーを接している。

本竪穴住居址南壁すべてと西壁の南側1/3は、浪ノ上1号墳の周溝掘削のため削平されていた。残存する壁高は、20～25cmである。壁溝は精査するも認められなかった。

埋土を排出し床面近くなると、夥しい木炭、灰、焼土が現われた。木炭の太さは径2.5cmから3.5cm大のものが多かったが、中には径5.5cm大のものも出土した。出土位置は、柱穴の近くに多い点も注意をひいた。焼土は厚さ2～2.5cmで赤く焼け締っていた。P2からP4付近は、昭和25年の調査時中央トレンチが設定され壁や床面を削平しており、木炭等は殆んど残存していなかった。N-SB2も、N-SB1と同様火災に遭ったことを物語っていた。



挿図第84 竪穴住居址N-S B 2実測図

本竪穴住居址には5個の柱穴が検出された。北西のP1(24×21・9×10・19)と北東のP2(20×20・15×14・26)の間は2.16m、南東のP4(33×26・17×16・22.5)と南西のP5(22×16・9×8・26)の間は、2.18mである。P3(32×29・8×8・14.5)は、他の柱穴と比べて浅く、しかもP2を切っており、P2の補助柱としての柱穴であろう。なお、P1とP5の間は2.20m、P2とP4の間は2.26mである。それぞれの柱穴間の長さは、2.16mから2.26mの間にあると言えよう。柱穴P1とP5を結ぶ線、柱穴P2とP4を結ぶ線は、いずれも真北をさしている。

本竪穴住居址の東西径は上端で4.40m、下端で4.06mであり、南北径は欠損する南壁を補って、上端で約4.36m、下端で約4.14mと推定される。平面形は、隅隅部分が極めて大きい胴張りのある方形の竪穴住居址である。炭化物の位置やその方向からこの住居は寄棟造である可能性が高い。

炉址は北西部に1箇所(25×24)あり炭化物は東西0.8m、南北1.2mの範囲に広がっていた。

炉址の南辺には、長径25.5cm、短径12cm、厚さ2～3cmの平たい石が置かれていた。土器片は炉址の北部や南部の床面上に検出されたが、多くは細片となっていた。貯蔵穴は古墳の周溝の掘削に当たり削平されたものが検出できなかった。

南西部には、基礎部分が東西1.28m、南北28cmの長方形で、平らな上面の東西76cm、南北26cm、床面からの高さ5cmのマウンドが検出された。さざなみ会の記録には、N-SB1にも「幅20cm、長さ1m、高さ5cm位の半円形の埴形の高い所が現われた。」と記されている。浪ノ上遺跡B地区のSB3においては貯蔵穴を取り囲むように八の字形の高さ5cmほどのマウンドがあり、C地区の大形竪穴住居址であるSB7では、貯蔵穴の西に接し長さ3.3m、幅1m、高さ10cmのマウンドが設けられている。またD地区のSB5でも貯蔵穴を取り囲むように赤土で固めたマウンドが幅20cm、高さ10cmの規模でつくられていた。このような例からみて、これらのマウンドは厨房コーナーに設けられた俵板や食器、食材をのせる調理台的なものである可能性が高い。

(2) 遺物

ア、床面出土遺物(挿図第101、図版第75)

高坏 263は、坏部で、炉址の南縁を中心に検出された7片を接合したものである。坏部は大きく深く、口縁部はふっくら内彎している。口唇内面は斜めに削られ、外面の面取りと合わせて、端部は鈍い三角状となる。器表は剥落が著しいがヘラミガキの調整痕が所々に残る。胎土が白色系の肌理こまやかな粘土で注目される。

石器 271・272は敲石で、炉址の南縁で検出された。両石とも一部に原石面を残し、前者は下部に、後者は表裏に敲打痕を残す。風化していて石質は不明。273は扁平な河原石で、硬砂岩製の石皿である。上面は磨滅し、凹面をなす。側面や底面の1/4位が火熱を受けており、石皿としての機能以外にフライパン的な使用も考えられる。

イ、埋土下層出土遺物(挿図第101)

甕 267は、口縁外面に圧痕列をもち、内外面にナデが加えられる。口縁外面上半部は煤けて黒ずんでいる。268は、口唇部に刻みをもち、口径が小さい。269は、口縁内面に浅い圧痕列をもつ。270は、台付甕の脚部である。脚部は僅かに内彎し、端部外面は3mmほどの幅で凹んでいる。外面はナデ、内面は櫛状器具で短かく押引状に調整されている。

ウ、埋土上層出土遺物（挿図第101）

高坏 264は脚端を欠くが、ほぼ全形を知ることができる有縁の高坏である。坏部は深く、全体にゆったりと内彎し、内外面を縦にヘラミガキする。口縁部は、口唇内面を斜めに削り、外面は口唇から4mmほど下に幅4mmほどの浅い凹線をめぐらし、口唇部を薄くなめらかに仕上っている。内外面とも縦位のヘラミガキを施す。脚部は上端から2cmほど下に3個の円孔を穿つ。縦位のヘラミガキは坏部と同様であり脚中間点あたりから内彎傾向をもつが、脚端の形体は不明である。胎土は白色系である。

壺 265は壺の肩部小片であるが、5本の櫛状器具で描かれた波状文と横線文が加えられている。波状文の波高は低く、波長が長いのが特徴である。266は3本の櫛描き波状文と横線文が施される。

第7節 年代と性格

浪ノ上1号墳の封土下で検出された竪穴住居址（N-SB1・N-SB2）、南西周溝1区下層および南東周溝2区下層から出土した土師器の中で出土数の多い高坏は次の3類に分けられる。（挿図第85）

A類

- ・坏部は深く、口縁部が大きく開き上方でやや内彎し、下底で稜をつくる。
- ・脚部は丈の高い裁頭円錐形で、下半を内彎させ、3個の円孔をうがっている。
- ・器面を縦に研磨し、口唇内面を面取りする。脚部上方に横線文のあるものといものがある。

B類

- ・坏部は浅い半球形をなし、下底で稜をつくるものとつくらないものがある。
- ・脚部は裁頭円錐形で、3個の円孔をうがつ。横線文が残るものもある。
- ・器面は研磨されるものとナデ調整されるものがある。口唇はまるく面取りはない。

C類

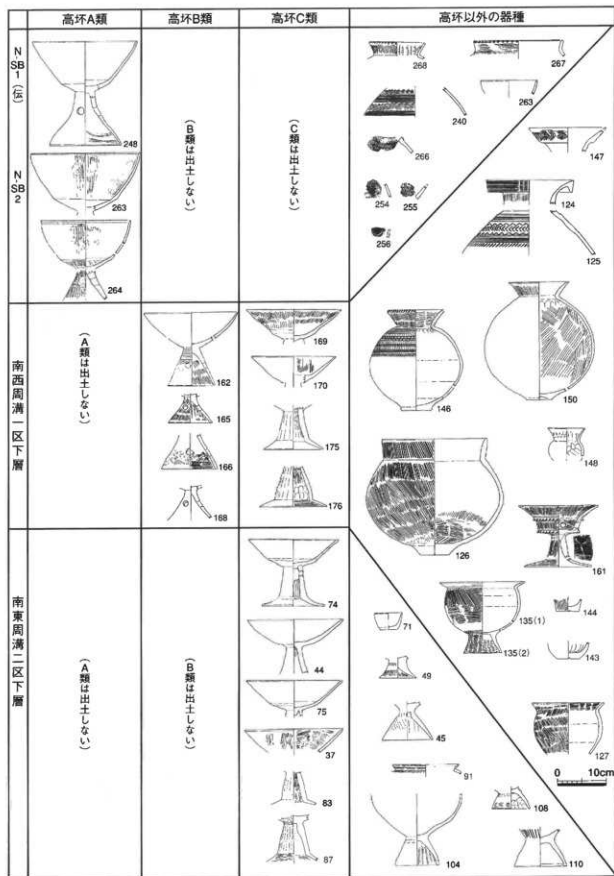
- ・坏部は浅く、口縁部の開き方は直線的で、口縁に至ってやや外反ぎみとなる。
- ・坏部の下底には稜の痕跡が残るものといものがある。
- ・脚部は径3cm前後の円筒形で下方へいくほど僅かに太くなるが、下部で外折し脚端をひらく。
- ・表面はケズリ後、ナデ調整される。口唇はまるく面取りはない。

A類と比定されものに248（N-SB1）と263・264（N-SB2）があり、いずれも封土下の竪穴住居址出土である。南西周溝1区下層と南東周溝2区下層からはA類の検出はなかった。

B類に比定されるものには162・163・164・165・166・168の6個があり、すべて南西周溝1区下層から検出されたものである。封土下の竪穴住居址や南東周溝2区下層からは出土していない。

C類に比定されるものは、南西周溝1区下層から169・170・171・172・174・175・176の7個があり、南東周溝2区下層からは、37・44・74・75・83・87の6個が確認されている。封土下の竪穴住居址からはC類も出土していない。

墳丘や周溝がつくれる以前に営まれた竪穴住居址出土のA類は、三河・尾張地方の弥生時代後期後半の欠山式土器（註10）である。そしてこの竪穴住居址の上に築成された浪ノ上1号墳の南西周溝



挿図第85 高坏A類・B類・C類および主な他器種の出土地点

1区下層から出土したB類は、三河地方で王江式土器（註11）と型式設定がなされている古墳時代前期の高坏である。さらに、南西周溝1区下層と南東周溝2区下層から出土したC類は、三河地方で古墳時代中期に設定されている青山式土器（註12）に属するものである。

次に高坏以外の器形についてみると、N-SB1の貯蔵穴2から出土した壺（240）、N-SB2出土の壺（265・266）は、いずれも器面を縦に研磨した上に櫛描きの横線文と波状文を交互に重ねているが、波状文は波長に長短がみられる。また、上弦弧文（256）がみられるのも欠山式土器の特徴である。

南西周溝1区下層出土の壺には、赤彩広口壺（146）、パレス壺（124・125）、柳ヶ坪型壺（147）、広口壺（150）などがあり、鋸歯文、羽状文、刺突文、斜行文、横線文、棒状貼布文と文様構成が多彩である。南東周溝2区下層からは赤彩壺の破片が1例出土している。これらはいずれも古墳時代前期に属するものである。

南西周溝1区下層出土の加飾器台（161）は、大きく外方に開く坏部の外部に刺突文の施された2段の突帯を有し、その間に4個の透かし円孔をもつ。脚部は細く、下方で屈折し外へ開き、そこに4条の刻線がきざまれている。基本的には近畿地方の庄内古式の加飾器台をベースに北陸系の装飾（突帯・透かし孔）を簡素化してつくられている。このような加飾器台は近畿では古式土師器の初期の段階にかざられるところ（註13）に注目したい。

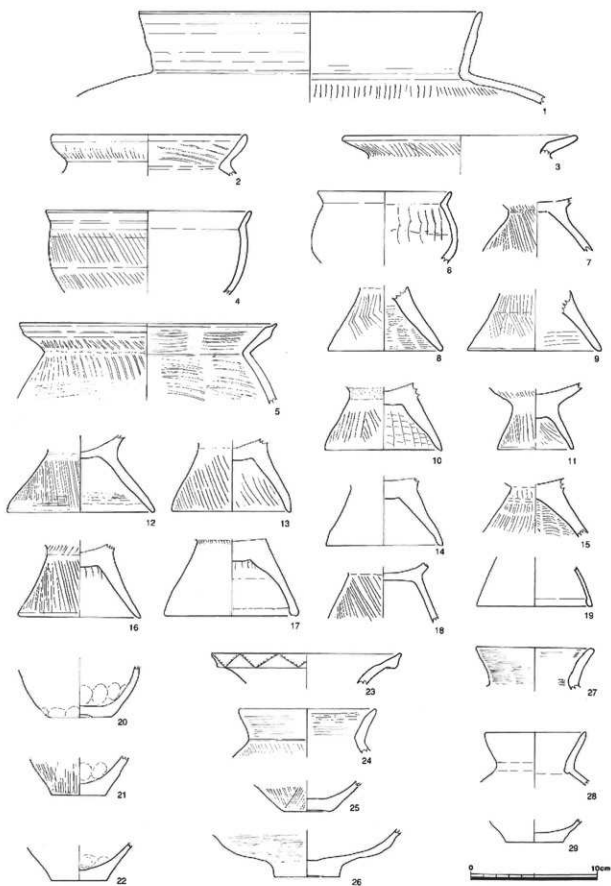
台付甕の脚台は、南西周溝1区下層から6個（150・152・154～157）、南東周溝2区下層から7個（104・105・108～110・112・114）が出土している。その脚台部の多くはハケメ調整が加えられているが、このうち南西周溝の3個（155～157）と南東周溝の1個（112）には、羽状のハケメが施されている。この羽状文が柳ヶ坪型壺（147）はもとよりパレス壺（125）、赤彩広口壺（146）にまで広く用いられているところが興味深い。

以上をまとめると、浪ノ上1号墳を築造した人びとは、弥生時代後期後葉の欠山期に営まれたN-SB1（放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果、1世紀前半～2世紀前半という年代が示されている。）（註14）、N-SB2（放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果、2世紀前半～3世紀中頃という年代が示されている。）（註15）という2軒の竪穴住居址が営まれていた台地の崖端に近い平地を占地して、その四周を方形に削り、四辺に接して周溝を掘削した。それらの土をもって、まず四周に沿って土堤状に封土を築き固め、中央部に埋葬空間を残し、埋葬後、被葬者には甕形壺と素環頭鉄剣が副えられ、中央部も封土で覆われた。南西周溝1区周辺では祭祀のための壺や高坏が置かれ、台付甕でよもつへぐいの用意がなされる。そこには、弥生時代の後期後半に繁栄した欠山式土器の姿はなく、古墳時代の開幕を告げる古式土師器のみが据え置かれていた。その後、祭祀は南東周溝2区周辺でも挙行され、この地方で古墳時代須恵器第1型式の器種が広まる5世紀後半まで続いたようである。浪ノ上1号墳は、弥生時代と古墳時代を画するものであり、その築造の時期は3世紀後半以降であろう。

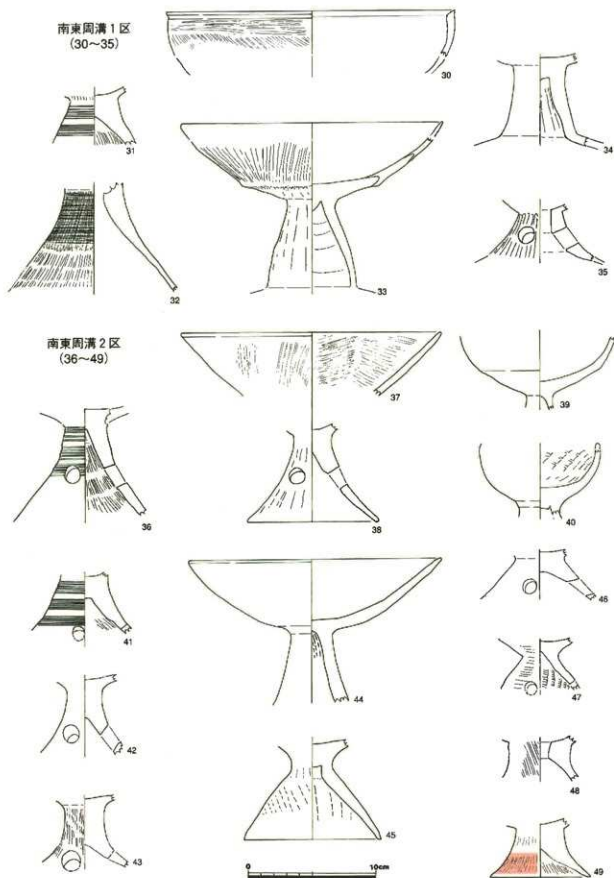
被葬者は、副葬品の量こそ少ないが、この地方では出土することが希有な素環頭鉄剣を所持している。鉄剣を帯び酒器の甕形壺を手にする姿は、『三国志』の英雄豪傑を彷彿させるものがある。浪ノ上1号墳の被葬者は、豊川中流域左岸一帯（旧八名地域）を支配した地方豪族の一員であったと推察される。そして、この被葬者は、周溝出土の土師器の中でも特に、加飾器台やパレス壺、赤彩広口壺などの外来系土器にみられるように広く近畿・北陸・東海地方の諸豪族と交流のあったことを示唆し

ている。

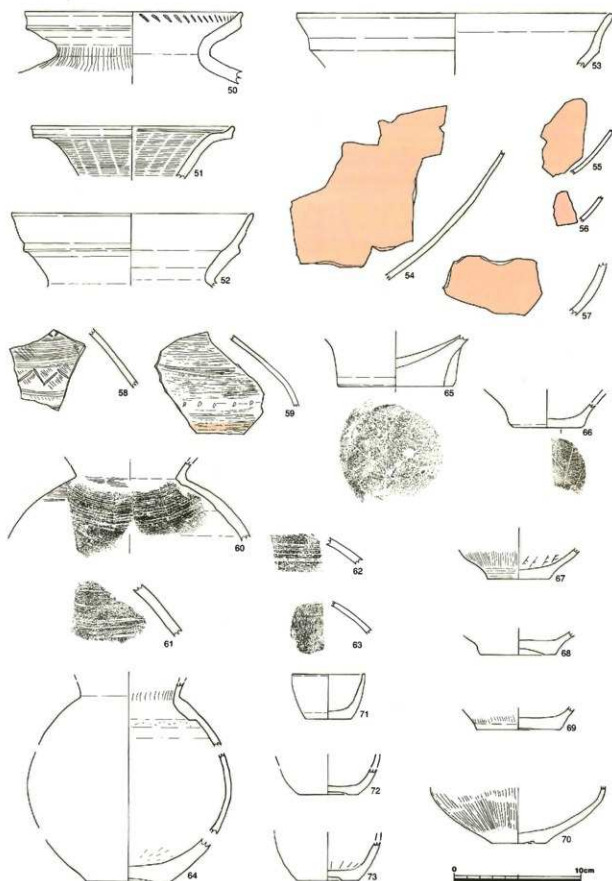
- 註1 きざなみ会「浪ノ上遺跡調査日誌」『いづみ』 牛川青年団 1950
本調査中、石川一美氏より報告書の資料にと『いづみ』の原本をいただいた。深く謝意を表するものである。
- 註2 浪ノ上1号墳については江戸後期の絵図と口承により、浪ノ上村と神ヶ谷村の間に設けられた境塚7基とA-SZ1、浪ノ上1号墳、浪ノ上2号墳（久永氏の註3の文献によるとD区の加藤正司氏宅の辺りに存した）、稲荷山1号墳、稲荷山2号墳の5基を併せたものと推定される。
- 註3 久永春男「浪ノ上第1号墳」『石巻文化財 第6号』 石巻地区文化財保存会 1984
- 註4 赤塚次郎「S字甕甕書 '85」『年報 昭和60年度』 愛知県埋蔵文化財センター 1986
- 註5 久永春男・斎藤嘉彦「三河における古墳出土須恵器の編年」『天神山古墳群』 愛知県立岩津高等学校 1967
芳賀陽「東三河における古墳出土須恵器の編年」『二本松古墳群』 愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団 1976
伊藤憲「遺物」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第47集 水神古窯灰原』 豊橋市教育委員会 1998
- 註6 杉崎章「柳ヶ坪貝塚」 愛知県知多郡横須賀中学校 1953
- 註7 藤田等・川越哲志「弥生時代鉄器出土地地名表」『日本製鉄史論』 たたら研究会 1970
- 註8 「関東における古墳出現期の諸問題〈資料〉」 日本考古学協会 1981
- 註9 大塚初重「大和政権の形成—武器武具の発達」『世界考古学大系 第3巻』 平凡社 1959
- 註10 久永春男「弥生式土器総括」『瓜郷』 豊橋市教育委員会 1963
久永春男・芳賀陽「欠山貝塚」『瓜郷』 豊橋市教育委員会 1963
- 註11 久永春男・斎藤嘉彦・杉浦茂治「王江遺跡」『高浜町誌資料第3 愛知県碧海郡高浜町の先史・古代遺跡』 高浜町誌編纂委員会 1966
斎藤嘉彦「王江式土器について」『岡崎市岩津町於御所遺跡—第2次調査』 岡崎市教育委員会 1974
斎藤嘉彦「伊保遺跡出土の王江式土器」『愛知県豊田市伊保遺跡』 猿投遺跡調査会 1974
芳賀陽「瓜郷上層第3様式土器」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第93集 瓜郷Ⅱ』 豊橋市教育委員会 2006
- 註12 芳賀陽「青山貝塚—渥美半島における古代漁村の土器」『古代学研究 20』 古代学研究会 1959
久永春男・斎藤嘉彦「高橋遺跡出土の弥生式土器と土師器の編年」『高橋遺跡』 豊田市教育委員会 1969
- 註13 米田敏幸「土師器の編年 近畿」『古墳時代の研究』 雄山閣 1991
- 註14 パレオ・ラボAMS年代測定グループ 小林祐一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・山形秀樹・瀬谷薫・Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎 「放射性炭素年代測定」 株式会社パレオ・ラボ 2006・2007
- 註15 註14に同じ



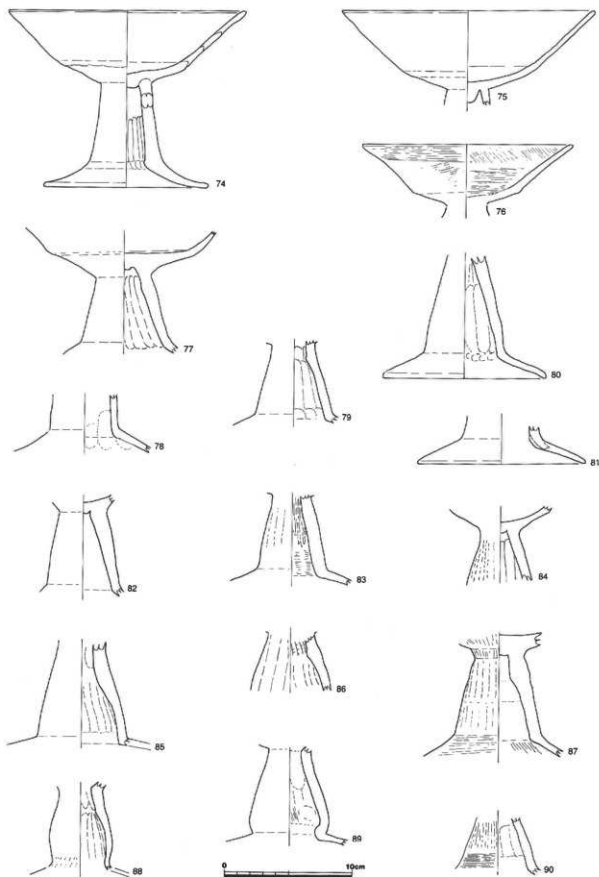
挿図第86 南東周溝1区出土遺物実測図1



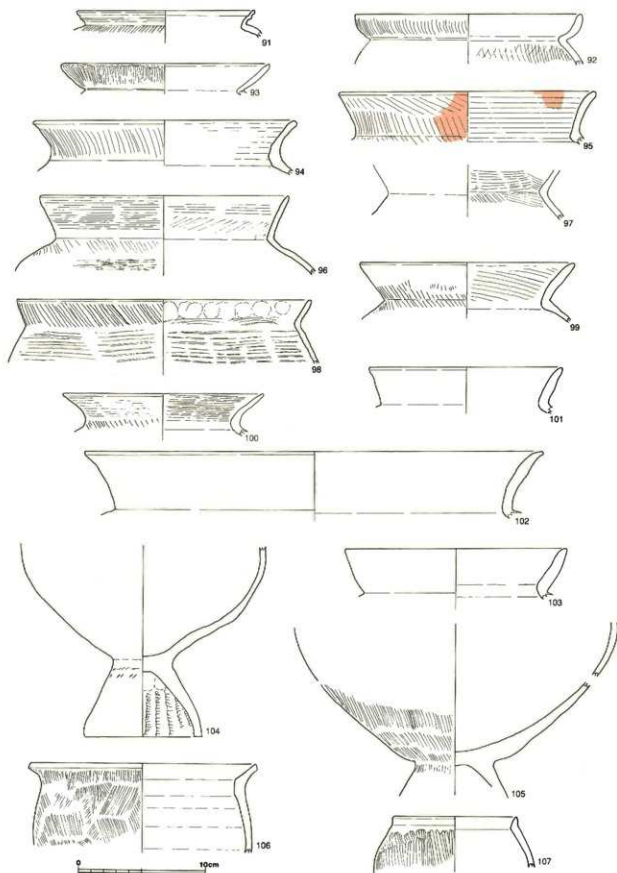
挿図第87 南東周溝1区出土遺物実測図2および南東周溝2区出土遺物実測図1



挿図第88 南東周溝2区出土遺物実測図2

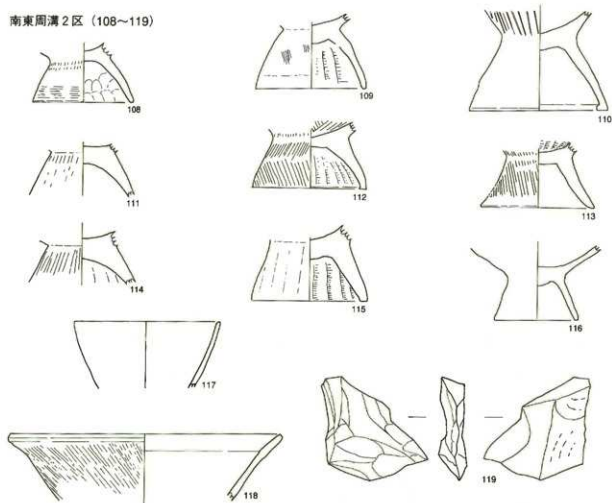


挿図第89 南東周溝2区出土遺物実測図3

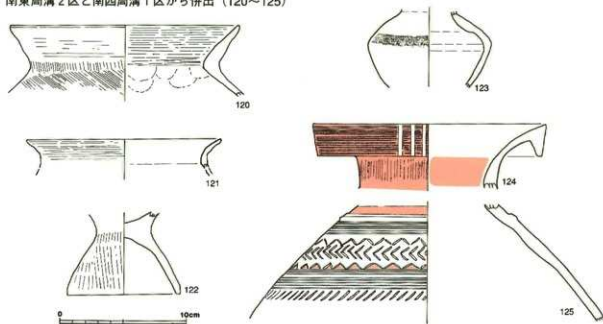


挿図第90 南東周溝2区出土遺物実測図4

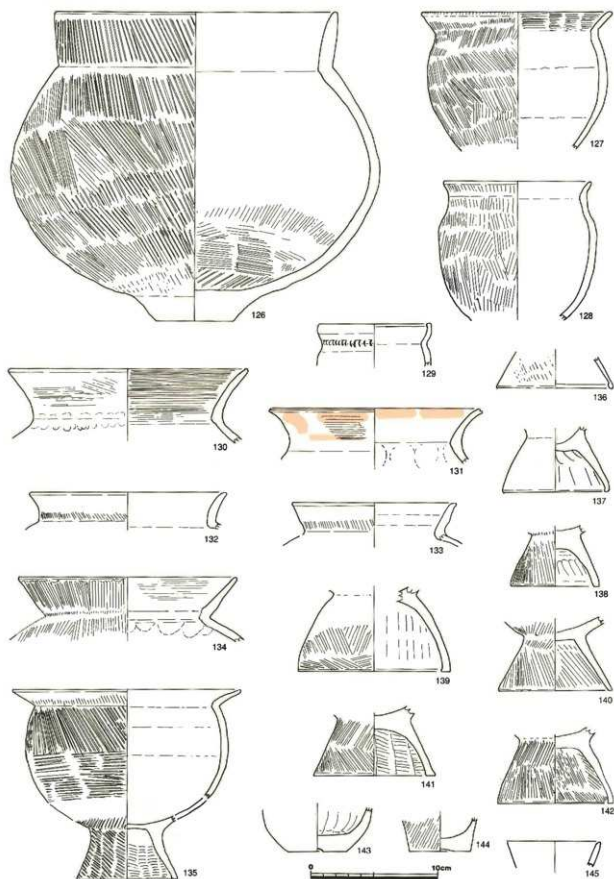
南東周溝2区 (108~119)



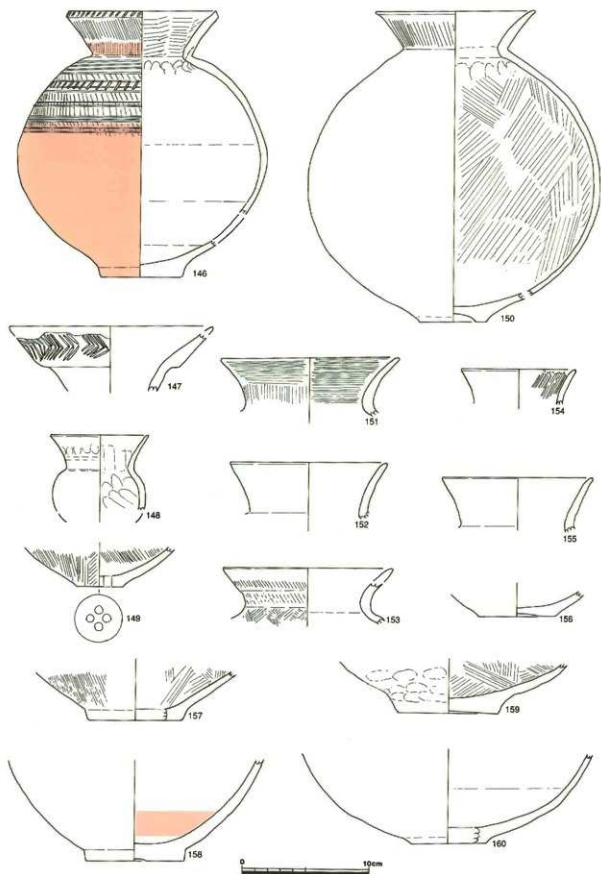
南東周溝2区と南西周溝1区から併出 (120~125)



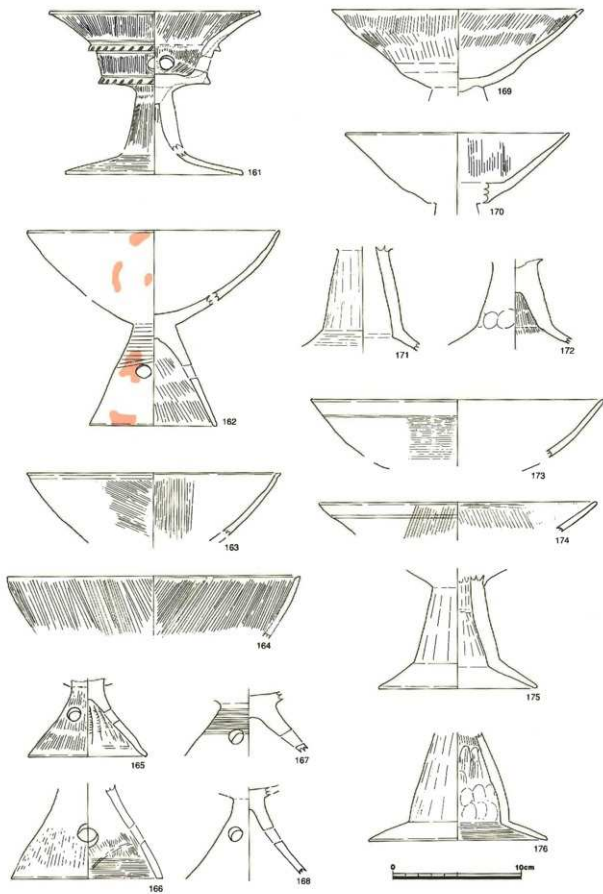
挿図第91 南東周溝2区出土遺物実測図5および南東周溝2区と南西周溝1区併出土遺物実測図



挿図第92 南西周溝1区出土遺物実測図1



挿図第93 南西周溝1区出土遺物実測図2



挿図第94 南西周満1区出土遺物実測図3

南西周溝2区 (177・178)



177



178

南西周溝1区 (179~201)



179



184



190



180



185



191



181



186



192



182



187



193



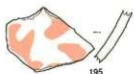
183



189



194



195



196



197



198

199

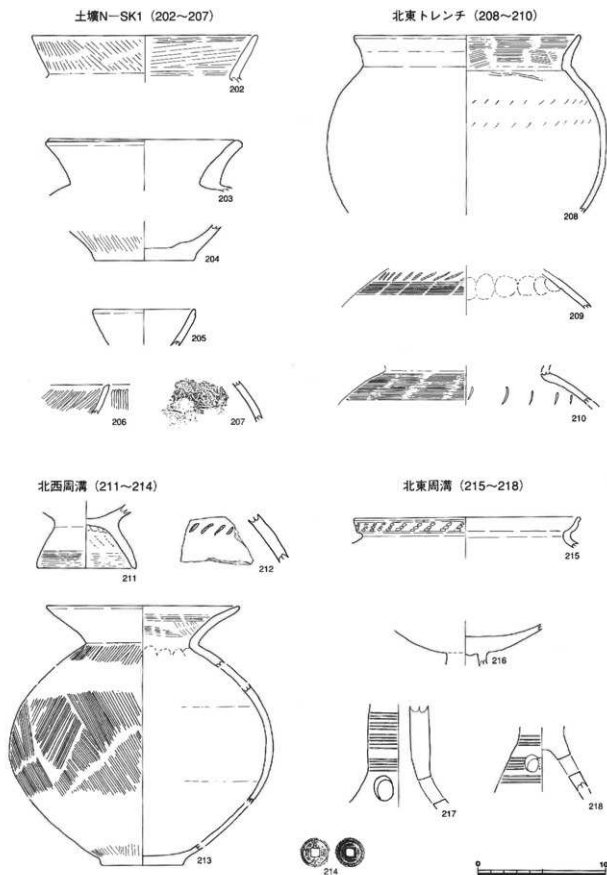


200

201

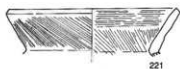
0 10cm

挿図第95 南西周溝1区出土遺物実測図4および南西周溝2区出土遺物実測図

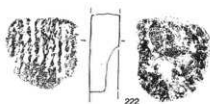


挿図第96 土壙N-SK1、北東トレンチ、北西周溝、北東周溝出土遺物実測図

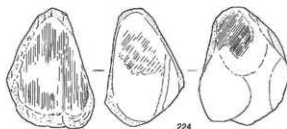
東トレンチ (219~221)



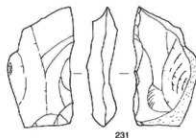
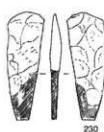
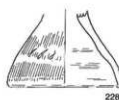
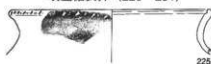
北東トレンチ (222)



東トレンチ北東トレンチの間 (223・224)



墳丘裾表採 (225~231)

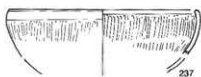


墳丘南東部 (232~236)



挿図第97 東トレンチ、北東トレンチ、東トレンチと北東トレンチの間、
墳丘南東部および表採遺物実測図

中央トレンチ (237~239)



237

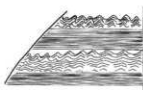


238



239

N-SB1 (240~262)



240



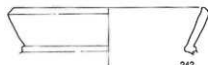
241



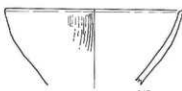
243



244



242



245



246



247



249



252



253



254



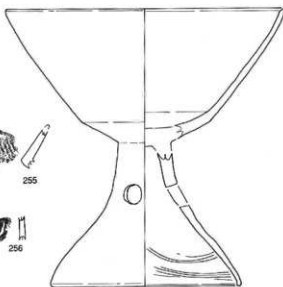
255



250



251



248



260



259



261



262



258



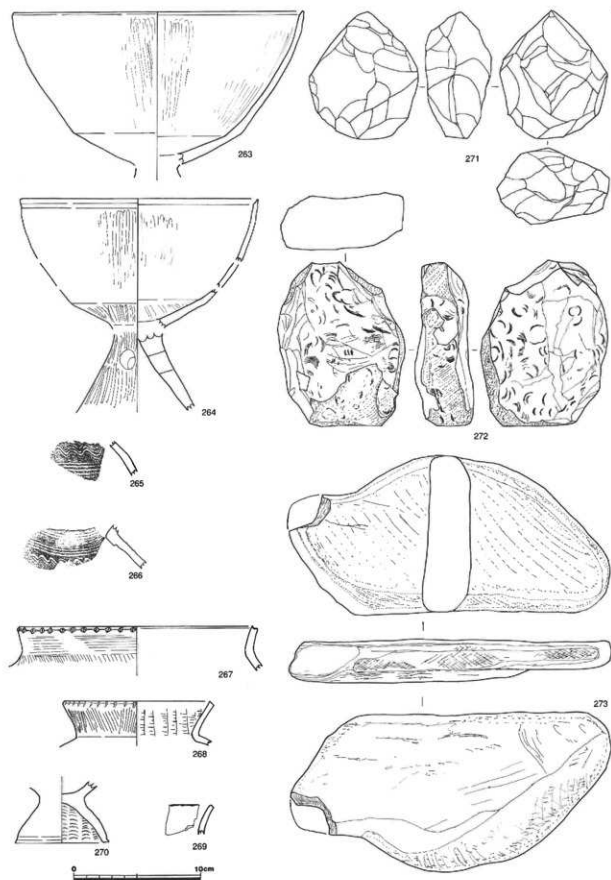
256



257



挿図第98 中央トレンチ、竪穴住居址N-SB1出土遺物実測図



挿図第99 竪穴住居址N-SB2出土遺物実測図

第4章 稲荷山2号墳

第1節 墳丘

1、位置、地形及び墳丘（挿図第100、図版第76・第77）

浪ノ上1号墳と稲荷山1・2号墳の間には「かにあらゐの沢」とよばれる谷がある。この谷には正円寺西方に湧き水源をもつ清水を利用した谷田が営まれていた。稲荷山1・2号墳と接する牛川稲荷社の西には「しみず坂の沢」とよばれる谷がある。稲荷山1・2号墳はこの2つの谷によって開析された舌状の段丘上にあり、北の段丘下には神田川や豊川による沖積平野が展開する。墳丘の北裾には半呂用水が流れ、その建設の際の土取り工事のため稲荷山2号墳の墳丘の北半分は崖状に掘削されている。しかし墳丘南部と東隅、西隅のコーナーが僅かに残存し、およその全形を知ることができる。本調査時の地籍は豊橋市牛川町字西郷103の3であったが、現在は豊橋市浪ノ上町1番地に属する。

稲荷山2号墳のある辺りは標高約20mである。挿図第1で示すように標高20.1mまでは稲荷山2号墳の裾を巡らざる谷沿いに流れていくが、標高20.2mからは不整形ながら東西10.5m、南北12mの長方形を描き、墳頂は標高20.9mをはかる。標高20.2mから20.9mまでの8本の等高線は円を描くことなく、ラインはほぼ直線状でありコーナーは直角に近い。即ち方墳であり、その高さは現状で70cm程度である。

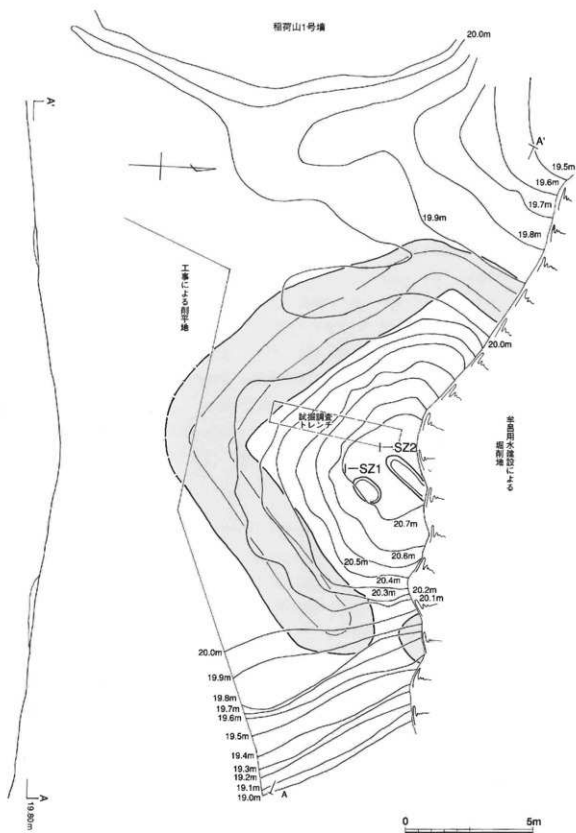
稲荷山2号墳の西方には、北から流れる標高20.1mの等高線が同墳の西裾に沿って南方へ5mほどのび、墳丘の南辺に至るやや手前でUターンをする。これは、浪ノ上1号墳でも墳頂に認められた埋もれ切れない周溝の痕である。これは、稲荷山1号墳の東墳丘裾の標高20.1m、20.0m、19.9mの等高線にも同様の状態を認めることができた。

墳丘中央部には南北に東西1m、南北5.2mのトレンチが設けられていた。これは、1980（昭和55）年1月、浪ノ上遺跡範囲確認調査の際設定されたもので、詳細は「浪ノ上遺跡範囲確認調査」（註1）を参照されたいが、その時点では墳丘であるとの確認はなされていなかったようである。

2、墳丘封土の層序（挿図第101・102）

（1） 第1トレンチ（南壁）の層序

黄褐色粘土層（8層）をベースとするところは、浪ノ上1号墳と同様である。標高19.95mのラインでほぼ均一にならし、地山（8層）を削り出し周辺を方形に整える。この上に10cm～15cmの厚さで灰褐色土層（7層）が上盛りされる。この土層は土が粒状で礫は殆んど含まれない。この上に若干粘性があり、1cmほどの小礫を少し含む黄褐色土層（6層）がみられる。この土層は端部で20cmと厚いが、他では5cm前後とうすい。この上には10cmほどの厚みの淡灰褐色土層（5層）が覆うが、礫は殆んど含まれない。この5・6層は墳丘の縁端から1.25m～1.5mほど中心に入ったところから積み重ねられているが、淡黄褐色砂礫層（4層）は10cm～40cmの厚さで墳丘全体を覆うように積み上げられている。この層は5mm～30mmの礫混りて固く締まっている。



挿図第100 稲荷山2号墳の墳丘および周溝実測図

周溝は上端で約3m、下端で1.75m、深さは20cm～40cmである。表土層が削平されているので不明な点もあるが、周溝の断面は鍋底型をなしている。この周溝が墳丘に接する辺を内縁、周溝の外周部分を外縁とよぶことにする。周溝の内縁部と外縁部に流れこんでいるのは淡灰茶色土層（3層）である。その上を周溝内縁側で40cm、外縁側で5cm堆積するのが淡黒褐色有機土層（2層）である。土は1cmほどの褐色ブロックを含んでいる。1層は周溝上層に堆積した黒色有機土層である。このことは周溝底面が黄褐色粘土層で不透水性があることから周溝が埋没するまでは、水分の多い周溝内に植物が繁茂したり、周辺の有機物が流れこんだりした時期のあったことを示している。

(2) 第2トレンチ（東壁）の層序

黄褐色粘土層（16層）をベースとし、その上を黒褐色有機土層（15層）が15cm前後の厚みで覆う。この15層の縁端を包むように暗茶褐色土層（14層）が墳丘裾を20cm前後の厚みで積み上げられる。その14層を包むように暗褐色土層（13層）が10cm～20cmの厚みで置かれる。この13層の内側に濃茶褐色土層（12層）が幅50cm、高さ17cmほどに積み重ねられ、その内側に黄褐色土層（11層）が15cm～30cmほど築き固められた層があり、その上面に有機物を含む黒褐色土層（10層）が凸レンズ状にあらわれた。断面の幅は75cm、厚さは10cmほどの土壌Ⅰ－S Z 2である。その北端部には小ブロック状に暗黄茶褐色土層（9層）・暗黒褐色土層（8層）が接していた。土壌の西端にかかるように淡黄茶褐色土層（7層）が10cm内外に盛られ、土壌の上面には厚さ20cm～30cmの暗黄褐色土層（6層）が堆積し、さらに淡茶褐色土層（5層）が20cm前後の厚さで盛られている。

周溝は、工事による削平のため一部しか検出できなかったが、周溝内縁寄りに暗灰褐色有機土層（4層）、周溝中央にかけて黒褐色有機土層（3層）が堆積し、その上部を暗褐色土層（2層）、さらに表面を茶褐色土層（1層）が覆っている。

(3) 第3トレンチ（西壁）の層序

地山は黄褐色粘土層（9層）であり、周溝内縁を15cmほど削平しているが、その上面の暗茶灰色層（8層）は、20cm～25cm、厚い部分では45cmの層をなし墳丘の周辺を取り囲むように積み上げられる。その内側には、墳丘下部へ斜行して堆積する礫混りの黄茶色土層（7層）があり、更に内側に斜行して築成される暗茶褐色土層（6層）がある。暗灰褐色土層（5層）と黒褐色有機土層（4層）は周溝埋土である。茶褐色土層（3層）は墳丘の表土であり、その流土である。2層の明茶褐色土層と1層の腐敗物を含む黒色土層は、10cm～15cmの厚みで堆積する。トレンチの北端近くで土崩れがあり土壌Ⅰ－S Z 1の一部が現われた。

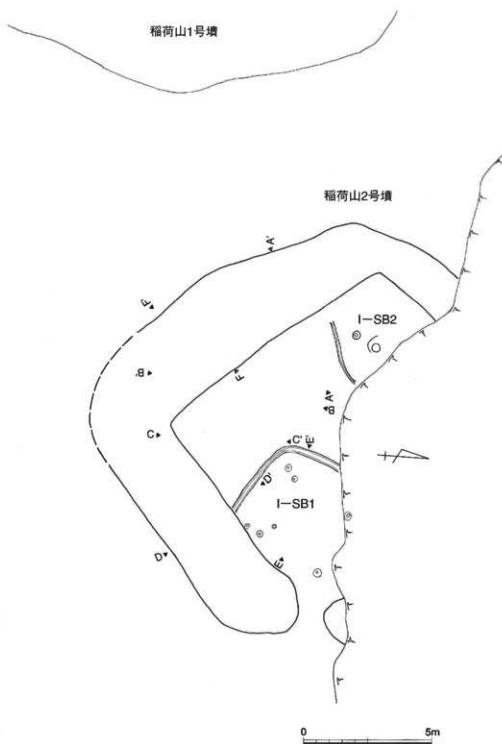
(4) 第4トレンチ（西壁）の層序

墳丘裾から周溝の構造を確認するためのトレンチである。標高19.9mあたりに堆積した黄褐色粘土層（5層）がベースとなり、その西部で約25cmほど削りとり、鍋底状の上端幅3.05mの周溝を掘り上げていく。5層の上面には暗茶褐色土層（4層）が25cm～40cmの厚さで覆う。4層の一部上方には、暗茶褐色土層（3層）が置かれる。この層は5mm～25mmの礫を多く含み、厚さは25cmほどである。

周溝には、黒灰色土層（2層）と黒褐色有機土層（1層）が堆積している。

(5) 第5トレンチ（南壁）の層序

墳丘の東端のトレンチで地山は黄褐色粘土層（12層）である。暗黄茶褐色土層（11層）、暗茶褐色



挿図第101 稲荷山2号墳のトレンチおよび遺構位置図

七層（10層）、黒褐色有機土層（9層）が、この上面を埋めている8層は灰褐色有機土層でブロック状である。暗黄色土層（7層）、暗灰褐色有機土層（6層）で墳丘を広く覆う。黄褐色土層（5層）は5cm～10cmの堆積である。暗黄褐色土層（4層）はブロック状をなす。暗黄灰色土層（3層）は15cm～30cmの厚みである。2層は墳丘中央部を覆う明茶褐色土層である。1層は淡茶褐色土層で部分的である。

（6）第6トレンチ（東壁）

周溝の断面を確認するために、第2トレンチの西南、南周溝の中央よりやや東寄りの部分にトレンチを設定する。4層は地山で黄褐色粘土層である。幅3.65mの溝の中段で深さ33cmをはかる。断面形は浅い鍋底状である。3層は暗黄灰色有機土層で墳丘裾を埋めている。2層は暗灰褐色有機土層でやはり周溝の埋土、1層も同じく周溝埋土で黒褐色有機土層である。

3、墳丘トレンチ出土の遺物

（1）第3トレンチ出土遺物（挿図第106）

壺 5はくの字口縁が短くひらく。口唇は角張り、内外面ナデ調整である。

（2）第5トレンチ出土遺物（挿図第106）

壺 6は短くひらく口縁部をもつ。口唇は角張り、内面に横ハケが残る。7はなだらかな口頸部で口唇が角張る。口縁外面には2条の沈線がめぐらされている。8はひらきの小さい口縁部が直状にのびる。口唇上面には沈線がめぐっている。外面は縦のハケメ、内面は板状器具で横ハケ調整される。9は8よりも口径が大きく、口唇部に沈線はないが、他は極めて類似している。

壺 10は上胴部で外面には斜め左へのハケメ、内面には指痕がのこる。11～14は波状文や横線文の施された上胴部片である。

（3）墳丘東部出土遺物（挿図第106）

壺 17は横線文が上下2段となり、その間に刺突による鋸歯文が配される。

第2節 周溝

1、周溝の規模（挿図第100、図版第77）

稲荷山2号墳の周溝は、南・西・北周溝は切れることなく連続してつながっている。南側の周溝は東端で切れ、1.5mほど陸橋があり、東と北の周溝は掘削され1～2mしか残存しないので、この部分の陸橋の有無は不明である。周溝の幅は北部で約1.8m、西部で2.5～3.5m、南部で約3m、深さは30cm前後である。墳丘の裾部で東西約10m、南北約10.5mを測り、これに周溝の幅を加えると、径約15m高さ70cmの方墳が想定される。

2、周溝出土遺物（挿図第106・第108、図版第81）

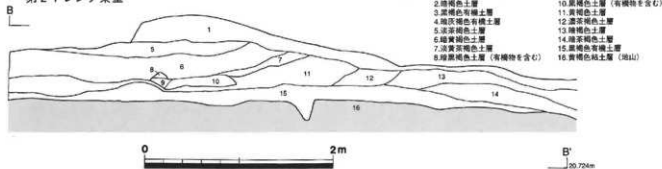
壺 15はくの字状に外反する口縁部で口唇は角張っている。

壺 16は台付甕の脚台部である。底部が厚いのが特徴である。南東部から出土している。

第1トレンチ南壁



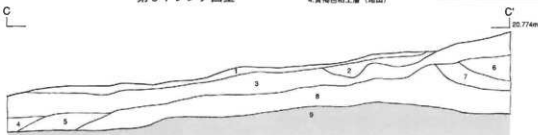
第2トレンチ東壁



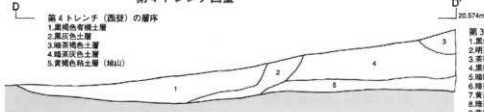
第6トレンチ東壁



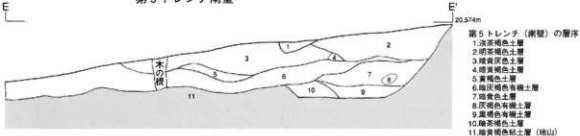
第3トレンチ西壁



第4トレンチ西壁



第5トレンチ南壁



挿図第102 稲荷山2号墳トレンチ断面図

石器 36は剥片で白色に風化している。西南部出土である。

第3節 埋葬主体部

1、土壌 I-SZ1

(1) 土壌 I-SZ1の構造(挿図第103、図版第78・第79)

土壌 I-SZ1は墳丘中央部のやや南西に位置する。土壌は墳丘封土の上から3・4層を掘削している。土壌の平面形は長楕円形で長軸はN-43°-Eを測り、ほぼ北東を指す。長径の上端は1.41m、下端は1.09mである。また短径は上端で0.66m、下端で0.43mである。断面形は浅い鍋底状をなし、最も深いところで上端より18cmをはかる。土壌内には黒褐色有機土層が堆積し、北端やや西寄りに坑(1)が底部を上に向けて床面上に検出された。これより若干大きい坑(2)は横転し口縁部を南西に向け坑(1)に接して出土した。鉢(3)は坑(2)より南西は約10cm離れて、底部を欠損して検出された。遺物はこの3個体であるが、坑(1)の内底面にベンガラが径7mmほど塗布されているのが注目された。

(2) 土壌 I-SZ1出土遺物(挿図第106、図版第81)

出土遺物は土師器で、いずれも土壌床面から出土した。

壺 1は口縁部がやや内彎ぎみに大きく開く。底部は少し突出した平底であり、底径は口径の1/3強である。内外面はナデ調整されている。内底面に径7mmほどの赤彩痕があり、被葬者との関係を設定させるものがある。2は、小さな底部からまっすぐ斜め外方にのび、口縁に至って僅かに内彎する壺である。底部の突出はないが、底面が厚くつくられている。内外面はナデ調整されている。

高杯 3は口径が大きいので高杯の坏部であろう。内外面はナデ調整されている

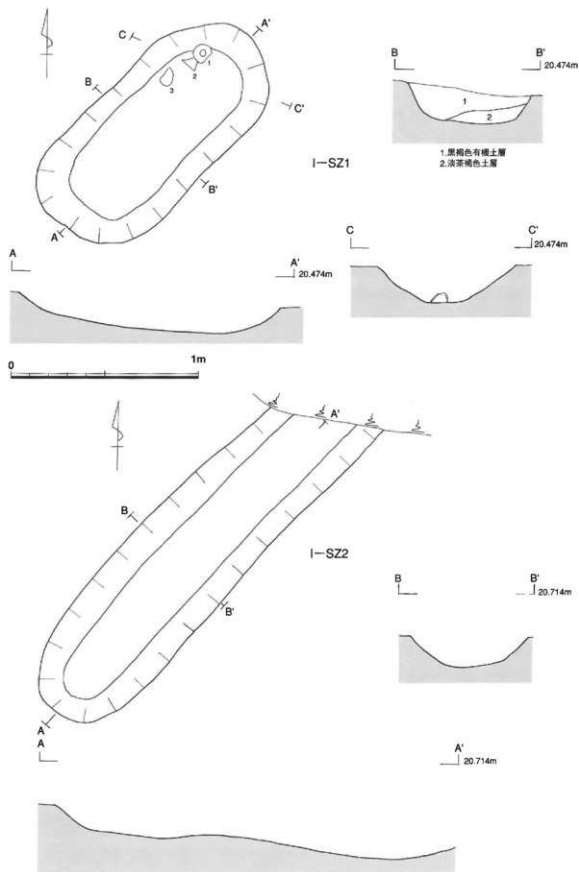
2、土壌 I-SZ2

(1) 土壌 I-SZ2の構造(挿図第103、図版第78・第79)

土壌 I-SK2は土壌 I-SK1の北西にあり、最も近いところで土壌 I-SK1から75cm離れてほぼ平行に設けられている。平面形は両端が隅円の長方形で、長軸はN-50°-Eを指している。北部を半呂用水建設のための土取り工事で欠損しているが、残存部分は、上端で2.30m、下端で2.20mをはかる。短軸は、上端で0.64m、下端で0.30m、断面形は鍋底形であり、深さは約20cmである。この掘り方からみて木棺が置かれた可能性がある。遺物は南端の下端から60cmの位置の埋土(黒褐色有機土)の中程に壺の底部破片(4)が1点検出されたのみである。

(2) 土壌 I-SZ2出土遺物(挿図第106、図版第81)

壺 4は下胴部から底部の破片である。胴部はまるく、底部は平底である。内外面はナデ調整されている。



挿図第103 土壇 I-SZ1・I-SZ2 実測図

第4節 封土下の竪穴住居址

1、竪穴住居址 I-SB1

(1) 遺構(挿図第104、図版第80)

竪穴住居址 I-SB1 は、稲荷山2号墳の墳丘下の北東部にあり、その東部から南部は稲荷山2号墳の周溝がつくられるとき削りとられ、その北部から西部は、半呂用水建設に当り掘削されていた。壁溝はわずかに南壁の西側3.2mとそれに続く西壁の南側2.2mを残すのみであった。しかし幸いなことに主柱穴4個と副柱穴3個が遺存し、竪穴住居址の概略が明らかになった。柱穴は(上端の長径×上端の短径・下端の長径×下端の短径・深さ)の順で示す。単位はcm

P1 (40×30・12×12・23)とP2 (24×23・10×9・15)の間は2.60mをはかる。P2とP3 (36×24・12×12・22)の間は2.76mである。P3とP4 (28×24・11×11・36)の間は2.60mである。またP4とP1の間は2.68mであり、柱穴間の長さは、2.6mから2.76mの間にある。

柱穴から残存する壁溝までの長さを考慮すれば、平面形は胴張りの隅円方形で、その東西径及び南北径は、約5.2mと推定される。なお柱穴の下端の径は前後を測る。また壁溝の幅は10～12cm、深さ3～5cmである。P5 (32×21・10×9・15)とP6 (35×22・12×12・16)は、その位置からみて、P5はP4の、P6はP3の補助柱と考えられる。またP7 (25×25・12×10・41)は南西コーナーに近く、壁溝の外にあることから本竪穴住居址の出入口に関係のある柱穴であろう。

壁の残存率(30%)に比べて床面は約60%が残っていた。炉址は3ヶ所に検出された。炉址1 (16×18)上には台付甕(32・34)が出土した。炉址2 (44×36)からは高坏(28・29)が出土し、その西には炉端石(38)が据え置かれていた。炉址3 (20×20)はP3の西に所在した。三角状の炉端石(39)は炉址1の西方から出た。また壁溝内からは壺(18～24)が検出された。

北半部の床面上にはブロック状をなして木炭・灰・焼土が堆積していた。これはこの竪穴住居址が火災に遭い、北側に焼崩れた状態を留めているのではなからうか。

(2) 遺物(挿図第106～108、図版第81)

ア、壁溝内出土

壺 18は頸部に波状文を有する口縁部である。頸部は細く口唇は面取りされている。19は頸部で一度内彎し、口唇に向けて外反する。口唇はまるい。20は上胴部の破片で上から波状文・横線文・波状文と交互に櫛描き文が施されている。21は横線文・波状文のある小片である。22～24は横線文の施された小片であるが、22は4条、23は3条、24は5条と横線の数が異なる。

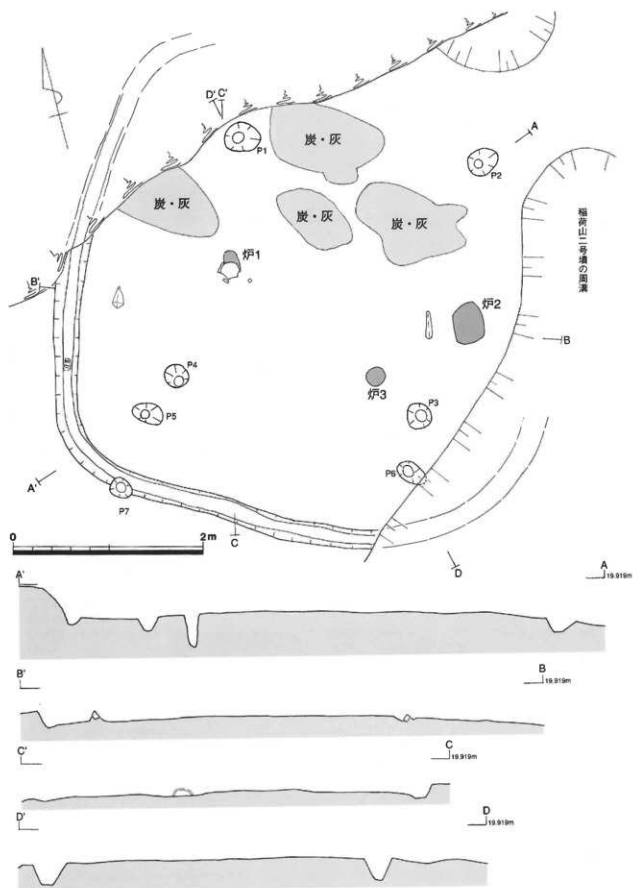
イ、床面出土

壺 25は壺の頸部である。

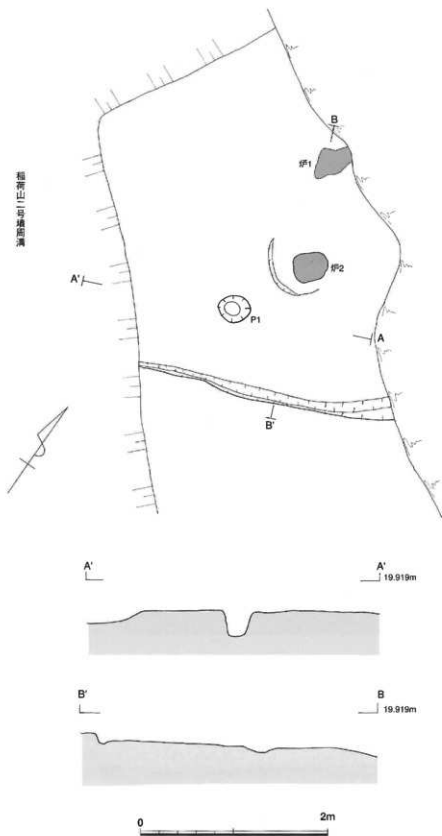
高坏 27は内彎し、脚端で更に内へまがる脚部で、内面ナデ、外面ヘラミガキである。

甕 30は短い口縁で、直状にひらいた口唇を角張らせ、そこに細かな刺突文を丁寧に施す。

炉端石 38は粘板岩、半分は床面下に埋設され、床面上の部分は火熱を受け赤褐色を呈する。39は平面形三角形のチャート礫、上面赤褐色に焼け、炭化物が付着している。



挿図第104 竪穴住居址 I-SB1 実測図



挿図第105 竪穴住居址 I-S B 2 実測図

ウ、炉址1出土

甕 32は口縁短く外反し、口唇を角張らせる。胴部は肩に最大径をもつ倒卵形で、台脚部は直状にひらく。胴部外面は斜め右ハケメ、縦ハケメ、内面はナデ調整をなす。脚端部はまるい。34は短い口縁が直状にひらく。口唇はまるい。口縁外面はナデ、内面は横ハケ調整である。

エ、炉址2出土

高坏 28は脚部で円錐形をなし、脚端でわずかに外反し、脚端はまるい。外面はナデ、内面はケズリ調整である。29は脚で、脚中央から脚端にむけて大きく外反する。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整である。

オ、埋土出土

甕 26は底部で突出タイプである。下底面中央が窪む。外面ヘラミガキ、内面ナデ調整である。

甕 31は口縁短く直状にひらく。口唇は角張る。外面は口縁部から胴部にかけて縦ハケ、内面は口縁部斜め左ハケ、胴部はナデ調整である。33は、口縁部が短く直状にひらき口唇部を角張らせる。外面は口縁部縦ハケメ、上胴部斜め右ハケメ、中胴部斜め左ハケメ。内面は口縁部斜め右ハケメ、胴部はナデ調整である。胴部内面には黒色の炭化物が付着している。

磨石 37は磨石の破砕片でわずかに磨り面が残る。硬砂岩製であろう。

2、竪穴住居址 I-SB2

(1) 遺構 (挿図第105、図版第80)

竪穴住居址 I-SB2は、I-SB1の北に接して検出された。壁は南辺の2.7mが僅かに残存し幅15cm、深さ4cmの壁溝が認められた。柱穴は南壁から70cmほど北にP1(34×28×28)があり下端の径は16cmで柱の太さを想定させる。炉址は2ヶ所あり、炉址1(48×36)・炉址2(36×36)は80cm程の間隔を置いて南北に位置し、その中間の床面から甕(35)が出土した。なお炉址2の西は半円形に削平されていた。

(2) 遺物 (挿図第106~108、図版第81)

甕 35は短くあまりひらかない直状の口縁部で、口唇は角張る。口縁内外面に横のハケメ、上胴部には外面縦のハケメ、内面ナデ調整である。

第5節 年代と性格

稲荷山2号墳は、深さ30cm前後、幅1.8m~3.5mの周溝に囲まれた径約15m、高さ70cmの方墳である。墳丘の封土上部に2基の上墳を設けていた。土壌I-SZ1には副葬品として3個の土師器が埋納されていた。その中の甕(1)と甕(2)は、弥生時代の欠山式土器の影響を強く残すものであり、古式土師器でも前期の初頭に属するものであろう。

甕(1)の内底面のベンガラは、靱い清める呪力があるとされた(註2)ことから当時の祭祀の様相の一端を示している。

土壌I-SZ2は2.3m以上を保持するが、土壌I-SZ1は、長さが1.41mと短小であることから

して、親子の関係が夫婦の関係が不明であるが、その土壌を覆う土層の乱れがないことからほぼ同時に埋葬されたものと推定される。

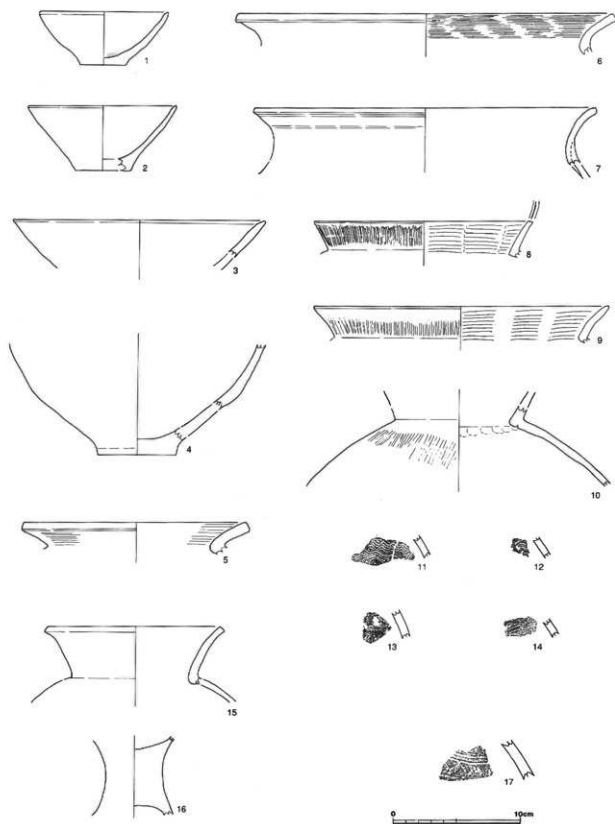
封土下の2軒の竪穴住居址は、欠山式土器が用いられた時代に営まれたもので、古墳の築造とはそれほど時代の開きはないと思われる。因に、放射性炭素年代測定（注3）によれば、封土下のI-S B1の年代は、60BC（95.4%）60ADという結果を得た。紀元前1世紀中頃から西暦1世紀中頃の時期にあたり、弥生時代中期から後期に相当すると考えられている。

稲荷山2号墳の被葬者は牛川段丘を占地し、段丘崖下の沖積地に営まれた水田や谷田を支配した地方豪族の構成員であったであろう。浪ノ上A-SZ1・浪ノ上2号墳、浪ノ上1号墳、稲荷山2号墳、稲荷山1号墳と牛川段丘の縁辺に沿って方形の墳墓が営まれる体制は、次の政治体制の象徴たる前方後方墳への転換期を迎えんとする古墳時代前期の様相の一端を具現化しているようである。

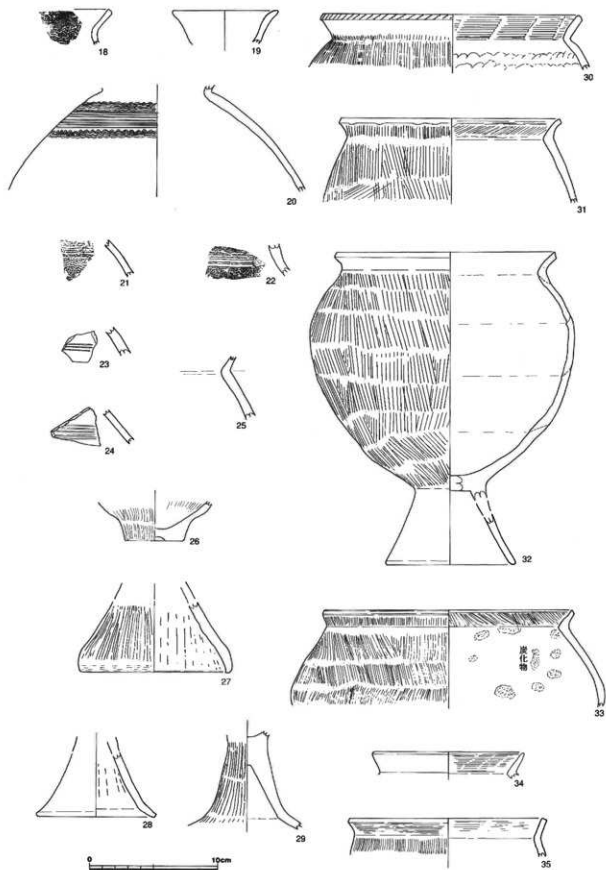
注1 木下克己・森田勝三「浪ノ上遺跡範囲確認調査」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集』1豊橋市教育委員会 1982

注2 白川静「字訓」平凡社 1995

注3 パレオ・ラボAMS年代測定グループ 小林絃一・丹生節子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎「放射性炭素年代測定」株式会社パレオ・ラボ 2007



挿図第106 土壇Ⅰ-SZ1・Ⅰ-SZ2、第3トレンチ、第5トレンチ、周溝南東部、
墳丘東部出土遺物実測図



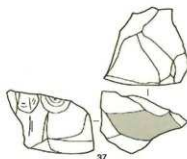
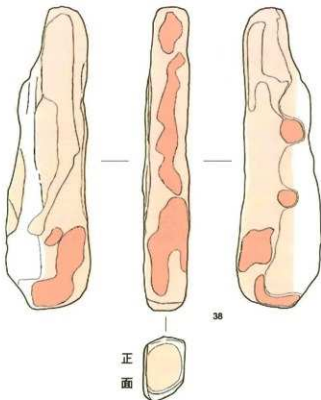
挿図第107 竪穴住居址Ⅰ-SB1・Ⅰ-SB2出土遺物実測図

炉端石1

左側面

上 面

右側面



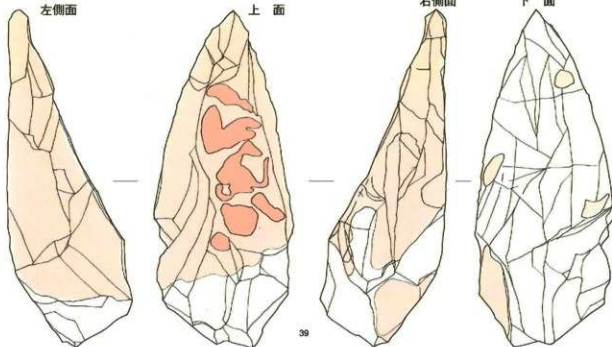
炉端石2

左側面

上 面

右側面

下 面



薄赤色部分は被熱部分

濃いアミ目は火熱が強く焦げついている部分

挿図第108 竪穴住居址Ⅰ-SB1、周溝南東部出土遺物実測図